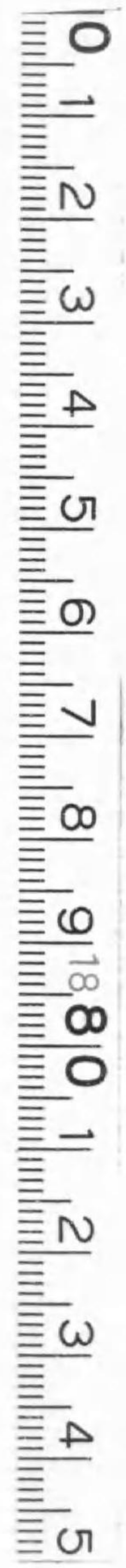


378
641

註
枝
雨
月
物
語



始



特214
292



雨月物語

昭和十三年
改訂版



例言

- 一 本書は高等専門學校程度諸學校の國語科教科用書として編纂した。
- 一 本書は昭和三年改訂本に就いて更に改訂増補したものである。
- 一 本書の原本は舊版三種を定本としたのである。いづれも安永五年孟夏刊行の記がある。今一種は大坂文榮堂藏版の扉があつて刊記は削つてある。合綴した美濃版である。最も後摺であらう。
- 一 原本の序に「明和戊子晩春」とある戊子は五年、秋成三十五歳の時に當る。刊行は安永五年で、九年の後である。
- 一 原本は毎篇全部文章を平押しに書き續けてあるが、讀者の便宜の爲に、其の文義の斷續に従つて別行にした。又人物の對話引用の語句には括弧を施した。
- 一 原本は漢字にすべて振假名を施してある。今は特別の讀方の外は大概削除し、務めて簡に從つた。

- 一 頭註は特に注意すべき語句の解釋及び其の出典等を記すに止めた。
- 一 本書校訂に當り用字送假字振假字は多く舊に従つた。但し誤字の明らかなものは改めたものもある。
- 一 卷頭に「解説」と巻尾に「参考資料」とを添へたるは讀者が研究の便に資する微衷である。
- 一 讀者諸彦より種々の御注意を賜はつたのは有り難い次第である。因つて改訂を施し謹んで謝意を表する。

昭和十二年十二月改版に際して

佐藤仁之助記す

校註 雨月物語 目次

解説	一
序	三
卷之一	
白 峯	五
菊花の約	一九
卷之二	
淺茅が宿	三五
夢應の鯉魚	五二
卷之三	
佛法僧	六一
吉備津の釜	七五
目次	一

卷之四

蛇性の姪

八九

卷之五

青頭巾

一一九

貧福論

一三三

○

雨月物語に關する參考資料

一四七

解説

「雨月物語」の書かれた頃は、支那の稗史小説に據つた怪異談が流行した時である。獨り秋成は独自の藝術觀から更に原據を離れて、拔羣の作を大成した。されば、其の名は「古今怪談」といへど、實は秋成が蘊蓄を傾けて古今の人物を假りて脚色を施し、幽怪凄慘の限りを盡したのである。其の題材と文辭とは上古の歌或は平安朝の物語を利用して當時の讀者を感歎せしめ、且つ其の氣分を味はせたのは、全く秋成其の人の表現でなくて何であらう。

換言すれば、「雨月物語」は當時の社會改良の大議論文といふべきものである。例へば、「白峯」に於て我が「王道」と支那の「民主主義」との相違を詳論し、又藝術價值からいへば、「淺茅が宿」「佛法僧」「蛇性の姪」に於て、我が古典の趣味を鼓吹し、「青頭巾」に於て禪僧の眞價を表はしたなどは、何人も知る所であらうが、最後の「貧福論」に至つては實在の人岡野佐内と、金の精靈との對話に托して經濟論を闘はせ、更に古今の英雄豪傑の國家觀念と經濟觀念なきもの天下統一は望むべからざることを斷言したときは、實に意外中の意外で、蓋し當時にあつて空前の大發見であらう。讀者先づ此の意を得たら、善く我が古今の書を讀破した收穫を得

ると信ずる。

「雨月物語」を読む者は、第一に以上の要領を得て、次に秋成の生涯を知らなくてはならぬ。秋成は生れて實の父を知らず、上田家に養はれ、四歳で實母を喪ひ、尋いで又養母に別れ、更に後の母に養はれた。而も少年の折重い痘瘡を患ひ、不具の身となつた。若くして放蕩の限りを盡した。學問は和漢の學に秀でたが、通例の學者たるを喜ばない。本居宣長を「古事記傳兵衛」と罵る程であつたから、まして天下の學者を睥睨した。實に畸人である。序文に「剪枝畸人」とは何を語つたものであらう。

文化六年七十六歳で京都に歿した。傳へていふ。生前の草稿は臨終の際、皆悉く井中に投じた。今に傳はるものは、愛讀者が秘して持ち傳へたものといふ。晩年の隨筆「膽大小心録」は讀者の必ず見逃すべからざるものである。

雨月物語序

○羅子—支那錢塘の羅貫中の敬語。南宋の時の人。その書ける小説中水滸傳最も名高し。
○紫媛云々—紫式部が源氏物語を著したる事。惡趣は三惡趣、即ち三惡道。
○陰喚—或は陰喚の誤か。陰喚は夢寐の聲。
○雉雌—雌は雉の鳴くこと。
○杜撰—「ツサン」(字の唐音)詩文著作などに典故の出處もなきこととを述ぶる意。
○明和戊子—百十七代後櫻町天皇の御世の年號。戊子は五年。
○剪枝畸人—上田氏の別號。

羅子撰水滸。而三世生啞兒。紫媛著源語。而一旦墮惡趣者。蓋爲業所徧耳。然而觀其文。各奮奇態。陰喚逼真。低昂宛轉。令讀者心氣洞越也。可見鑑事實于千古焉。余適有鼓腹之閑話。衝口吐出。雉雌龍戰。自以爲杜撰。則摘讀之者。固當不謂信也。豈可求醜唇平鼻之報哉。明和戊子晚春。雨霽月朦朧之夜。窓下編成。以昇梓氏。題曰雨月物語云。剪枝畸人書。

羅子は水滸を撰して三世啞兒を生み紫媛は源語を著はして一且惡趣に墮つと。蓋し業に偏らるゝのみ。然して其の文を觀れば各々奇態を奮ひて陰暎眞に逼る。低昂宛轉讀者をして心氣洞越せしむ。事實を千古に鑑見るべし。余適々鼓腹の閑話あり。口を衝いて吐き出す。雄雌き龍戰ふ。自から以爲杜撰なりと。則ち之を摘讀せん者は固より當に信と謂はざるべし。豈醜唇平鼻の報を求むべけんや。明和戊子の晩春、雨霽れて月朦朧たる夜、窓下に編成し以て梓氏に畀ふ。題して雨月物語と曰ふと云ふ。剪枝時人書す。 圓圓

雨月物語卷之一

白 峯

○あふ坂の云々—京都から東海道へ出發しての意。おふ坂は大津市の南。古代關所があつた。
○不盡の高嶺の煙—新古今集、十七、雜中、西行異本山家集、戀風になびく富士の煙の空に消えて行方も知らぬ我が思かな。
○仁安三年—七十九代六條天皇の御世の年號。
○しめつも—しめつゝもとあるべき格。
○觀念修行—諸法の道理を心に想ひ浮べて知る爲に道を守り善行を修すること。

あふ坂の關守にゆるされてより、秋こし山の黄葉見過しがたく、濱千鳥の跡ふみつくる鳴海がた、不盡の高嶺の煙、浮島がはら、清見が關、大磯小磯の浦々、むらさき艶ふ武藏野の原、鹽竈の和ぎたる朝げしき、象潟の蟹が苦屋、佐野の舟梁、木曾の棧橋、心のとゞまらぬかたぞなきに、猶西の國の歌枕見まほしとて、仁安三年の秋は、霞がちる難波を経て、須磨・明石の浦ふく風を身にしめつも、行く／＼讚岐の眞尾坂の林といふに暫らく節を植む。草枕はるけき旅路の勞にもあらで、觀念修行の便せし庵なりけり。

○白峯—山家集正本に「しろみね」とあり、今は「シラミネ」と訓む。
 讃岐國綾歌郡松山村。
 ○新院—七十五代崇徳天皇の尊號。鳥羽院の一院に對する稱。
 ○陵—「ミササギ」と訓む。今は「ミササギ」といふ。
 ○青雲云々—萬葉集十六、彌彦のおのれ神さび青雲の棚引日すら小雨そぼ降る。」

○近衛院—七十六代近衛天皇、鳥羽天皇第八皇子。
 ○藐姑射の山—支那で仙人の棲むといふ山。太上天皇の御所の稱とす。莊子、「藐姑射之山、有神人居焉、肌膚如氷雪、淖約若處子。」
 ○瓊の林—禁苑の意。

この里ちかき白峯といふ所にこそ、新院の陵ありと聞きて、拜みたてまつらばやと、十月はじめつかた彼の山に登る。松柏は奥ふかく茂りあひて、青雲の輕靡日すら小雨そぼふるがごとし。兒が嶽といふ嶮しき嶽背に聳だちて、千仞の谷底より雲霧おひのぼれば、咫尺をも鬱悒さこちせらる。木立わづかに開たる所に、土墩く積みたるが上に、石を三かさねに疊みなしたるが、荆棘薜蘿にうづもれて、うらがなしきを、これならん御墓にやと、心もかさくらまされて、さらに夢現をもわきがたし。

現にまのあたり見奉りしは、紫宸・清涼の御座に朝政さこしめさせ給ふを、百の官人は、かく賢き君ぞとて、詔恐みてつかへまつりし。近衛院に禪りまして、藐姑射の山の瓊の林に禁させ給ふを、思ひきや、麋鹿のかよふ跡のみ見えて、詣で仕ふる人もなき深山の荆の下に神がくれ給はんとは。萬乗の君にてわたらせ給ふさへ、宿世の業といふもののおそろしくもそひたてまつりて、罪をのがれさせ給はざりしよと、世のはかなきに思ひつゞけて、涙わき出づるがごとし。

終夜供養したてまつらばやと、御墓の前のたひらなる石の上に座をしまして、經文徐に誦しつゝも、かつ歌よみてたてまつる。

松山の浪のけしきはかはらじを

かたなく君はなりまさりけり

なほ心怠らず供養す。露いかばかり袂にふかゝりけん。日は没りしほどに、山深き夜のさま常ならね、石の牀、木葉の衾いと寒く、神清み、骨冷えて、物とはなしに凄じきこちせらる。月は出でしかど、茂きが林は影をもらさねば、あやなき闇にうらぶれて、眠るともなきに、まさしく「圓位」とよぶ聲す。

眼をひらきてすかし見れば、其の形異なる人の、背高く瘦せ衰へたるが、顔のかたち、著たる衣の色紋も見えて、こなたに向ひて立てるを、西行もとより道心の法師なれば、恐しともなくて、「こゝに來たるは誰ぞ」と答

○供養—三寶（佛、法、僧）に財物と善行とを供へて、これを資養すること。
 ○松山の云々—山家集下、雜に出で、五句、なりましにけり」とあり。
 ○松山—讃岐國綾歌郡林田村の地か。
 ○茂きが林—繁茂せる木立。大祓祝詞をちかたのしげがもとを燒鎌の利鎌をもて打はらふことのごとく云々に據る。
 ○うらぶれて—茫然として。
 ○圓位—西行の別稱。
 ○道心の法師—佛法の正道を得てゐる法師。
 ○答ふ—普通には問ふとあるべき格。

ふ。かの人いふ、「前さきによみつる言葉のかへりごと聞えんとて見えつるなり」とて、

「松山の浪にながれてこし船の

やがてむなしくなりにけるかな

喜うれしくまうでつるよ」と聞ゆるに、新院の靈なることを知りて、地にぬかづき、涙を流していふ、「さりとていかに迷はせたまふや。濁世だうよを厭離し給ひつることのうらやましく侍りてこそ、今夜こよひの法施に隨縁したてまつるを、現形げんぎやうし給ふは、ありがたくも悲しき御心にし侍り。ひたぶるに隔生きやくせい即忘して、佛果圓滿の位に昇らせ給へ」と情こころを盡して諫め奉る。

新院あら呵々と笑はせ給ひ、「汝知らず。近來ちかごろの世の亂は朕わががなす業わざなり。生きてありし日より魔道に志をかたぶけて、平治の亂を發おこさしめ、死して猶朝家に祟をなす。見よ、やがて天が下に大亂を生ぜしめん」といふ。西行この詔に涙をとどめて、「こは淺ましき御心ばへをうけたまはるもの

○松山の云々—山家集下、雜「讃岐にまうでて松山と申す所に院おはしましけん御跡たづねけれどもかたもなかりければ」とありて此の歌出づ。本文は新院の御製としてある。
○濁世を厭離—現在惡事の多い此の世を死して去る事。濁世は五濁惡世の略。五濁は劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁。
○法施に隨縁—法施は出世の正法を説きて他を開悟得道せしむること。隨縁は縁に應じて供養すること。
○隔生即忘—死して現世の妄執を忘る事。
○魔道—佛法を妨ぐる惡魔の邪道。
○御心ばへ—御料簡。

○天の神—天照大御神。

○永治の昔—崇徳天皇の御世の年號、翌年四月康治と改元、近衛天皇の御世となる。
○父帝—七十四代鳥羽天皇。
○體仁—纂修御系圖に「ナリヒト」とあり。近衛天皇の御諱。
○美福門院—藤原得子。贈太政大臣長實の女。鳥羽法皇の妃、近衛天皇の御生母。
○雅仁—マサヒト、七十七代後白河天皇の御諱。鳥羽天皇第四皇子。

かな。君はもとよりも聰明の聞えましませば、王道のことわりは、あきらめさせ給ふ。こゝろみに討たうね請まうすべし。そも保元の御謀叛は、天の神の教へ給ふことわりにも違はじとて、おぼし立たせ給ふか。又みづからの人慾じんよくより計策たはかり給ふか。詳つはらに告つらせ給へ」と奏まうす。其の時院の御けしきかはらせ給ひ、「汝聞け。帝位は人の極なり。若し人道上かみより亂ごす則すなは、天の命に應じ、民の望に順うて是を伐うつ。抑、永治の昔、犯せる罪もなきに、父帝の命を恐かしこみて、三歳の體仁たみひこに代を禪よりし心、人慾深きといふべからず。體仁早世ましては、朕わがが皇子の重仁しげひここそ國しらすべきものをと、朕わがも人も思ひをりしに、美福門院が妬ねみにさへられて、四の宮の雅仁まさひこに代を篡うばはれしは深き怨にあらざや。重仁國しらすべき才あり。雅仁何らのうつは物ぞ。人の徳をえらばずも、天が下の事を後宮にかたらし給ふは、父帝の罪なりし。されども世にあらせ給ふほどは、孝信をまもりて、勤色ゆめにも出ださざりしを、崩かくれさせ給ひては、いつまでありなんと、武ぶきこゝろざしを

○臣として云々—周武王殷紂王を伐ちたる故事。
 ○牝雞の晨する—妻が權を專にして夫を蔑するを喻へたる語。書經、牧誓、武王曰、古人有言、曰、牝雞無晨、牝雞之晨、惟家之索。

○震且—支那(シナ)の音譯字。
 ○譽田の天皇—十五代應神天皇。
 ○大鷦鷯の王—仁德天皇の御諱。
 ○菟道の王—菟道稚郎子皇子。

○天業—我が國の天皇の御政事。

○王仁—應神天皇十六年百濟國より論語千字文を携へて來朝す。

○孟子といふ書にあり—孟子、梁惠王下、一人衡行於天下、武王恥之、此武王之勇也、而武王亦一怒而安天下之民。又、賊仁者謂之賊、賊義者謂之殘、殘賊之人謂之一夫。未聞一夫紂一矣、未聞一弑君也。
 ○日本に來らず—五雜俎舊本卷四に出づ。

○兄弟云々—兄弟中悪しくとも外部よりの障害は一所になりて禦ぐ意。詩經、小雅、兄弟閱于牆、外禦其侮。

發せしなり。臣として君を伐つすら、天に應じ民の望にしたがへば、周八百年の創業となるものを、ましてしるべき位ある身にて、牝雞の晨する代を取つて代らんに、道を失ふといふべからず。汝定を出でて佛に姪し、未來解脱の利慾を願ふ心より、人道をもて因果に引入れ、堯舜の教を釋門に混じて朕に説くや」と、御聲あらゝかに告せ給ふ。

西行いよ、恐るゝ色もなく、座をすゝみて、「君が告せたまふ所は、人道のことわりをかりて慾塵をのがれ給はず。遠く震旦をいふまでもあらず、皇朝の昔譽田の天皇、兄の皇子大鷦鷯の王をおきて、季の皇子菟道の王を日嗣の太子となし給ふ。天皇崩御給ひては、兄弟相譲りて位に昇り給はず。三とせをわたりても猶果つべくもあらぬを、菟道の王深く憂ひ給ひて、「豈久しく生きて天が下を煩はしめんや」とて、みづから寶算を斷たせ給ふものから、罷事なくて兄の皇子御位に即かせ給ふ。是れ天業を重し孝悌をまもり忠をつくして人慾なし。堯舜の道といふなるべし。本

朝に儒教を尊みて専ら王道の輔とするは、菟道の王、百濟の王仁を召して學ばせ給ふをはじめなれば、此の兄弟の王の御心を即て漢土の聖の御心ともいふべし、「又周の創武王一たび怒りて天下の民を安くす。臣として君を弑すといふべからず。仁を賊み義を賊む、一夫の紂を誅するなり」といふ事、孟子といふ書にありと人の傳へに聞き侍る。されば漢土の書は經典・史策・詩文に至るまで渡さざるはなきに、かの孟子の書ばかり未だ日本に來らず。此の書を積みて來る船は、必しも暴風にあひて沈没むよしをいへり。それをいかなる故ぞと問ふに、我が國は天照すおほん神の開闢しろしめししより、日嗣の大王絶ゆることなきを、かく口賢しき教を傳へなば、末の世に神孫を奪うて罪なしといふ敵も出づべしと、八百よろづの神の惡ませ給うて、神風を起して船を覆へしたまふと聞く。されば他國の聖の教も、この國土にふさはしからぬことすくなからず。且つ詩にもいはざるや、「兄弟牆に閱ぐとも外の侮を禦げよ」と。さるを骨肉の

○あまさへ—あまつさへ。
 ○一院—鳥羽法皇の尊號。
 ○殯の宮—天皇崩御ありて未だ葬り奉らぬ間、假に御柩にをさめて安置しある宮。
 ○天下は神器—老子の語。天下神器、不可爲也。又漢書敘傳に「不知神器有命、不可奪以智力求也。」
 ○例なき刑—上皇設岐に播遷の御事。
 ○淨土—極樂國。佛教にて佛のまします清淨の國。現世を穢土（エド）といふに對す。
 ○高遠—讃岐土著の武士。保元物語に「國司いまだ御所を作り出されば、當國の在廳散位高遠といふ者の造りたる一字の堂松山といふ所にあるにぞ入れ參らせける。」

愛を忘れ給ひ、あまさへ一院崩御たまひて、殯の宮に肌膚もいまだ寒させたまはぬに、御旗なびかせ弓末ふり立て寶祚をあらそひ給ふは、不孝の罪これより劇しきはあらじ。天下は神器なり。人のわたくしをもて奪ふとも得べからぬことわりなるを、たとひ重仁王の即位は民の仰ぎ望む所なりとも、徳を布き和を施し給はで、道ならぬわざをもて代を亂したまふ則は、きのふまで君を慕ひしも、けふは忽ち怨敵となりて、本意をも遂げたまはで、いにしへより例なき刑を得給ひて、かゝる鄙の國の土とならせ給ふなり。たゞく舊き讐をわすれ給うて、淨土にかへらせたまはんこそ、願はまほしき叡慮なれ」と、はゞかることなく奏しける。
 院、長嘘をつがせ給ひ、「今事を正して罪をとふ。ことわりなきにあらざ。されどいかにせん、この島に謫れて、高遠が松山の家くろに困しめられ、日に三たびの御膳すゝむるよりは、まわりつかふる者もなし。只天とぶ雁の小夜の枕におとづるゝを聞けば、都にや行くらんとなつかしく、曉の千鳥

○鳥の頭云々—有り得べからざる無理なる事にいふ。史記刺客傳贊注、燕丹、求歸、秦王曰、鳥頭白、馬生角、乃許耳。丹乃仰天歎、鳥頭即白、馬亦生角。
 ○五部大乘經—天台宗の所説、華嚴經、大集經、大品般若經、法華經、涅槃經。大乘とは如来教法中最上の教法。
 ○貝鐘—貝は法螺貝、鐘は釣鐘、大寺院に缺くべからざる佛具。其の音も聞えぬとは寺院のなき事。
 ○仁和寺云々—鳥羽法皇の第五皇子本仁親王御出家後嵯峨仁和寺にありて覺性法親王と申す。
 ○懺悔—佛教の語。惡事を發露し悔い改むる事。懺は梵語の音譯、懺摩の略、悔過請恕の義、悔は漢語。
 ○親しき云々—名例律六議（議親、議故、議賢、

の洲崎にさわぐも、心をくたく種となる。鳥の頭は白くなるとも、都には還るべき期もあらねば、定めて海畔の鬼とならんずらん、ひたすら後世のためにとて、五部の大乘經をうつしてけるが、貝鐘の音も聞えぬ荒磯にとゞめんもかなし。『せめては筆の跡ばかりを洛の中に入れさせ給へ』と、仁和寺の御室の許へ經にそへてよみておくりける。

濱千鳥跡はみやかにかよへども

身は松山に音をのみぞ鳴く

しかるに、少納言信西が計らひとして、『もし呪咀の心にや』と奏しけるより、そがまゝにかへされしぞうらみなれ。いにしへより倭漢土ともに、國をあらそひて兄弟敵となりし例は珍しからねど、罪深き事かなと思ふより、惡心懺悔の爲にとて寫しぬる御經なるを、いかにさゝふる者ありとも、親しきを議るべき令にもたがひて、筆の跡だも納れ給はぬ叡慮こそ、今は舊しき讐なるかな。所詮此の經を魔道に回向して、恨をはるかさん

議能、議功、議貴の一、議親とは天皇及太皇太后皇太后皇后等の親族の滅刑せらるゝ特別法。

○志戸の海—讃岐國大川郡志度町の海岸。

○平治の亂—平治元年藤原信賴が二條院をおびやかしたる事變。

○忠政—平忠正。

○白川の宮—崇徳上皇の御所白川北殿。

○虎狼の心—暴虐なる心の喩。

○障化—邪道に轉向せしむること。

○家の子—末流の同族、轉じて家の召仕の意。本條は義朝の臣長田忠致の事。

と、一すぢにおもひ定めて、指を破り血をもて願文をうつし、經とともに志戸の海に沈めてし後は、人にも見えず、深く閉ぢこもりて、ひとへに魔王となるべき大願をちかひしが、はた平治の亂ぞ出できぬる。まづ信賴が高き位を望む驕慢の心をさそうて義朝をかたらはしむ。かの義朝こそ悪き敵なれ。父の爲義をはじめ、同胞の武士は皆朕が爲に命を捨てしに、他一人朕に弓を挽く。爲朝が勇猛、爲義忠政が軍配に羸目に見えるに、西南の風に焼討せられ、白川の宮を出でしより、如意が嶽の嶮しきに足を破られ、或は山賤の椎柴をおほひて雨露を凌ぎ、終に擒はれて此の島に謫られしまで、皆義朝が姦しき計策に困しめられしなり。これが報を虎狼の心に障化して、信賴が隱謀にかたらはせしかば、地祇に逆ふ罪、武に賢からぬ清盛に逐ひ討たる。且つ父の爲義を弑せし報偏りて、家の子に謀られしは、天神の祟を蒙りしものよ。又少納言信西は常に己を博士ぶりて、人を拒む心の直からぬ、これをさそうて信賴義朝が讐となせしかば、終に家をすてて宇治山の坑に竄れしを、はた探し獲られて六條河原に梟首らる。これ經をかへせし諛言の罪を治めしなり。それがあまり、應保の夏は美福門院が命を窮り、長寛の春は忠通を祟りて、朕も其の秋世をさりしかど、猶暎火熾にして盡さざるまゝに、終に大魔王となりて、三百餘類の巨魁となる。朕が眷屬のなすところ、人の福を見ては轉して禍とし、世の治まるを見ては亂を發さしむ。只清盛が人果大にして親族氏族ことごとく高き官位につらなり、おのがまゝなる國政を執行ふといへども、重盛忠義をもて輔くる故、いまだ期至らず。汝見よ、平氏も亦久しからじ。雅仁朕につらかりしほどは、終に報ゆべきぞ」と、御聲いやましに恐しく聞えけり。西行いふ。「君かくまで魔界の惡業につながれて、佛土に億萬里を隔て給へば、ふたゝびいはじ」とて、只黙してむかひ居たりける。

○應保の夏—七十八代二條天皇の御世の年號。長寛二年二月關白忠通薨。○其の秋—長寛二年八月二十六日崇徳上皇崩御、御年四十六。○覽王—覽は梵語。殺者又破壞善者と譯す。此の類に種々の覽あるに依つて三百餘類といふ。○眷屬—六親以外の同族、轉じては僕從の意。○人果—人間たる果報。○覽界—惡覽の成を振り區域。○佛土云々—淨土、極樂。此の世より十萬億土を隔てたる西方にありといふより億萬里といふ。

時に峯谷ゆすり動きて、風叢林を僵すがごとく、沙石を空に卷上ぐる。見る／＼一段の陰火君が膝の下より燃上りて、山も谷も晝のごとくあき

○白眼—睥睨(ニラミ)たる目つき。
○柿色—修験者の衣の色。

○支干一周—十二支と十干と一周するは六十年。重盛薨するは治承三年にて此の年より大凡十二年後なれば、十二年程の意に用ゐたり。

○よしや君云々—山家集、下雑に出づ。

○刹利云々—刹利は梵語刹帝利の略、印度王族の名。印度四姓中の第二位。須陀は梵語首陀羅の略、印度の最下族。沙石集第五、いふならく奈落の底にいりぬれば刹利も首陀もかはらざりけり。

○いなめの—あくしの枕詞。
○金剛經—金剛般若波羅密多經の略、般若の智慧もて一切の苦厄を除く功德の經。

○治承三年—八十代高倉天皇の御代の年號。
○鳥羽の離宮—京都市下京區鳥羽にあり、城南(セイナン)離宮といへり。
○福原の茅の宮—攝津國福原の三間の板屋に押籠め奉りし故事。

らかなり。光の中につらく御氣色を見たてまつるに、朱をそそぎたる龍顔に、荊の髮膝にかゝるまで亂れ、白眼を吊りあげ、熱き嘘をくるしげにつかせ給ふ。御衣は柿色のいたうすびたるに、手足の爪は獸のごとく生ひのびて、さながら魔王の形あさましくもおそろし。空にむかひて「相模々々」と叫ばせ給ふ。「あ」と答へて鶯のごとくの化鳥翔け來り、前に伏して詔をまつ。院かの化鳥にむかひ給ひ、「何ぞはやく重盛が命を奪りて雅仁清盛をくるしめざる。」化鳥こたへていふ、「上皇の幸福いまだ盡きず、重盛が忠信ちかづきがたし。今より支干一周を待たば、重盛が命數既に盡きなん。他死せば一族の幸福此の時に亡ぶべし。」院手を拍つて怡ばせ給ひ、「かの讐敵盡く此の前の海に盡すべし」と、御聲谷峯に響きて、凄じさいふべくもあらず。魔道の淺ましきありさまを見て涙しのぶに堪へず。復び一首の歌に隨縁のこゝろをすゝめたてまつる。

よしや君昔の玉の床とても

かゝらんのちは何にかはせん

刹利も須陀もかはらぬものと、心あまりて高らかに吟ひける。

此のことはを聞きしめて感させ給ふやうなりしが、御面も和らぎ陰火もやうすく消えゆくほどに、つひに龍體もかきけちたるごとく見えなれば、化鳥もいづち去きけん跡もなく、十日あまりの月は峯にかくれて、木のくれ闇のあやなきに、夢路にやすらふがごとし。ほどなくいなめの明けゆく空に、朝鳥の音あもしろく鳴き渡れば、かさねて金剛經一卷を供養したてまつり、山をくだりて庵に歸り、閑に終夜の事どもを思ひ出づるに、平治の亂よりはじめて、人々の消息年月のたがひなければ、深く憤しみて人にも語り出でず。其の後十三年を経て治承三年の秋、平の重盛病に罹りて世を逝りぬれば、平相國入道、君を怨みて鳥羽の離宮に籠めたてまつり、重ねて福原の茅の宮に困しめたてまつる。頼朝東風に競ひおこり、義仲北雪をはらうて出づるに及び、平氏の一門ことごとく西の海

○幼主—八十一代安徳天皇。

に漂ひ、遂に讃岐の海志戸八島にいたりて、武きつはものどもおほく鰐魚のはらに葬られ、赤間が關・壇の浦にせまりて、幼主海に入らせ給へば、軍將たちも、のこりなく亡びしまで、露たがはざりしぞおそろしく怪しき話柄なりける。其の後御廟は玉もて雕り、丹青を彩りなして、稜威を崇めたてまつる。かの國にかよふ人は、必ず幣をさへげて齋ひまつるべき御神なりけらし。

菊花の約

青々たる春の柳、家園に種うることなかれ。交りは輕薄の人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすくとも、秋の初風の吹くに耐へめや。輕薄の人は交りやすくして亦速なり。楊柳いくたび春に染むれども、輕薄の人は絶えて訪ふ日なし。

○博士—學者。
○孟氏の操—支那孟軻の母の賢き心情。蒙求上「軻親斷機」參看。
○口腹—飲食の事。世説「閔仲叔老病家貧、不能得肉、日買猪肝一片、屠或不肯與、安邑令聞之、飭吏常給。仲叔歎曰、閔仲叔豈以口腹累安邑耶、遂去客レ沛。」

播磨の國加古の驛に丈部左門といふ博士あり。清貧を憇ひて、友とする書の外はすべて調度の絮煩を厭ふ。老母あり、孟氏の操にゆづらず。常に紡績を事として、左門がこゝろざしを助く。其の季女なるものは同じ里の佐用氏に養はる。此の佐用が家は頗る富みさかえてありけるが、丈部母子の賢さを慕ひ、娘子を娶りて親族となり、屢々事に托て物を餉るといへども、「口腹の爲に人を累さんや」とて、敢へて承くることなし。一日左門同じ里の何某が許に訪ひて、いにしへ今の物がたりして興あ

○西の國—山陰道の國。

○瘟疫—急性傳染病の總名。瘟は本は家畜の傳染病の名。
○家童—妻女の通稱。
○死生命あり—論語、顔淵篇、「死生有命、富貴在_レ天。」
○入りつも—入りつともとあるべき格。以下此の例多し。
○倫の人—倫は類常の義より普通の意に用ゐたり。

る時に、壁を隔てて人の痛楚聲、いともあはれに聞えければ、主に尋ぬるに、あるじ答ふ。「これより西の國の人と見ゆるが、伴なひに後れしよしにて、一宿を求めらるゝに、士家の風ありて卑しからぬと見しまゝに、返め參らせしに、其の夜邪熱劇しく、起臥も自は任せられぬを、いとほしさに三日四日は過しぬれど、何地の人ともさだかならぬに、主も思ひかけぬ過し出でて、心地惑ひ侍りぬ」といふ。左門聞きて、「かなしき物がたりにこそ。あるじの心安からぬもさる事にしあれど、病苦の人はしるべなき旅の空に此の疾を憂へ給ふは、わきて胸窮しくおはすべし。其のやうをも看ばや」といふを、あるじとて、「瘟疫は人を過つ物と聞ゆるから、家童らもあへてかしこに行かしめず。立よりて身を害し給ふことなかれ。左門笑うていふ、「死生命あり、何の病か人に傳ふべき。これらは愚俗のことばにて、吾們はとらず」とて、戸を推して入りつも其の人を見るに、あるじが語りしに違はで、倫の人にはあらじを、病深きと見えて、面は

○自方を案じ—自身に投薬處方を研究して。

○漂客—さすらひて他郷に在る旅人。

○兵書—軍學の書。支那のは古來七書とて孫子、吳子、司馬法、六韜、三略、尉繚子、太宗問對あり。

黄に、肌黒く瘦せ、古き衾のうへに悶え臥す。人なつかしげに左門を見て、「湯ひとつ恵み給へ」といふ。左門ちかくよりて、「士憂へ給ふことなかれ。必ず救ひまゐらすべし」とて、あるじと計りて、薬をえらみ、自方を案じ、みづから煮てあたへつゝも、猶粥をすゝめて病を看ること、同胞のごとく、まことに捨てがたきありさまなり。

かの武士、左門が愛憐の厚きに涙を流して、「かくまで漂客を恵み給ふ。死すとも御心に報い奉らん」といふ。左門諫めて、「ちからなきことはな聞え給ひそ。凡疫は日數あり。其のほどを過ぎぬれば壽命をあやまたず。吾日々に詣でてつかへまゐらすべし」と、實やかに約りつゝも、心をもちゐて助けけるに、病漸減じてこゝち清しくおぼえければ、あるじにも念比に詞をつくし、左門が陰徳をたふとみて、其の生業をたづね、己が身の上をもかたりていふ。「故出雲の國松江の郷に生長りて、赤穴宗右衛門といふ者なるが、わづかに兵書の旨を察めしによりて、富田の城主鹽冶掃

○尼子經久—文明八年鹽治氏を攻めて富田城を復し、遂に一國の主となる。
 ○山中黨—山中入道の一族。出雲の士族。
 ○三澤—城主爲幸。
 ○三刀屋—彈正左衛門爲虎。

○見る所を云々—悲しきを見て勞はらざるを得ざること。孟子、告子上、「惻隱之心、人皆有之。」
 ○諸子百家—支那上代諸家の著はしたる書の類、漢の時までに百八十九家ありといふ。
 ○おろ／＼—不十分ながら。俗のボツ／＼。

○をさ／＼しく—シカト。誠らしく。

○伯氏—支那上代兄弟の順序を伯仲叔季と定めたるに因る。

○孤獨—父なきを孤といひ、老いて子なきを獨といふ。

○青雲の便—高位高官に上る方便。
 ○功名富貴云々—魏微、述懐詩、人生感意氣、功名誰復論。」

部介吾を師として物學び給ひしに、近江の佐々木氏綱に密の使にえらばれて、かの館にとゞまるうち、前の城主尼子經久山中黨をかたらひて、大三十日の夜不慮に城を乗りとりしかば、掃部殿も討死ありしなり。もとより雲州は佐々木の持國にて、鹽治は守護代なれば、三澤、三刀屋を助けて、經久を亡ぼし給へとす、むれども、氏綱は外勇にて内怯たる愚將なれば果さず。かへりて吾を國に逗む。故なき所に永く居らじと、己が身ひとつを竊みて國に還る路に、此の疾に罹りて、思ひがけずも師を勞はしむるは、身にあまりたる御恩にこそ。吾半世の命をもて必ず報いたてまつらん。」左門いふ。「見る所を忍びざるは人たるものの心なるべければ、厚き詞ををさむるに故なし。猶逗まりていたはり給へ」と、實ある詞を便りにて日比經るまゝに、物みな平生に遡くぞなりにける。

此の日比、左門はよき友もとめたりとて、日夜交りて物がたりするに、赤穴も諸子百家のこと、おろ／＼語り出でて、問ひわきまふる心愚ならず。兵機のことわりはをさ／＼しく聞えければ、ひとつとして相ともいたがふ心もなく、かつ感で、かつよろこびて、終に兄弟の盟をなす。赤穴五歳長じたれば、伯氏たるべき禮儀ををさめて、左門にむかひていふ。「吾父母に離れまゐらせていと久し。賢弟が老母は即て吾が母なれば、あらたに拜みたてまつらんことを願ふ。老母あはれみてをさなき心を肯け給はんや。」左門歡びに堪へず、「母なる者常に我が孤獨を憂ふ。信ある言を告げなば、齡も延びなんに」と、伴ひて家に歸る。老母よろこび迎へて、「吾が子不才にて、學ぶ所時にあはず。青雲の便りを失ふ。ねがふは捨てずして伯氏たる教を施し給へ。」赤穴拜していふ。大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足らず、吾いま母公の慈愛をかうぶり、賢弟の敬を納むる、何の望かこれに過ぐべき」と、よろこびうれしみつゝ、又日來をとゞまりける。

きのふけふ咲きぬると見し尾上の花も散りはてて、涼しき風による浪

○菽水の奴—貧困ながら能く親につかふる下男。菽は豆、禮記檀弓、「子路曰、傷哉貧也、生無以爲養、死無以爲禮也、孔子曰、啜菽飲水盡其歡、斯之謂孝。」
 ○重陽の佳節—陰曆九月九日の節供の異稱。五節供の一。易にて九を陽數とす。九月の九と九日の九と重なるに由りていふ。菊茱萸を節物とす。
 ○茱萸—木の實の名、漢名、胡頹子、和名、久美、俗にグミと云ふ。王維、九月九日憶山中兄弟、「獨在異鄉爲異客、每逢佳節倍思親、遙知兄弟登高處、遍插茱萸少一人。」
 ○八雲たつ國—八雲立つは出雲の枕詞、出雲國の意に用ゐたり。

に、とはでもしるき夏の初になりぬ。赤穴、母子にむかひて、「吾近江を遁れ來りしも、雲州の動靜を見んためなれば、一たび下向てやがて歸り來り、菽水の奴に御恩をかへしたてまつるべし。今のわかれを給へ」といふ。左門いふ、「さあらば兄長いつの時に歸り給ふべき。」赤穴いふ、「月日は逝き易し。遅くとも此の秋は過ぎじ。」左門云ふ、「秋はいつの日を定めて待つべきや。願ふは約し給へ。」赤穴云ふ、「重陽の佳節をもて歸り來る日とすべし。」左門いふ、「兄長必ず此の日をあやまり給ふな。一枝の菊花に薄酒を備へて待ち奉らん」と、互に情をつくして赤穴は西に歸りけり。あら玉の月日はやく經ゆきて、下枝の茱萸色づき、垣根の野ら菊艶ひやかに、九月にもなりぬ。九日はいつよりも蚤く起き出でて、草の屋の席をはらひ、黃菊白菊二枝三枝小瓶に挿し、囊をかたぶけて酒飯の設をす。老母云ふ、「かの八雲たつ國は山陰の果にありて、こゝには百里を隔つると聞けば、けふとも定め難きに、其の來しを見て物すとも遅からじ。」左門

○牛窓—備前國邑久郡牛窓町。萬葉集十一に「牛窓の浪の汐さゝに島とよみたのめる君に逢はずかもあらむ。」
 ○小豆島—讃岐國の海中の一小島。
 ○室津—播磨國揖保郡室津村。
 ○魚が橋—播磨國印南郡阿彌陀村。
 ○蕎麥—「クロムギ」は「ソバムギ」の古名。
 ○はたけぬ—開けぬ。

云ふ、「赤穴は信ある武士なれば必ず約を誤らじ。其の人を見てあわたしからんは、思はんことの恥かし」とて、美酒を沾ひ鮮魚を宰て厨に備ふ。此の日や天晴れて千里に雲のたちゐもなく、草枕旅ゆく人の群々かたりゆくは、「けふは、誰某がよき京入なる。此の度の商物によき徳とるべき祥になん」とて過ぐ。五十あまりの武士、廿あまりの同じ出立なる、「日和はかばかりよかりしものを、明石より船もとめなば、この朝びらきに牛窓の門の泊りは追ふべき。若き男は却物怯して、錢おほく費やすことよ」といふに、「殿の上らせ給ふ時、小豆島より室津のわたりし給ふに、なまか渡りは必ず怯ゆべし。な恙み給ひそ。魚が橋の蕎麥ふるまひまをさんに」と、いひなぐさめて行く。口とる男の腹だたしげに、「此の死馬は眼をもはたけぬか」と荷鞍おしなほして追ひもて行く。午時もやゝかたぶきぬれど、待ちつる人は來らず。西に沈む日に、宿り急ぐ足のせはしげなるを

見るにも、外の方のみまもられて心酔へるがごとし。

○人の心の秋—人心の變り易き喩の語。新古今集、戀五、相模「色かはる萩の下葉を見てもまづ人の心の秋ぞ知らる」。秋に飽を言ひ掛く。
○氷輪—月の異名、蘇軾詩「雲峯缺處湧氷輪」。
○浦波の音—源氏物語須磨「一人目をさまし給ひて枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに波たこもとにたちくる心地して」。

老母左門をよびて、「人の心の秋にはあらずとも、菊の色こきはけふのみかは。歸りくる信だにあらば、空は時雨にうつりゆくとも、何をか怨むべき。入りて臥しもして、又翌の日を待つべし」とあるに、否み難く母をすかして前に臥さしめ、もしやと戸の外に出でて見れば、銀河影さえくに、氷輪我のみを照して淋しきに、軒守る犬の吼ゆる聲すみ渡り、浦波の音ぞこゝもとにたちくるやうなり。月の光も山の際に陰くなれば、今はとて戸を閉て入らんとするに、たゞ見る、おぼろなる黑影の中に人ありて、風の隨來るを、あやしと見れば、赤穴宗右衛門なり。

踊りあがるこゝちして、「小弟蚤くより待ちて今に至りぬる。盟たがはで來り給ふことのうれしさよ。いざ入らせ給へ」といふめれど、只點頭さして物をもいはである。左門前にすゝみて、南の窓の下にむかへ、座につかしめ、「兄長來り給ふことの遅かりしに、老母も待ちわびて、翌こそと臥所

○下物—酒の肴の異名。其の好きを好下物といふ。
○井臼の力—自身に水を汲み米を舂いて勞苦すること。後漢書馮衍傳「妻悍、不得著膝妾、兒女皆自操井臼」。
○陽世—世に生きてある身、死して見えぬに對していふ。轉じて「現世」の意とす。

に入らせ給ふ。寤させまゐらせん」といへるを、赤穴又頭を揺りてとゞめつゝも、更に物をもいはである。左門云ふ。「既に夜を續ぎて來し給ふに、心も倦み足も勞れたまふべし。幸に一杯を酌みて歇息給へ」とて、酒をあたいめ下物を列ねてすゝむるに、赤穴袖をもて面を掩ひ、其の臭ひを嫌放るに似たり。左門いふ。「井臼の力はた款すに足らざれども、己が心なり。いやしみ給ふ事なかれ。」赤穴猶答へもせで、長嘘をつぎつゝ、しばししていふ。「賢弟が信ある饗應をなどいなむべきことわりやあらん。欺くに詞なければ、實をもて告ぐるなり。必ずしもなあやしみ給ひそ。吾は陽世の人にあらず。きたなき靈のかりに形を見えつるなり。」

左門大に驚きて、「兄長何ゆゑにこのあやしきを語り出で給ふや。更に夢とおぼえ侍らず。」赤穴いふ。「賢弟とわかれて國にくだりしが、國人大かた經久が勢ひに服きて、鹽治の恩を顧るものなし。從弟なる赤穴丹治、富田の城にあるを訪ひしに、利害を説きて吾を經久に見えしむ。假に



○狐疑の心―疑ひて猶豫する心。狐の性、疑多きに因りて云ふ。
○腹心爪牙―腹心は心の底まで打明かす忠實のもの。爪牙は防衛の臣、鳥獸が其の威を示すより喻へたる語。

○陰風―妖怪の出づる時吹く風。

其の詞を容れて、つらく経久がなす所を見るに、萬夫の雄人に勝れ、よく士卒を習練すといへども、智を用ふるに狐疑の心おほくして、腹心爪牙の家の子なし。永く居りて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約ある事をかたりて去らんとすれば、經久怨める色ありて、丹治に令し、吾を大城の外にはなたずして、遂に今日にいたらしむ。此の約に違ふものならば、賢弟吾を何ものとかせんと、ひたすら思ひ沈めども遁るゝに方なし。いにしへの人のいふ「人一日に千里をゆくことあたはず。魂よく一日に千里をもゆく」と。此のことわりを思ひ出でて、みづから刃に伏し、今夜陰風に乗りてはるゝ來り菊花の約に赴く。この心をあはれみ給へ」といひをはりて泪わき出づるがごとし。「今は永き別れなり。只母公によくつかへ給へ」とて、座を立つと見しが、かき消えて見えなくなりける。

左門慌忙て止めんとすれば、陰風に眼くらみて行方をしらず、俯向につまづき倒れたるまゝに、聲を放ちて大に哭く。老母目さめ、驚き立ちて、

左門がある所を見れば、座上に酒瓶魚盛りたる皿どもあまた列べたるが中に臥し倒れたるを、いそがはしく扶け起して、「いかに」と問へども、只聲を呑みて泣くゝさらに言なし。老母問ひていふ、「伯氏赤穴が約にたがふを怨むとならば、明日なんもし來るには、言なからんものを、汝かくまでをさなくも愚なるか」と、つよく諫むるに、左門漸答へていふ、「兄長今夜菊花の約に特來る。酒殺をもて迎ふるに、再三辭み給うて云ふ、『しカジかのやうにて約に背くがゆゑに、自刃に伏して陰魂百里を來る』といひて見えずなりぬ。それ故にこそは母の眠をも驚かしたてまつれ。只只赦し給へ」と、潸然と哭き入るを、老母いふ、「牢裏に繋がるゝ人は夢にも赦さるゝを見、渴するものは夢にも漿水を飲むといへり。汝も亦さる類にやあらん、よく心を靜むべし」とおれども、左門頭を揺りて、「まことに夢の正なきにあらず、兄長はこゝもとにこそありつれ」と、又聲を放て哭き倒る。老母も今は疑はず。相叫びて其の夜は哭きあかしぬ。

○夢にも―白氏文集、「渴人多夢」飲。漿は飲料のこと。

○翰墨—筆墨の異稱。翰は支那上古鳥の羽を以て筆とせしよりいふ。轉じて文學の意。

○生は浮きたる瀦—金剛般若經一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀。○飢ゑて云々—神仙傳「寒不逞衣、飢不暇食。」

○翼ある物云々—雁の便にあらずしてといふ意、漢の蘇武の故事に因る。

明る日、左門母を拜していふ、「吾幼なきより身を翰墨に托るといへども、國に忠義の聞えなく、家に孝信をつくすことあたはず。徒に天地のあひだに生るゝのみ。兄長赤穴は一生を信義のために終る。小弟けふより出雲に下り、せめては骨を藏めて信を全うせん。公尊體を保ち給うて、しばらく暇を給ふべし」。老母云ふ、「吾が兒かしこに去るとも、はやく歸りて老が心を休めよ。永く逗りてけふを舊しき日となすことなかれ」。左門いふ、「生は浮きたる瀦のごとく、且に夕べに定めがたくとも、やがて歸りまゐるべし」とて、泪を振うて家を出で、佐用氏にゆきて老母の介抱を苦にあつらへ、出雲の國にまかる路に、飢ゑて食を思はず、寒きに衣を忘れてまどろめば、夢にも哭きあかしつゝ、十日を経て富田の大城にいたりぬ。

先づ赤穴丹治が宅にいきて姓名をもていひ入るに、丹治迎へ請じて、「翼ある物の告ぐるにあらで、いかでしらせ給ふべき。謂なし」と頻りに

○士—こゝでは貴殿、貴下の意。○公叔座云々—史記商君傳に出でたり。○諱む云々—身柄ある人の死をいふ語。○社稷—國家といふに同じ。社は土の神、稷は穀の神、古は封を受ければ諸侯必ず此の社を建つ。國家の大事に係るものは必ず社稷を以て稱す。

○すゝみて—「すゝめて」とあるべき格。

問ひ尋む。左門いふ、「士たる者は富貴消息の事ともに論ずべからず。只信義をもて重しとす。伯氏宗右衛門一旦の約をおもんじ、むなしき魂の百里を來るに報いすとして、日夜を逐うてこゝにくだりしなり。吾學ぶ所について士に尋ねまゐらすべき旨あり。ねがふは明かに答へ給へかし。昔魏の公叔座病の牀にふしたるに、魏王みづから詣でて手をととりつも告ぐるは、「若し諱むべからずのことあらば、誰をして社稷を守らしめんや。吾がために教をのこせ」とあるに、叔座いふ、「商鞅年少しといへども奇才あり。王若し此の人を用ゐ給はずば、これを殺しても境を出すことなかれ、他の國にゆかしめば、必ずも後の禍となるべし」と苦に教へて、又商鞅を私にまねき、「吾汝をすゝむれども王許さざる色あれば、用ゐずばかへりて汝を害し給へと教ふ。これ君を先にし臣を後にするなり。汝速く他の國に去りて害を免るべし」といへり。此の事士と宗右衛門に比へてはいかに。」丹治只頭を低れて言なし。左門座をすゝみて、「伯氏宗右衛門、

○横死—天命にあらざる死。

鹽冶が舊交を思ひて尼子に仕へざるは義士なり。士は舊主の鹽冶を捨てて尼子に降りしは士たる義なし。伯氏は菊花の約を重んじ、命を捨てて百里を來しは信ある極なり。士は今尼子に媚びて骨肉の人をくるしめ、此の横死をなさしむるは友とする信なし。經久強ひてとゞめ給ふとも舊しき交りを思はば、私に商鞅叔座が信をつくすべきに、只營利にのみ走りて士家の風なきは即ち尼子の家風なるべし。さるから兄長何故此の國に足をとゞむべき。吾今信義を重んじて態々こゝに來る。汝は又不義のため汚名をのこせとて、いひもをはず拔打に斬りつくれば、一刀にてそこに倒る。家眷ども立騒ぐ間に、はやく逃れ出でて跡なし。尼子經久此のよしを傳へ聞きて、兄弟信義の篤きをあはれみ、左門が跡をも強ひて逐はせざるとなり。吝輕薄の人と交りは結ぶべからずとなん。

兩月物語 卷之二

淺茅が宿

○眞間—今は市川市。
○主づきて—領主として持ちて。
○うたてき物—非常に悪しき物。
○疎んじられ—疎んぜられとあるべき格。
○足利染の絹—下野國足利の産の染絹、古來名高き物。

下總の葛飾郡眞間の郷に、勝四郎といふ男ありけり。祖父より舊しくこゝに住み、田畠あまた主づきて家豊に暮しけるが、生長りて物にかゝはらぬ性より、農作をうたてき物に厭ひけるまゝに、はた家貧しくなりけり。さる程に親族多くにも疎んじられけるを、口惜しきことに思ひしみて、いかにもして家を興しなんものをと左右にはかりける。其の頃雀部の會次といふ人、足利染の絹を交易する爲に、年々京よりくだりけるが、此の郷に氏族のありけるを屢來訪ひしかば、かねてより親しかりけるまゝに、商人となりて京にまうのぼらんことを頼みしに、雀部いとやすく肯が

ひて、「いつの頃はまかるべし」ときこえける。他がたのもしきをよるこ
びて、残る田をも販りつくして金に代へ、絹素あまた買ひ積みて、京にゆ
く日をもよほしける。

○梓弓―末の枕詞、末
は弓の上の方、萬葉集
十二「梓弓末のたづき
は知られども心は君に
よりにしものを。」
○命だに―古今集離別
「命だに心にかなふも
のならば何か別れのか
なしからまし。」
○浮木云々―落ちつか
ぬ響。
○葛のうら葉―かへる
の序詞。
○鳥が啼く―東の枕
詞。

勝四郎が妻宮木なるものは、人の目とむるばかりの容に、心ばへも愚な
らずありけり。此の度勝四郎が商物買ひて京にゆくといふをうたてき事
に思ひ、言を盡して諫むれども、常の心のはやりたるにせん方なく、梓弓
末のたづきの心ばそきにも、かひくしく調へて、其の夜はさり難き別を
かたり、「かくては、たのみなき女心の、野にも山にも惑ふばかり、物うさ
かざりに侍り。朝に夕にわすれたまはで、速く歸りたまへ。命だにとは思
ふものの、明をたのまれぬ世のことわりは、武き御心にもあはれみ給へ」
といふに、「いかで浮木に乗りつも知らぬ國に長居せん。葛のうら葉のか
へるは此の秋なるべし。心強く待ち給へ」といひなぐさめて、夜も明けぬ
るに、鳥が啼く東を立出でて京の方へ急ぎけり。

○享徳―百二代後花園
天皇の御世の年號。
○成氏―鎌倉公方持氏
の第四子。
○管領―室町幕府の
時、鎌倉に置きて關東
を鎮護せしめたる職。
後に管領を公方と稱
し、其の下なる執事を
管領と稱せり。
○上杉―上杉憲忠。

○夕つけ鳥―鶉の異
名。木綿付鳥と書く。
古今集十一、戀、あふ坂
のゆふつけ鳥もわがご
とく人やこひしき音の
みなくらん。」

此年享徳の夏、鎌倉の御所成氏朝臣、管領の上杉と御中放けて、館兵火
に跡なく滅びければ、御所は總州の御味方へ落ちさせ給ふより、關の東忽
に亂れて、心々の世の中となりし程に、老いたるは山に逃げ竄れ、弱きは
軍民にもよほされ、「けふは此所を焼き拂ふ、」明は敵のよせ來るぞ」と、
女わらべ等は東西に逃げ惑ひて泣き悲しむ。勝四郎が妻なるものも、い
づちへも遁れんものと思ひしかど、「此の秋を待て」と聞えし夫の言を
頼みつゝも、安からぬ心に日を數へて暮しける。秋にもなりしかど、風の
便りもあらねば、世とともに憑みなき人心かなと、恨みかなしみおもひく
づをれて、

身のうさは人しも告げじあふ坂の

夕つけ鳥よ秋も暮れぬと

かくよめれども、國あまた隔てぬればいひ送るべき傳もなし。世の中騒
がしきにつれて、人の心も恐しくなりたり。適間とぶらふ人も、宮木が

○三貞の賢き操—女の固く志を守りて變へぬ事。華陽國志(巴志)「永初中、廣漢漢中羌反、唐及巴郡、有馬妙所妻、王元憤妻、趙曼妻、華、夙喪、夫、執共妻之節、守一醜之禮、號曰三貞云々。」
○京家—京都室町幕府。
○常縁—美濃の名族、武事に勝れ、又歌道に名あり。
○野伏—部將なき鳥合の兵。

○干戈—支那上古戦時に干(タテ)と戈(ホコ)とを用ゐたるより武器の總名となる。
○涿鹿の岐—戦争の巷の意、涿鹿は支那太古黄帝が蚩尤を誅したる山の名、今の河北省涿州の附近。

○岐曾の眞坂—馬籠峠の古名、信濃國西筑摩郡讀書村の附近。
○行李—行李は旅行に携ふる荷物。

○武佐—近江國蒲生郡武佐村。
○産所—生れたる家。生家。實家。

○採めざるに云々—荷子、勸學篇「蓬生麻中、不扶而自直。」

かたちの愛たきを見ては、さまざまにすかしいざなへども、三貞の賢き操を守りてつらくもてなし、後は戸を閉てて見えざりけり。一人の婢女も去りてすこしの貯もむなく、其の年も暮れぬ。年改まりぬれども猶もさまらず。あまさへ去年の秋、京家の下知として、美濃の國郡上の主、東の下野守常縁に御旗を給びて、下野の領所にくだり、氏族千葉の實胤と謀りて攻むるにより、御所方も固く守りて防ぎ戦ひけるほどに、いつ果つべきとも見えず。野伏等はこゝかしこに寨をかまへ、火を放ちて財を奪ふ。八州すべて安き所もなく、淺ましき世の費なりけり。

勝四郎は雀部に從ひて京にゆき、絹ども残りなく交易せしほどに、當時都は華美を好む節なれば、よき徳とりて東に歸る用意をなすに、今度上杉の兵鎌倉の御所を陥し、尙御跡を慕うて攻め討てば、古郷の邊は干戈みちみちて、涿鹿の岐となりしよしをいひはやす。まのあたりなるさへ偽おほき世説なるを、ましてしら雲の八重に隔たりし國なれば、心も心ならず

八月の始め京をたち出でて、岐曾の眞坂を日暮しに踰えけるに、落草ども道を塞へて、行李も残りなく奪はれしが上に、人の語るを聞けば、是より東の方は所々に新關を居ゑて、旅客の往來をだに宥さざるよし。さては消息をすべきたづきもなし。家も兵火にや亡びなん、妻も世に生きてあらじ。然らば古郷とても鬼のすむ所なりとて、こゝより又京に引かへすに、近江の國に入りて、俄かにこゝちあしく、熱き病を憂ふ。武佐といふ所に、兒玉嘉兵衛とて富貴の人あり。これは雀部が妻の産所なりければ、苦にたのみけるに、此の人見捨ずしていたはりつも、醫を迎へて藥の事專なりし。やゝこゝち清しくなりぬれば、篤き恩をかたじけなうす。されど歩む事はまだはかくしからねば、今年は思ひがけずもこゝに春を迎ふるに、いつの程か此の里にも友を求めて、採めざるに直き志を賞せられて、兒玉をはじめ誰々も頼もしく交りけり。此の後は京に出でて雀部を訪ひ、又は近江に歸りて兒玉に身をよせ、七とせがほどは夢のごとくに



過しぬ。

○寛正二年—百二代後
花園天皇御世の年號。
○崑山云々—崑山義就
政長兄弟の管領争ひ。
○同根—兄弟の異稱。
魏陳思王の詩「煮豆持
作羹、漉豉以爲汁、
其在釜底然、豆在釜
中泣、本是同根生、相
煎何太急。」
○一劫の云々—劫は梵
語、佛説にいふ極めて
永き時。一劫の盡くる
はその永き時終りて、
新たなる別の劫の始ま
るを意味す。
○萱草云々—古今集十
七、雜上、忠岑「すみ
よしとあまはつぐとも
ながむすな人わすれ草
生ふといふなり。」
○泉下—九泉の下の造
語。地下の義、死して
後の意。
○壠—土を盛つた墓、
今の土饅頭。
○繼橋—真間の繼橋と

寛正二年畿内河内の國に崑山が同根の争ひ果さざれば、京ぢかくも騒
がしきに、春の頃より瘟疫さかに行はれて、屍は衢に壘み、人の心も今
や一劫の盡くるならんと、はかなきかぎりを悲しみける。勝四郎熟思ふ
に、かく落魄てなす事もなき身の、何をたのみとて遠き國に逗り、由縁な
き人の恵をうけて、いつまで生くべき命なるぞ。古郷に捨てし人の消息を
だに知らで、萱草おひぬる野方に長々しき年月をすごしけるは、信なき己
が心なりける物を。たとひ泉下の人となりて、ありつる世にはあらずと
も、其のあとをも求めて壠をも築くべけれど、人々に志を告げて、五月雨
のはれ間に手をわかちて、十日あまりを経て古郷に歸り著さぬ。

此の時、日は早や西に沈みて、雨雲はあちかゝるばかりに闇けれど、舊
しく住みなれし里なれば迷ふべうもあらじと、夏野わけ行くに、いにしへ
の繼橋も川瀬におちたれば、げに駒の足音もせぬに、田畑は荒れたさま、

て名所。川中に柱をむ
かへたて、それに横木
を結びて板を長く繼ぎ
て渡したる橋といふ。
萬葉集、十四「足音せ
ず行かむ駒もが葛節の
真間の繼橋やまず通は
む。」
○松の聳えて—古代は
家の出入口に標として
松を植うるが風俗なり
き。

○咳—咳をする、咳ば
らひをする。
○れびたれど—年更け
たれどの意、年増にな
りたること。
○淺茅が原—淺茅生に
同じ。本條のは草深く
荒れたる野の意。淺茅
が原を茅のまばらに生
えたる原と解くは非な
り。

にすさみて、舊の道もわからず、ありつる人居もなし。たま／＼こゝかし
こに残る家に人の住むとは見ゆるもあれど、昔には似つゝもあらね。いづ
れか我が住みし家ぞと立惑ふに、こゝ二十歩ばかりを去りて雷に摧かれ
し松の聳えて立てるが、雲間の星の光に見えたるを、げに我が軒の標こそ
見えつると、先嬉しき心地してあゆむに、家は故にかはらであり。人も住
むと見えて、古戸の間より燈火の影もれて輝々とするに、他人や住む、も
し其の人や在すかと心躁しく門に立ちよりて咳すれば、内にも速く聞き
とりて「誰ぞ」と咎む。いたうねびたれど、正しく妻の聲なるを聞きて、夢
かと胸のみ騒がれて、「我こそ歸りまゐりたり。かはらで獨自淺茅が原に
住みつることの不思議さよ」といふを、聞き知りたれば、やがて戸を明く
るに、いといたう黒く垢づきて、眼はおち入りたるやうに、結げたる髪
も脊にかゝりて、故の人とも思はれず。夫を見て物をもいはで潸然とな
く。

○節刀使—天子より征伐の命を受けたる將軍。上古將軍出征には章表として太刀を賜ふ例なり。

○餽口—他人に憑りて養ひを受くる事、餽は粥を食ふこと。

○巫山の雲—男女の幽會、宋玉高唐賦の故事。文選「妾在巫山之陽、高丘之岨、且爲朝雲、暮爲行雨。」

○漢宮の幻—漢の武帝

勝四郎も心くらみて、しばし物をも聞えざりしが、やゝしていふは、「今までかくおはすと思ひなば、など年月を過すべき。去ぬる年京にありつる日、鎌倉の兵亂を聞き、御所の師潰えしかば、總州に避けて禦ぎ給ふ。管領これを攻むる事急なりといふ。其の明雀部に別れて、八月の始め京を立ちて、木曾路を來るに、山賊數多に取りこめられ、衣服金銀残りなく掠められ、命ばかりを辛うじて助かりぬ。且つ里人のかたるを聞けば、東海東山の道はすべて新關を居ゑて人を駐むる由、又きのふ京より節刀使もくだり給ひて、上杉に與し、總州の陣に向はせたまふ。本國の邊は疾くに焼き拂はれ、馬の蹄尺地も問なしとかたりたるによりて、今は灰塵となり給ひけん、海にや沈みたまひけん、ひたすらに思ひとめて、又京に上りぬるより、人に餽口ひて七とせは過しけり。近會すゑるに物のなつかしくありしかば、せめて其の蹤をも見たきまゝに歸りぬれど、かくて世におはせんとは努々思はざりしなり。巫山の雲、漢宮の幻にもあらざる

が李夫人を喪ひて後、方士に命じ返魂香を作らしめて李夫人を呼び還らしめたりといふ故事。東坡詩集の註に出づ。

○虎狼の心—恐ろしき心の喩。

○玉と砕けても云々—北齊書元景安傳「寧可玉碎不能瓦全。」

○軒端の松—松に待つを言ひ掛く。

○逢ふを待つ間云々—後拾遺集、十一、戀一、平兼盛「人知れず逢ふを待つ間に戀ひ死なば何に代へたる命とかいはむ。」

○途の長手—萬葉集、十五、君が行く道の長手を繰りたれ、焼き亡ぼさむ天の火もがも。

○五更—一夜を五更に分つ。初更は午後八時、二更は午後十時、五更は午前四時。

や」と、くりごととはてしどなき。妻涙をとめて、「一たび離れ參らせて後、たのむの秋より前に、恐ろしき世の中となりて、里人は皆家を捨てて海に漂ひ山に隠れば、適に残りたる人は、多く虎狼の心ありて、かく寡となりしを便りよしとや、言を巧みていざなへども、玉と砕けても瓦の全さにはならはじものをと、幾度か辛苦を忍びぬる。銀河秋を告ぐれども君は歸り給はず、冬を待ち、春を迎へても消息なし。今は京にのぼりて尋ねまゐらせんと思ひしかど、丈夫さへ宥さざる關の鎖を、いかで女の越ゆべき道もあらじと、軒端の松のかひなき宿に、狐・鶴鶴を友として今日までは過しぬ。今は長き恨みもはれ、となりぬることの喜しく侍り。逢ふを待つ間に戀ひ死なば人しらぬ恨なるべし」と、又よと泣くを、「夜こそ短きに」と、いひなぐさめて、ともに臥しぬ。

窓の紙松風を啜りて、夜もすがら涼しさに、途の長手に勞れ熟く寝ねたり。五更の天明けゆく頃、現なき心にもすゑるに寒かりければ、衾帳かん

○秋なられど云々―古今集、四、秋上、遍昭、里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる。

○我が身云々―古今集十五、戀五、在原業平「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして。」

○水向―死者に水を手向むくるより物を供へて靈を祭ること。○那須野紙―烏山紙、一名西の内半紙、質堅し。今も名高し。

○さりとも―續後撰集、十三、戀三、藤原敦忠として出づ。

○禮まひて―うやまひての古言。○過活―生活又生業の意。

とさぐる手に、何物にや籟々と音するに目さめぬ。面にひやくと物のこぼるゝを、雨や漏りぬるかと思れば、屋根は風にまぐられてあれば、有明月のしらみて残りたるも見ゆ。家は扉もあるやなし、簀垣朽ち頽れたる間より萩、薄高く生ひ出でて朝露うちこぼるゝに、袖濡してぼるばかりなり。壁には葛葛延ひ懸り、庭は葎に埋れて、秋ならねども野らなる宿なりけり。

さてしも臥したる妻はいづち行きけん見えず。狐などの所業にやと思へば、かく荒れ果てぬれど、故住みし家に遠はで廣く造り作り作し奥わたりより、端の方稻倉まで好みたる儘の形なり。呆自て、足の踏所さへ失れたるやうなりしが、熟おもふに、妻は既に死りて、今は狐狸の住みかはりて、かく野らなる宿となりたれば、怪しき鬼の化して、ありし形を見せつるにてぞあるべき。若し又我を慕ふ魂の返り來りて語りぬるものか。思ひしことの露たがはざりしよと、更に涙さへ出でず。我が身ひとつは故の身に

してと、あゆみ廻るに、むかし閨房にてありし所の簀子をはらひ、土を積みみて壠とし、雨露をふせぐまうけもあり。夜の靈はこゝもとよりやと恐しくも且つなつかし。水向の具物せし中に、木の端を削りたるに、那須野紙のいたう古びて文字もむら消して所々見定めがたき、正しく妻の筆の跡なり。法名といふものも年月もしるさで、三十一字に末期の心を哀にも展べたり。

さりともと思ふ心にはかられて

世にもけふまでいける命か

こゝにはじめて妻の死にたるを覺りて、大に叫びて倒れ伏す。去りて何の年、何の月日に終りしさへ知らぬ淺ましきよ。人は知りもやせん、涙を止めて立ち出づれば、日高く差昇りぬ。先づ近き家に行きて主を見るに、昔見し人にあらず、「反りて何國の人ぞ」と答む。勝四郎禮まひていふ。「此の隣なる家の主なりしが、過活のため京に七とせまでありて、昨

の夜かへり参りしに、既に荒廢みて人も住ひ侍らず。妻なるものも死しと見えて壠の設も見えつるが、いつの年にもなきに、まさりて悲しく侍り。知らせたまはば教へ給へかし。主の男いふ、「哀にも聞え給ふものかな。我こゝに住むもいまだ一とせばかりのことなれば、それよりはるか昔に亡せ給ふと見えて、住みたまふ人のありつる世は知り侍らず。すべてこの里の舊き人は兵亂の初に逃げ失せて、今住居する人は大方他より移り來たる人なり。只一人の翁の侍るが、所に舊しき人と見え給ふ。時々あの家にゆきて、亡せたまふ人の菩提を弔らはせ給ふなり。この翁こそ月日をも知らせたまふべし」といふ。勝四郎いふ、「さては其の翁の住み給ふ家は何方にて侍るや。主いふ、「こゝより百歩ばかり濱の方に、麻おほく種多たる畑の主にて、其所に小さき庵して住ませ給ふなり」と教ふ。勝四郎よろこびてかの家にゆきて見れば、七十可の翁の、腰は淺ましきまで屈まりたるが、庭竈の前に圓座敷きて茶を啜り居る。翁も勝四郎

○菩提—梵語、智又は覺と譯す。不生不滅の理を悟り道の至極に到る聖智、即ち佛果。

○圓座—蒲、菅、藁などの莖葉にて、圓く渦形に平たく組み立て作れる褥。圓座(エンザ)に同じ。

○吾主—足下。

と見るより、「吾主何とておそく歸り給ふ」といふを見れば、此の里に久しき漆間の翁といふ人なり。

勝四郎、翁が高齡をことぶきて、次に京に行きて心ならずも逗りしより、前夜のあやしきまでを詳にかたりて、翁が壠を築きて祭りたまふ恩のかたじけなきを告げつゝも涙止めがたし。翁いふ、「吾主遠くゆきたまひて後は、夏の頃より干戈を揮ひ出でて、里人は所々に遁れ、弱き者共は軍民に召さるゝほどに、桑田にはかに狐兔の叢となる。只烈婦のみ主が秋を約ひたまふを守りて、家を出で給はず、翁も又足蹇ぎて百歩を難しとすれば、深く閉てこもりて出でず。一旦樹神などいふおそろしき鬼の栖所となりたりしを、稚き女子の矢武におはするぞ、老が物見たる中のあはれなりし。秋去り春來りて、其の年の八月十日といふに死り給ふ。惆しさのあまりに、老が手づから土を運びて柩を藏め、其の終焉に残し給ひし筆の跡を壠のしるしとして、蕪蕪行潦の祭も心ばかりにものしけるが、翁もとよ

○烈婦—宮木をほめたる語。

○蹇ぎて—足に病ありて歩行の叶はぬこと。

○矢武に—氣丈に、又健氣に。

○蕪蕪行潦—心ばかりの供物の意。左傳隱公三年の傳「澗谿沼沚之毛、蘋蘩行潦之菜、筐筥錡之器、潢汙行潦之水、可薦於鬼神、可羞於王公。」

り筆とる事をしも知らねば、其の月日を記す事もせず。寺院遠ければ贈號おくりなを求むる方もなくて、五とせを過し侍るなり。今の物語をきくに、必ず烈婦さかしらの魂の來り給ひて、舊しき恨を聞えたまふなるべし。復かしこに行きて念比にとぶらひ給へ」とて、杖を曳きて前に立ち、相共に壠のまへに俯して聲を放ちて歎きつゝも、其の夜はそこに念佛して明しける。

寢られぬまゝに翁語りていふ、「翁が祖父のその祖父すらも、生れぬ遙かの往古いにしへの事よ。此の里に眞間ままの手兒女てこなといふいと美しき娘子むすめありけり。家貧しければ身には麻衣あふみに青衿あざねつけて、髪だも梳らず。履だも穿はかずであれど、面かほは望の夜の月のごと、笑めば花の艶にほふがごと、『綾錦あやびに裏める京女きやうにょも勝りたれ』とて、この里人はもとより、京の防人さきもり等、國の隣の人までも、言ことをよせて戀こひ慕しのばざるはなかりしを、手兒女物てこなものうき事に思ひ沈みつゝ、『多くの人の心に報いす』とて、此の浦曲うらわの波に身を投げし事を、世の哀なる例とて、いにしへの人は歌にもよみ給ひてかたり傳へし

○念佛—佛名を稱念すること。多くは阿彌陀佛の名を稱念する意にいふ。

○眞間の手兒女—萬葉集三、九、及十四卷に出づ。

○防人—上古軍團の兵を筑紫太宰府へ送りて警備隊としたる兵。三年交替。

○稚き心—純情。

を、翁が稚かりしとき、母のおもしろく語り給ふをさへ、いと哀なることにきししを、此の亡人なきひとの心は、昔の手兒女てこなが稚なき心に幾らをかまさりて悲しかりけん」と、かたるく涙さしぐみととめかぬるぞ、老は物えこらへぬなりけり。勝四郎が悲みはいふべくもなし。此の物語を聞きて、おもふあまりを田舎人の口鈍くもよみける、

いにしへの眞間の手兒奈を斯くばかり

戀ひてしあらん眞間のてこなを

思ふ心のはしばかりをもえいはぬぞ、よくいふ人の心にもまさりて、あはれなりとやいはん。かの國にしばくかよふ商人あきびとの聞き傳へてかたりけるなりき。

夢應の鯉魚

○延長—六十代醍醐天皇の御世の年號。
 ○三井寺—大津市の西北にある長等山園城寺(ナンジャウジ)の別稱。天智天武持統の三天皇此の地の井水を以て御産湯となし給ひしに因るといふ。天台宗寺門派の總本山。
 ○泉郎—海人(アマビト)の略語、海に漁して業とする人。

○俳諧—戲言の意。

むかし延長の頃、三井寺に興義といふ僧ありけり。繪に巧なるをもて名を世にゆるされけり。常に畫く所、佛像山水花鳥を事とせず。寺務の間ある日は湖に小船をうかべて、網引釣する泉郎に錢をあたへ、獲たる魚をもとの江に放ちて、其の魚の遊躍を見ては畫きけるほどに、年を経て細妙に至りけり。或時は繪に心を凝して眠をさそへば、ゆめの裏に江に入りて大小の魚と俱に遊ぶ。覺むれば即て見つるまゝを畫きて壁に貼し、みづから呼びて夢應の鯉魚と名付けけり。その繪の妙なるを感て、乞要むるもの前後を争へば、たゞ花鳥山水は乞ふにまかせてあたへ、鯉魚の繪はあながちに惜みて、人毎に戯れていふ、生を殺し鮮を喰ふ凡俗の人に、法師の養ふ魚必しも與へずとなん。其の繪と俳諧とともに天下にきこえけり。

○物せざりし—埋葬の手續を濟ませざりし。
 ○檀家—寺につきたる檀那の家。檀那は梵語、陀那鉢底の略語、陀那は施、鉢底は主の義。
 ○鮮き鱒—新しき魚肉を生にて細く切りたるもの。
 ○稀有—普通に希有と書く。世に常になき事。

一とせ病にかゝりて、七日を経て忽に眼を閉ぢ息絶えてむなしくなりぬ。徒弟友だちあつまりて歎き惜みけるが、只心頭のあたりの微し暖なるにぞ、若しやと居めぐりて守りつゝも三日を經にけるに、手足少し動き出づるやうなりしが、忽ち長嘘を吐きて眼をひらき醒めたるがごとくに起き上りて、人々に向ひ、「我人事を忘れて既に久し、幾日をか過しけん。」衆弟等いふ、「師三日前に息たえ給ひぬ。寺中の人々をはじめ、日頃睦まじくかたり給ふ殿原も詣で給ひて、葬の事をもはかりたまひぬれど、只師が心頭の暖なるを見て、柩にも藏めで、かく守り侍りしに、今や蘇生りたまふにつきて、『かしくも物せざりしよ』と怡びあへり。」興義點頭ていふ、「誰にもあれ、一人、檀家の平の助の殿の館に詣でて告さんは、『法師こそ不思議に生き侍れ。君今酒を酌み、鮮き鱒をつくらしめ給ふ。暫く宴を罷めて寺に詣でさせ給へ。稀有の物語聞え參らせん』とて、彼の人々のある形を見よ。我が詞に露違はじ」といふ。使異しみながら彼の館に往き



て其の由をいひ入れて窺ひ見るに、主の助を始め、令弟の十郎、家の子掃守など居めぐりて酒を酌みわたる。師が詞のたがはぬを奇とす。助の館の人々此の事を聞きて大に異し、先づ箸を止めて、十郎掃守をも召し具して寺に到る。

興義枕をあげて路次の勞をかたじけなうすれば、助も蘇生の賀を述べ。興義先づ問ひていふ。「君試に我がいふ事を聞かせ給へ。かの漁父文四に魚を誂へたまふことありや。」助驚きて、「まことにさることあり、いかにして知らせたふや。」興義、「かの漁父三尺あまりの魚を籠に入れて君が門に入る。君は賢弟と南面の所に碁を圍みておはす。掃守傍に侍りて桃の實の大なるを喰ひつゝ、奔の手段を見る。漁父が大魚を携へ来るを喜びて高坏に盛りたる桃を興へ、又盃をたまうて三獻飲ましめ給ふ。手したり顔に魚をとり出でて鱈にせしまで、法師がいふ所たがはでぞあらめ」といふに、助の人々此の事を聞きて、或は異し、或は心地惑ひて、

○路次の勞—途中の骨折。

○奔—奔は突と同音異義、奔は圍碁なり。突は大の義。

○高坏—腰高の食物を載する臺。

○三獻—獻(コン)は字の吳音、酒宴にて盃を他に獻する事、三獻を禮とす。

○鱈手—膳夫、料理人。

○雲井—雲の居る處の義にて、遠き處の意。雲井は當字。

○現なき心—生きて居るとも思はれぬ心地。

○鼈魚—「イロクヅ」の轉語。本は鱗(イロコ)と同じ、轉じて魚の意。鼈は大龜。魚族の意に用ひたり。

○海若—海神、または海の古名、つみは神の義。

○放生—魚鳥の類の人に捕へられて將に殺されんとするを買ひ集めて法を修して放ちやること。

かく詳なる言の由を頻に尋ぬるに、興義かたりていふ。

「我此の頃病に苦しみて堪へ難きあまり、其の死したるをも知らず、熱き心地少しさまさんものと、杖に扶けられて門を出づれば、病もやゝ忘れたるやうにて、籠の鳥の雲井にかへるこゝちす。山となく里となく行き行きて、又江の畔に出づ。湖水の碧なるを見るより、現なき心に浴びて遊びなんとて、そこに衣を脱ぎ去て身を跳らして深きに飛入りつゝも、彼此に遊びめぐるに、幼きより水に狎れたるにもあらぬが、愆ふに任せて戯れけり。今思へば愚なる夢ごころなりし。されども人の水に浮ぶは魚のこゝろよきにはしかず。こゝにて又魚の遊びをうらやむ心おこりぬ。傍にひとつの大魚ありていふ。『師のねがふ事いと易し。待たせ給へ』とて、杵の底に去と見しに、しばしして、冠装束したる人の、前の大魚に跨りて、許多の鼈魚を率ゐて浮びきたり。我にむかひていふ。『海若の詔あり。老僧かねて放生の功德多し。今江に入りて魚の遊躍を願ふ。權に金鯉が服を授

けて水府すゐがのたのしみをせさせ給ふ。只餌の香ばしきに味あじまされて、釣の絲にかゝり身を亡ふことなかれ」といひて、去りて見えすなりぬ。不思議のあまりにおのが身をかへり見れば、いつのまに鱗金光を備へて、ひとつの鯉魚と化しぬ。

あやしとも思はで、尾を振り鱗を動かして心のまゝに逍遙す。まづ長等の山おろし、立ちゐる浪に身をのせて、志賀の大灣おほわたの汀に遊べば、かち人の裳のすそぬらすゆきかひに驚かされて、比良の高山影映る深き水底みなそこに潜くとすれど、かくれ堅田の漁火いさりびによるぞうつなき。ぬば玉の夜中の潟にやどる月は、鏡の山の峯に清みて、八十の湊の八十隈もなくともしろ。沖津島山、竹生島、波にうつろふ朱の垣こそおどろかるれ。さしも伊吹の山風に、朝妻船も漕ぎ出づれば、葦間の夢を覺され、矢橋やばせの渡りする人の水なれ棹さかのがれては、瀬田の橋守にいくそたびか追はれぬ。日あたゝかなれば浮び、風あらしときは千尋の底に遊ぶ。

○逍遙す—氣散じの爲に出で遊ぶこと。
○志賀の大灣—近江琵琶湖の古名。續古今集六、冬、寂蓮—かち人の汀の水ふみならしわたれどぬれぬ志賀の大わだ。
○ぬば玉の—夜の枕詞。
○八十隈—敷多入り組みたる所。
○さしも云々—後拾遺集十一、戀—實方—かくとだにえやはいぶきのさしもぐささしも知らじなもゆるおもひを。
○朝妻船—近江の朝妻の入江の渡船。

○河伯—河の神。支那にては黄河の神。上文海若とあるを受けていふ。

○嗚呼—馬鹿らしくの意。本は愚にて笑ふべきさまを歎ずる聲より出でたる語。

○旁等—人々、各々などいふ意。旁は借字。

急いそにも飢ゑて食ほしげなるに、彼此をらちに養あそり得ずして狂ひゆくほどに、忽文四が釣を垂るゝにあふ。その餌甚だ香し。心又河伯かほの戒を守りて思ふ。我は佛の御弟子なり。しばし食ものを求め得ずとも、なぞもあさましく魚の餌を飲むべきとてそこを去る。暫時しばしありて飢ます—甚しければ、かさねて思ふに、今は堪へ難し、たとひ此の餌を飲むとも嗚呼なごに捕れんやは。素もろより他かれは相識るものなれば、何のはゞかりかあらんとて、遂に餌をのむ。文四はやく絲を収めて我を捕ふ。『こはいかにするぞ』と叫びぬれども、他かれかつて聞かず顔にもてなして、繩をもて我が腮あごを貫き、葦間あしまに船をつなぎ、我を籠におし入れて君が門に進み入る。君は賢弟と南面の間に奔して遊ばせたまふ。掃守かきもり傍に侍りて菓このみを啗ふ。文四がもて來し大魚を見て人々大に感あでさせ給ふ。我其のとき人々にむかひ聲をはり上げて、『旁等かたがらは興義をわすれたまふか。宥なさせたまへ、寺にかへさせたまへ』と連に叫びぬれど、人々知らぬ形さまにもてなして、只手を拍つて喜び給ふ。鱸手かしばび

なるものまづ我が兩眼を左手の指にてつよくとらへ、右手に礪すませし刀をとりて俎盤なまいたにのぼせ、既に切るべかりし時、我くるしさのあまりに大聲をあけて、『佛弟子を害する例たふしやある。我を助けよ助けよ』と哭き叫びぬれど聞き入れず。終に切らるゝとおぼえて夢醒めたり』と語る。人々大に感あやで異あやしみ、『師が物がたりにつきて思ふに、其の度ごとに魚の口の動くを見れど、更に聲を出すことなし。かゝることまのあたりに見しこそいと不思議なれ』とて、從者やまを家に走らしめて残れる鱗なますを湖に捨てさせけり。興義是より病愈えて杳はるかの後天年よはひをもて死まりける。其の終焉すまひに臨みて畫く所の鯉魚數枚をとりて湖に散せば、畫ける魚、紙繭しけんを離れて水に遊あそび戯す。こゝをもて興義が繪世に傳はらず。其の弟子成光なりみつなるもの興義が神妙をつたへて時に名あり。閑院の殿の障子に鶏を畫きしに、生ける鶏この繪を見て蹴ふたるよしを、古き物がたりに載せたり。

○從者「ジュウシヤ」の約音言。上代の讀辭。召仕はるゝ者。
○紙繭紙と絹。即ち繪を書きたる紙と絹。
○閑院殿左大臣藤原冬嗣の邸、京都市中京區、二條の南、西洞院の西。後に里内裏となる。
○古き物語古今著聞集十一、圖畫の篇に出づ。

雨月物語 卷之三

佛法僧

うらやすの國久しく、民作業たりにひを樂むあまりに、春は花の下もとに息やすらひ、秋は錦の林を尋ね、しらぬ火の筑紫路も知らずとは楫枕かぢまくらする人の、富士筑波の嶺々を心にしむるぞ、そゞろなるかな。
伊勢あふかの相可あふかといふ郷さとしに、拜志はやし氏の人、世をはやく嗣つぎに譲り、忌む事もなく頭あたまおろして、名を夢然むぜんと改め、從來もともと身に病やまさへなくて、彼此をらこちの旅寢を老の樂とする。季子すまのこ作之治さくぢなるものが生長ひさびさの頑かたくなるをうれひて、『京みやこの人見する』とて、一月あまり二條の別業わかぎに逗あそまりて、三月やまひの末吉野の奥の花を見て、知れる寺院に七日ばかり語らひ、此のついでに、『いまだ高野山を

○うらやすの國心安の國、穩ゆたかに心樂こころたのしき意、日本國の美稱。日本書紀三、「昔伊非諾尊目此國、日本者浦安國。」
○楫枕する人―船に乗りて旅行する人。
○相可―伊勢國多氣郡相可町。
○忌む事もなく―重病などにあらずの意、源氏物語、夕顔「忌むことなのしるしによみがへりてなむ。」
○別業―別荘。別墅に同じ。

○天の川—大和國吉野郡。
 ○摩尼の御山—高野山の美稱。摩尼は梵語、珠の義、因りて靈山の意とす。

見ず、いざとて、夏のはじめ青葉の茂みをわけつゝ、天の川といふより躑えて、摩尼の御山にいたる。道のゆくての嶮しきになづみて、おもはずも日傾きぬ。

壇場諸堂靈廟、残りなく拜みめぐりて、「こゝに宿からん」といへど、ふつに答ふるものなし。そこを行く人に所の掟を聞けば、「寺院、僧坊に便なき人は麓に下りて明すべし。此の山すべて旅人に一夜をかす事なし」と語る。いかゞはせん、さすがにも老の身の、嶮しき山路を來しがうへに、事のよしを聞きて大きに心倦み疲れぬ。作之治がいふ、「日もくれ足も痛みて、いかゞしてあまたの道を下らん。弱き身は草に臥すとも厭ひなし。只病み給はん事の悲しさよ。夢然云ふ、「旅はかゝるをこそ哀れともいふなれ、今夜脚をやぶり、倦み疲れて山をくだるとも、おのが古郷にもあらず。翌のみち又はかりがたし。此の山は扶桑第一の靈場、大師の廣徳語るに盡さず。殊にも來りて通夜し奉り、後世の事たのみ聞ゆべきに、幸

○扶桑—日本國の異稱。
 ○大師—弘法大師。

○法施—佛法三施（財施、無畏施、法施）中の一、佛に向ひて經を讀み法文を唱ふることを。

○福田—佛教に云ふ、諸種の福德を生ずる場所。三寶に福田、君父に恩田、貧者に悲田の三福田あり。
 ○陀羅尼—梵語、能持又總持の義。諷詠する經文の名、其の聲音を尊ぶ。
 ○道に界ふ—道に沿ふこと、剪燈夜話「瀑布泉流而界道」
 ○いまそかりける昔—御在世の時。
 ○三鈷—兩端三股より成れる金剛杵の一種、密教の修法に用ゐる法器。
 ○三鈷の松—風雅集、十六、雜中、阿一上人、「これぞこの唐土船にのりを得てしるしをのこす松の一本」

の時なれば、靈廟に夜もすがら法施し奉るべし」とて、杉の下道の小暗きを行き、靈廟の前なる燈籠堂の簀子に上りて、雨具うち敷き座を設けて、閑に念佛しつゝも、夜の更けゆくをわびてぞある。

方五十町に開きて、あやしげなる林も見えず。小石だも掃ひし福田ながら、さすがにこゝには寺院遠く、陀羅尼、鈴、錫の音も聞えず。木立は雲をしのぎて茂さび、道に界ふ水の音、ほそくと清み渡りて物悲しき。寝られぬまゝに夢然かたりていふ、「そもく大師の神化、土石草木も靈を啓きて、八百とせあまりの今にいたりて、いよくあらたに、いよくたふとし。遺芳、歴踪多きが中に、此の山なん第一の道場なり。大師いまそかりける昔、遠く唐土にわたり給ひ、あの國にて感でさせ給ふ事おはして、『此の三鈷のとゞまる所、我が道を揚ぐる靈地なり』とて、杳冥に向ひて抛させ給ふが、はた此の山に止まりぬる。壇場の御前なる三鈷の松こそ、此の物の落ち止まりし地なりと聞く。すべて此の山の草木泉石靈な

○一世ならぬ―前世からの。

○佛法僧―杜鵑類の鳥の名、夜鳴く。初、佛法と明瞭に鳴きて、後に低く僧と鳴くと云ふ。形未だ詳ならず。

○滅罪生善―榮華物語、鳥邊野例のやうに御祈修法などにはあらで、滅罪生善の爲とて護摩をぞ行はせ給ふ。
○大師の詩偈―弘法大師自作の佛頌。

○寒林云々―大師の文集通照發揮性靈集十に出づ。

らざるはあらずとなん。こよひ不思議にこゝに一夜をかり奉つる事、一世ならぬ善縁なり。爾弱きとて努々信心忘るべからずと、小やかにかたるも、清みて心ぼそし。

御廟のうしろの林にと覺えて、佛法々々となく鳥の音、山彦にこたへて近く聞ゆ。夢然目さむる心ちして、あなめづらし、あの啼く鳥こそ、佛法僧といふならめ。かねて此の山に栖みつるとは聞きしかど、正に其の音を聞きしといふ人もなきに、今宵のやどり、まことに滅罪生善の祥なるや。かの鳥は清淨の地をえらみて棲めるよしなり。上野の國迦葉山、下野の國二荒山、山城の醍醐の峯、河内の杵長山、就中此の山にすむ事、大師の詩偈ありて世の人よく知れり。

寒林獨坐草堂曉。 三寶之聲聞一鳥。
一鳥有聲人有心。 性心雲水俱了々。
又ふるき歌に、

松の尾の峯しづかなる曙に

あふぎて聞けば佛法僧啼く

むかし最福寺の延朗法師は、世にならびなき法華者なりしほどに、松の尾の御神、此の鳥をして常に延朗につかへしめ給ふよしをいひ傳ふれば、かの神垣にも栖む由は聞えぬ。こよひの奇妙既に一鳥聲あり、我こゝにありて心なからんや」とて、平生の樂みとする俳諧風の十七言を、しばしうちかたぶいていひ出でける。

鳥の音も秘密の山の茂みかな

旅硯とり出でて、御燈の光に書いつけ、今一聲もがなと耳を敲くるに、思ひがけずも遠く寺院の方より、前を追ふ聲の嚴めしく聞えて、やゝ近づき來り、「何人の夜深けて詣で給ふや」と、異しくも恐しく、親子顔を見合せて息をつめ、そなたをのみまもり居るに、はや前驅の若侍、橋板をあららかに踏みてこゝに來る。

○松の尾の云々―藤原光俊の歌。新撰六帖に出づ。松尾の峯は、京都市右京區松尾にある松尾神社の背後なる山。
○最福寺―松尾山の南、天台宗。
○延朗―天台宗の僧、源義家四世の孫、三井寺永澄の弟子となり、後に密教を受く。安元二年最福寺に住す。承元二年寂。
○松尾の御神―松尾神社。祭神大山咋神、中津島姫神。

○旅硯―旅行に携ふる小形の硯、多くは木製。

○殿下—古代は「テシカ」と訓む。攝政、關白、將軍の敬稱、こゝは關白秀次を指す。

○常陸—木村常陸介、重成の父。下に出づ。

○瓶子—酒を容るる瓶、今の徳利の類。
○紹巴—里村紹巴、連歌の名人、豊太閤の眷顧を受く。慶長五年歿。

おどろきて堂の右に潜みかくるゝを、武士はやく見つけて、「何者なるぞ。殿下の渡らせ給ふ。疾く下りよ」といふに、あわたゞしく簀子を下り、土に俯して跪まる。程なく多くの足音聞ゆる中に、沓音高く響きて、烏帽子直衣めしたる貴人、堂に上り給へば、從者の武士四五人ばかり、右左に座を設く。かの貴人々々に向ひて、「誰々はなど來らざる」と仰せらるゝに、「やがてぞ参りつらめ」と奏す。又一群の足音して、威儀ある武士、頭圓げたる入道等うち交りて、禮たてまつりて堂に昇る。貴人たゞ今來りし武士にむかひて、「常陸は何とておそく参りたるぞ」とあれば、かの武士いふ「白江・熊谷の兩士、公に大御酒すゝめたてまつる」とて、實やかなるに、臣も鮮き物一種調じまゐらせんため、御從に後れたてまつりぬ」と奏す。はやく酒殺をつらねてすゝめまゐらすれば、「萬作酌まぬれ」とぞ課せらる。恐まりて美相の若士膝行よりて、瓶子を捧ぐ。かなたこなたに杯をめぐらしていと興ありげなり。貴人又曰まはく、「絶えて紹巴が説話を

○祿—當座の褒美の品。

○大徳—「ダイトコ」と訓む。僧の修行積つて徳高きものの稱、本條は弘法大師を指す。

○玉川—奥の院大師廟の側を流るゝ小川の名。

○わすれても—風雅集十六、雑中に載せたる歌。

○風雅集—風雅和歌集。九十七代後村上天皇正平元年（光明院貞和二年）に成る。二十卷。花園上皇の御撰。

聞かず。召せ」と宣ふに、呼びつぐ様なりしが、我が跪まりし背の方より、大なる法師の面うち平めきて、目鼻あざやかなる人の、僧衣かいつくろひて座の末にまゐれり。貴人古語かれこれ問ひ辨へ給ふに、詳に答へたてまつるを、いとく感でさせ給うて、「他に祿とらせよ」と宣ふ。

一人の武士、かの法師に問ひていふ、「此の山は大徳の啓き給うて、土石草木も靈なきにあらずと聞く。さるに玉川の流れには毒あり、人飲む時は斃るゝが故に、大師のよませ給ふ歌とて、

わすれても汲みやしつらん旅人の
高野の奥の玉川のみづ

といふことを聞き傳へたり。大徳のさすがに此の毒ある流をば、など涸ては果し給はぬや、いぶかしき事を、足下にはいかに辨へ給ふ。」法師笑をふくみて云ふは、「此の歌は風雅集に撰み入れ給ふ。其の端詞に、『高野の奥の院へまゐる道に、玉川といふ河の水上に毒蟲おほかりければ、此の流

○隠神—凡人に見えぬ神。
○禁しめ—封じ込め。

○玉川てふ川—玉川六ヶ所あり。皆歌の名所。
井出玉川(山城)。
野路玉川(近江)。
掃衣玉川(攝津)。
高野玉川(紀伊)。
調布玉川(武蔵)。
野田玉川(陸前)。
○狂言—理に合はぬ妄説。タハコトの意。
下文にも見えたり。
○今の京の初—平安朝初期。
○口風—歌の口調。
○玉鬘—玉を緒に貫きて頭部の飾とする物。

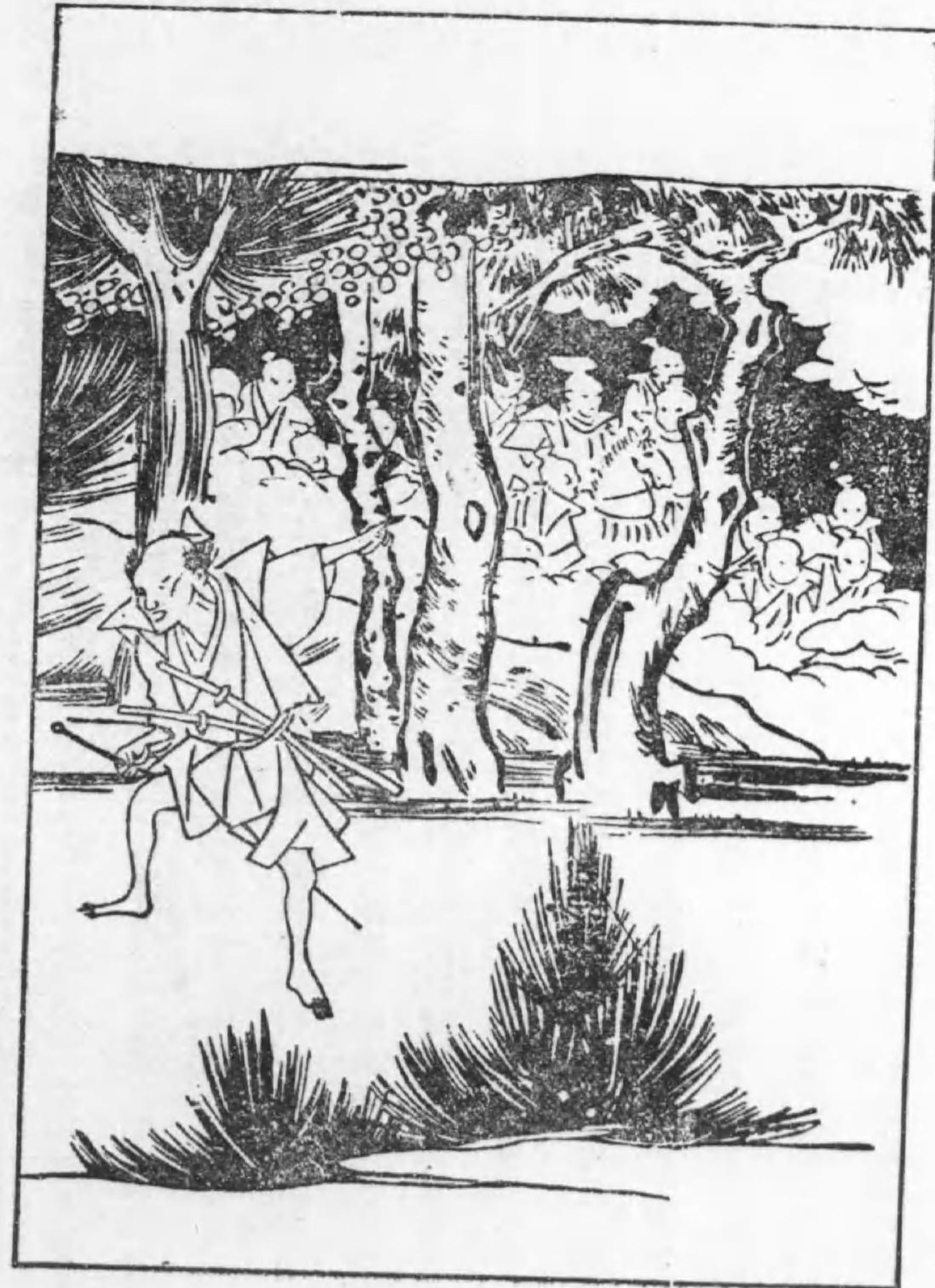
を飲むまじき由を示しおきて後、よみ侍りける」と、ことわらせ給へば、足下のおぼえ給ふごとくなり。されど、今の御疑ひ僻言ならぬは、大師は神通自在にして、隠神を役して道なきを開き、巖を鑿るには土を穿つよりも易く、大蛇を禁しめ、化鳥を奉仕しめ給ふ事、天が下の人の仰ぎたてまつる功なるを思ふには、此の歌の端の詞ぞまことしからね。もとより此の玉川てふ川は、國々にありて、いづれをよめる歌も、其の流の清きを擧げしなるを思へば、この玉川も毒ある流にはあらで、歌の意も、かばかり名に負ふ河の此の山にあるを、こゝに詣づる人は忘るゝも、流れの清きに愛でて、手に掬びつらんとよませ給ふにやあらんを、後の人の毒ありといふ狂言なり、此の端詞はつくりなせしものかとも思はるゝなり。又深く疑ふときは、此の歌の調今の京の初の口風にもあらず。おほよそ古語に、玉鬘、玉垂、珠衣の類は、形をほめ清きを賞むる語なるから、清水をも玉水・玉の井・玉河ともほむるなり、毒ある流れをなど玉てふ語は冠らし

めん。強に佛をたふとぶ人の、歌の意に細妙からぬは、これほどの訛は幾らをもしいづるなり。足下は歌よむ人にもおはせて、此の歌の意異しみ給ふは、用意ある事にこそ」と篤く感でにける。貴人をはじめ人々も此のことわりを頻りに感でさせ給ふ。

御堂のうしろの方に、佛法々と啼く聲近く聞ゆるに、貴人杯をあげ給ひて、「例の鳥絶えて鳴かざりしに、今夜の酒宴に榮あるぞ。紹巴いかに」と課せ給ふ。法師かしまりて、「某が短句公にも御耳すゝびましまさん。こゝに旅人の通夜しけるが、今の世の俳諧風をまうして侍る。公にはめぐらしくおはさんに、召して聞かせ給へ」といふ。「それ召せ」と課せらるるに、若きさむらひ夢然が方へ向ひ、「召し給ふぞ、近う參れ」と云ふ。夢現ともわかで、おそろしきまゝに、御まのあたりへ這ひ出づる。法師夢然に向ひ、「前によみつる詞を公に申し上げよ」といふ。夢然恐るゝ、「何をか申しつる、更に覺え侍らず、只赦し給はれ」といふ。法師かさねて「秘密の

○おはさんしおはせん」とあるべき格。

○秘密の山—眞言宗の山。前の夢然の句を指す。



○木村常陸介—以下の
人々皆秀次の臣、殉死
す。

○法橋—僧位の第三
等、近古には文人醫者
は僧に準ぜられたるに
よる。

○頭に云々—源氏物
語、手習、「頭の髪あら
ばふとりぬべき心地す
るに、この火ともした
る大徳は、かりもなく
云々。」

○頭陀袋—頭陀は梵
語、行脚修行の生活。其
の修行僧が經卷食器等
を入れ頭より前にかく
る袋。

山とは申さざるや。殿下の間はせ給ふ、急ぎ申し上げよ」といふ。夢然い
よく、恐れて、「殿下と課せ出され侍るは、誰にてわたらせ給ひ、かゝる深
山に夜宴をもよほし給ふや、更にいぶかしき事に侍る」といふ。法師答へ
て、「殿下と申し奉るは、關白秀次公にわたらせ給ふ。人々は木村常陸介、
雀部淡路、白江備後、熊谷大膳、栗野柰、日比野下野、山口少雲、丸毛不心、
隆西入道、山本主殿、山田三十郎、不破萬作、かく云ふは紹巴法橋なり。汝
等不思議の御目見えつかまつりたるは。前の言葉いそぎ申し上げよ」と
いふ。頭に髪あらば、太るべきばかりに凄じく、肝魂も空に返る心地し
て、振ふく頭陀袋より清き紙取り出でて、筆もしどろに書きつけてさし
出すを、主殿取りてたかく吟じ上る。

鳥の音も秘密の山の茂みかな

貴人聞かせ給ひて、「口がしこくもつかまつりしな。誰そ此の末句を申
せ」とのたまふに、山田三十郎座をすゝみて、「某つかうまつらん」とて、し

ばしうちかたぶきてかくなん。

「芥子たき明すみじか夜の牀

いかあるべき」と紹巴に見する。「よろしくまうされたり」と、公の前に
出すを見たまひて、「片羽にもあらぬは」と興じ給ひて、又杯を擧げてめぐ
らし給ふ。

○修羅の時—闘争の始
まる時。
○阿修羅—梵語、悪神
の意。阿は非、修羅は
天の義、佛説に常に闘
争を好み果報天に劣る
といふ。
○石田云々—石田三成
増田長盛、秀次と善か
らず秀吉をして罪せし
む。
○泡吹かせん—驚きあ
きれしむる意。

○しのゝめの—あくの
枕詞。

淡路と聞えし人、にはかに色を違へて、「はや修羅の時にや、阿修羅ども
御迎へに來ると聞え侍る。立たせ給へ」といへば、一座の人々忽ち面に血
を灌ぎしごとく、いざ石田・増田が徒に、今夜も泡吹かせん」と勇みて立
ち躁ぐ。秀次、木村に向はせ給ひ、「よしなき奴に我が姿を見せつるぞ。
他二人も修羅につれ來れ」と課せある。老臣の人々かけ隔たりて、聲をそ
ろへ、「いまだ命つきざる者なり。例の悪業なせさせ給ひそ」といふ詞も、
人々の形も、遠く雲井に行くがごとし。親子は氣絶えて暫時がうち死に
入りけるが、しのゝめの明けゆく空に、ふる露の冷やかなるに生き出でし

○藥鍼—藥は病を癒す一切の劑、鍼は鍼醫の用ゐる金銀の針。
 ○惡逆塚—關白秀次の塚、又畜生塚ともいふ。京都市三條小橋の南、瑞泉寺境内。

かど、いまだ明けさらぬ恐しさに、大師の御名をせはしく唱へつゝ、漸日出づると見て急ぎ山を下り、京にかへりて藥鍼の保養をなしける。一日夢然三條の橋を過ぐる時、惡逆塚のこと思ひ出づるより、かの寺眺められて、白晝ながら物凄じくありけると、京人に語りしを、そがまゝにしるしぬ。

吉備津の釜

○妬婦—五雜俎、八、「人有_レ爲_二妬婦_一解_レ嘲者_一曰、士君子情慾無_レ節、得_二一嚴婦_一約_二束之_一、亦動_レ心忍_レ性之一端也、故諺有_レ曰、到_レ老方知_二妬婦功_一。」

○霹靂—烈しき雷。
 ○醃—肉醬、肉もて作れる醬。俗に云ふ鹽辛。

○嘉吉—百二代後花園天皇の御世の年號。
 ○元年の亂—嘉吉元年、赤松滿祐、大將軍足利義教を弑して播磨の白旗城に據る。山名持豊に誅せらる。

「妬婦の養ひがたきも、老いての後其の功を知る」と。咨是何人の語ぞや。害の甚だしからぬも、商工を妨げ物を破りて垣の隣の口をふせぎがたく、害の大なるに及びては、家を失ひ、國をほろぼして天が下に笑を傳ふ。いにしへより此の毒に中人、幾許といふ事を知らず。死して蟒となり、或は霹靂を震うて怨を報ゆる類は、其の肉を醃にするとも、飽くべからず。さるためしは稀なり。夫の己をよく修めて教へなば、此の患のおのづから避くべきを、只かりそめなる徒ごとくに、女の慳しき性を募らしめて、其の身の憂をもとむるにぞありける。禽を制するは氣にあり、婦を制するは其の夫の雄々しきにあり」といふは、現にさることぞかし。

吉備の國賀夜郡庭妹の郷に、井澤庄太夫といふものあり。祖父は播磨の赤松に仕へしが、去ぬる嘉吉元年の亂に、かの館を去りてこゝに來り、

○春耕し「荀子」春耕、夏耘、秋收、冬藏、四者不_レ失_レ時、故五穀不_レ絶而百姓有_二餘食_一也。

○吉備津一備中國吉備郡真金町なる吉備津彦神社。吉備津彦命を祀る。

○箏一古く「サウノコト」といふ、今の紫筑琴。

○鴨別が裔一四道將軍吉備武彦命の末裔。

○門戸一家柄。

○萬歳一古は必ず「マンセイ」と讀む。支那にては上下一般に祝意を表するに用ゐたり。

○よき人がな一人もがなの略語。人もあつて欲しいの意。
○聘禮一結婚の前兩家互に物品を贈りかはす禮、俗に結納。

○當社に祈誓する人云一神社考に「備中國吉備津宮裏有_二釜_一（中略）又詣_レ神者欲_レ試_レ事、奠_レ黍盛_二于釜前_一、祝唱畢、燃_レ柴、則釜鳴、如_二牛聲_一即吉、若釜不_レ鳴則凶。」

○赤繩云々一夫婦の縁を結ぶこと。幽怪錄、「唐章周旅次_二宋城_一、遇_二老人_一向_レ月檢_レ書、因問_二囊中赤繩_一云、繫_二夫婦之足_一、雖_二仇家異域_一、此繩一繫終不_レ可_レ易。」

庄太夫にいたるまで、三代を経て春耕し秋收めて、家豊に暮しけり。一子正太郎なるもの、農業を厭ふあまりに、酒に亂れ色に耽りて、父が掟を守らず、父母これを歎きて私にはかるは、「あはれ良人の女子の貌よきを娶りてあはせなば、渠が身もおのづから修まりなん」とて、あまねく國中をもとむるに、幸に媒氏ありていふ、「吉備津の神主香央造酒が女子は、うまれだち秀麗にて、父母にもよく仕へ、かつ歌をよみ、箏に工なり。從來かの家は吉備の鴨別が裔にて、家系も正しければ、君が家に因み給ふは果吉祥なるべし。此の事の就らんは老が願ふ所なり。大人の御心いかにおぼさんや」といふ。庄太夫大に悦び、「よくも説かせ給ふものかな。此の事我が家にとりて千年の計なりといへども、香央は此の國の貴族にて、我は氏なき田夫なり。門戸敵すべからねば、恐くは肯がひ給はじ。媒氏の翁笑をつくりて、「大人の謙り給ふ事甚し。我必ず萬歳を諷ふべし」と、往きて香央に説けば、彼方にもよろこびつゝ、妻なるものにも語らふに、妻もい

さみていふ、「我が女子既に十七歳になりぬれば、朝夕によき人がな娶せんものをと、心もちの侍らず、はやく日をえらみて、聘禮を納れ給へ」と、強にすゝむれば、盟約すでになりて、井澤にかへりごとす。即て聘禮を厚くとゝのへて送り納れ、よき日をととりて、婚儀をもよほしけり。
猶幸を神に祈るとて、巫子祝部を召し集めて、御湯をたてまつる。そもも當社に祈誓する人は、數の祓物を供へて、御湯を奉り、吉祥凶祥を占ふ。巫子祝詞終り、湯の沸き上るに及びて、吉祥には釜の鳴る音牛の吼ゆるがごとし。凶きは釜に音なし。是を吉備津の御釜祓といふ。さるに香央が家の事は、神の祈させ給はぬにや、只秋の蟲の叢にすだくばかりの聲もなし。こゝに疑をおこして、此の祥を妻に語らふ。妻更に疑はず、「御釜の音なかりしは、祝部等が身の清からぬにぞあらめ。既に聘禮を納めしうへ、かの赤繩に繋ぎては、仇ある家、異なる域なりとも易ふべからず」と聞くものを、殊に井澤は弓の本末をも知りたる人の流にて、掟ある家と

○佳婿「ムコガネ」は豫めむこと思ひ設けたる人。佳婿は當字。

聞けば、今否むとも承がはじ。殊に佳婿の麗なるをほの聞きて、我が兒も日を數へて待ちわぶる物を、今のよからぬ言を聞くものならば、不慮なる事をや仕出でん。其の時悔ゆるとも返らじ」と、言をつくして諫むるは、まことに女の意ばへなるべし。香央も從來ねがふ因みなれば、深く疑はず。妻のことばに従て、婚儀とのへ、兩家の親族氏族、鶴の千とせ龜の萬代をうたひことぶきけり。

香央の女子磯良、かしこに往きてより、夙に起きおそく臥して、常に舅姑の傍を去らず。夫が性をはかりて、心をつくして仕へければ、井澤夫婦は孝節を感でたしとて、歡びに耐へねば、正太郎も其の志に愛でて、むつまじくかたらひけり。されどおのがまゝの奸たる性はいかにせん。いつの頃より輒の津の袖といふ妓女に、ふかくなじみて、遂に贖ひ出し、ちかき里に別莊をしつらひ、かしこに日をかさねて、家にかへらず。磯良これを怨みて、或は舅姑の忿に托せて諫め、或日は徒なる心をうらみかこてど

○輒の津—備後國沼隈郡の港。今の輒町。

○大虚にのみ—上の空にのみといふに同じ。しかと心に留めざることの形容。

○朝夕の奴—朝晩の奉仕。

も、大虚にのみ聞きなして、後は月をわたりてかへり來らず。父は磯良が切なる行止を見るに忍びず、正太郎を責めて押籠めける。磯良これを悲しがりて朝夕の奴も殊に實やかに、かつ袖が方へも私に物を飼りて、信のかぎりをぞつくしける。

一日父が宿にあらぬ間に、正太郎磯良を語らひていふ、「御許の信ある操を見て、今はおのれが身の罪をくゆるばかりなり。かの女をも古郷に送りて後、父の面を和め奉らん。渠は播磨の印南野の者なるが、親もなき身の淺ましくあるを、いとほしく思ひて、憐をもかけつるなり。我に捨てられなば、はた船泊の妓女となるべし。おなじ淺ましき奴なりとも、京は人の情もありと聞けば、渠をば京に送りやりて、榮ある人に仕へさせたく思ふなり。我かくてあれば萬に貧しかりぬべし。路の代、身にまとも物も誰がはかりごととしてあたへん。御許此の事をよくして、渠を恵み給へ」と、ねんごろにあつらへけるを、磯良いとも喜しく、「此の事安くおぼし給

○和め—穩に落付けよう。御機嫌を直すやうにの意。
○印南野—播磨國加古郡より印南郡に跨りし原野。
○榮ある人—「よしある」は由緒あるにて貴戚又名門の意。
○路の代—路用金。旅行の入費。

○すたりて―受け附けざるやうになりて。食慾減退の意。

○荒井―今の加古郡荒井村なるべし。洗川を隔てて印南郡伊保村と對す。

○鬼化―物怪。死靈、生靈の祟。

○音をのみ泣きて―痛切に歎き悲みて。

○窮鬼―生靈(イキリヤウ)に同じ。生きたる人の靈の他に祟ること。

○塔婆―梵語。卒塔婆の略、高顯又方墳の義、高く造れる家、塔は塔婆の略語。後には木等にて塔の形式に、四角或は扁平に刻みて造れるにも、石にて積めるものにもいふ。供養の標なり。本條のは今俗に云ふ塔婆なるべし。

○黄泉―死して埋まる所、地下。冥土の意。

○招魂の法―支那上古の俗、家に死人あれば衣を以て屋に昇り、北面して三たびよばひて靈魂を呼び還すといふ式。
○しみらに―間斷なく。

へしとて、私におのが衣服調度を金に質へ、香央の母が許へも偽りて金を乞ひ、正太郎に與へける。此の金を得て、密に家を脱れ出で、袖なるものを具して、京の方へ逃げ上りける。かくまでたばかられしかば、今はひたすらにうらみ歎きて、遂に重き病に臥しにけり。井澤香央の人々、彼を惡み此を哀みて、専ら醫の驗をもとむれども、粥さへ日々にすたりて、よろづにたのみなくぞ見えにけり。

こゝに播磨の國印南郡荒井の里に彦六といふ男あり。渠は袖とちかき從弟の因あれば、先づこれを訪らひて、しばらく足を休めける。彦六正太郎にむかひて、「京なりとて人ごとに頼しくもあらじ。こゝに駐られよ。一飯をわけて、ともに過活のはかりごとあらん」と、たのみある詞に、心おちゐて、こゝに住むべきに定めける。彦六我が住む隣なる破屋をかりて住ましめ、友得たりとて怡びけり。しかるに袖、風のこゝちといひしが、何となく惱み出でて、鬼化のやうに狂はしげなれば、こゝに來りて幾日も

あらず、此の禍に罹る悲しさに、みづからも食さへわすれて抱き扶くれども、只音をのみ泣きて胸窮り堪へ難げに、さむれば常にかはることもなし。窮鬼といふものにや、古郷に捨てし人のもしやと獨り胸苦し。彦六これを諫めて、「いかでさる事のあらん。疫といふものの惱ましきはあまた見來りぬ。熱き心少しさめたらんには、夢わすれたるやうなるべし」と、やすげにいふぞたのみなる。見る／＼露ばかりのしるしもなく、七日にして空しくなりぬ。天を仰ぎ、地を敲きて哭き悲しみ、俱にもと物狂はしきを、さまざまにいひ和さめて、かくてはとて遂に曠野の煙となしはてぬ。骨をひろひ、壙を築きて塔婆を營み、僧を迎へて、菩提のことねんごろに弔ひける。

正太郎今は俯して黄泉をしたへども、招魂の法をもとむる方なく、仰ぎて古郷をおもへば、かへりて地下よりも遠きこゝちせられ、前に渡りなく、うしろに途を失ひ、晝はしみらに打臥して、夕々毎には壙のもとに詣

○我が身一つ―古今集
四、秋上、大江千里、
「月見れば千々に物こ
そ悲しけれ我が身一つ
の秋にはあらねど。」

○さりがたき御方―棄
て難き御方。妻なる
人。

○かなしき婦―最愛の
妻。

○憑みつる君―主人な
る人。

○刀自の君―妻なる
君。刀自は一家を主宰
する婦人の稱。

でて見れば、小草はやくも繁りて、蟲のこゑすゞろに悲し。此の秋のわびしきは、我が身一つぞと思ひつゞくるに、天雲のよそにも同じなげきありて、ならびたる新堀あり。こゝに詣づる女の世にも悲しげなる形して、花をたむけ、水を灌ぎたるを見て、「あな哀れ、わかき御許のかく氣疎きあら野にさまよひ給ふよ」といふに、女かへり見て、「我が身夕々ごとくに詣で侍るに、殿はかならず前に詣で給ふ。さりがたき御方に別れ給ふにてやまさん。御心のうちはかりまゐらせて悲し」と潜然となく。正太郎いふ、「さる事に侍り、十日ばかりさきに、かなしき婦を亡ひたるが、世に残りて憑みなく侍れば、こゝに詣づることをこそ、心放にもし侍るなれ。御許にもさこそましますなるべし。」女いふ、「かく詣でつかうまつるは、憑みつる君の御跡にて、いつくの日こゝに葬り奉る。家に残ります女君のあまりに歎かせ給ひて、此の頃はむづかしき病にこそませ給ふなれば、かくかはりまゐらせて、香花をはこび侍るなり」といふ。正太郎云ふ、刀自の君

○引入りたる方―入り
込みたる道。

○ほどなき―狭き。

の病み給ふもいとことわりなるものを、そも故人は何人にて、家は何地に住ませ給ふや。女いふ、「憑みつる君は此の國にては由縁ある御方なりしが、人の讒にあひて領所をも失ひ、今は此の野の隈に侘しくて住ませ給ふ。女君は國の隣までも聞え給ふ美人なるが、此の君によりてぞ家所領をも亡し給ひぬれ」とかたる。此の物がたりに心のうつるとはなくて、「さてしもその君のはかなくて住ませ給ふは、こゝ近きにや。訪らひまゐらせて、同じ悲をもかたり和さまん。具し給へ」といふ。「家は殿の來らせ給ふ道のすこし引入りたる方なり。便りなくませば、時々訪らはせ給へ。待ち侘び給はんものを」と、前に立ちてあゆむ。

二丁あまりを來て、細き徑あり。こゝよりも、一丁ばかりをあゆみて、小暗き林の裏にちひさき草屋あり。竹の扉のわびしきに、七日あまりの月のあかくさし入りて、ほどなき庭の荒れたるさへ見ゆ。細き燈火の光、窓の紙を漏りてうらさびし。「こゝに待たせ給へ」とて内に入りぬ。苦む

- 吹きあふちて―吹きひらめきて。
- 黒棚―室内に置きて手道具を載する棚、多く三重にして黒漆蒔絵等美麗に造りたる棚。
- 前栽―庭前に植ゑたる草木。又其の地。
- 二間云々―柱と柱との間二つある建築。
- 古き衾―古き夜具。
- いとほし妻―可愛き妻。

○たゆき眼―病み衰へ力なき目つき。

したる古井のもとに、立ちて見入るに、唐紙すこし開けたる間より、火影吹きあふちて、黒棚のきらめきたるもゆかしく覺ゆ。女出で來りて、「御訪らひの由申しつるに、入らせ給へ。物隔ててかたりまゐらせんと、端の方へ膝行出で給ふ。彼所に入らせ給へ」とて、前栽をめぐりて奥の方へともなひ行く。二間の客殿を人の入るばかりあけて、低き屏風を立てて古き衾の端出でて、主はこゝにありと見えたり。正太郎かなたに向ひて、「はかなくて病にさへそませ給ふよし。おのれもいとほし妻を亡ひて侍れば、おなじ悲しみをも問ひかはしまゐらせんとて、推して詣で侍りぬ」といふ。あるじの女屏風すこし引きあけて、「めづらしくもあひ見奉るものかな。つらき報の程しらせまゐらせん」といふに、驚きて見れば、古郷に残せし磯良なり。顔の色いと青ざめて、たゆき眼すさまじく、我を指したる手の青く細りたる恐しさに、「あなや」と叫んで、たふれ死す。

時うつりて生き出づ。眼をほそくひらき見るに、家と見しは、もとあり

- 三昧堂―墓地に建て僧をして死者の冥福を修めしむる堂。三昧は梵語、心を一所に住めて動かざること。
- 刀田の里―播磨國加古郡尾上村の北方に刀田山鶴林寺あり。
- 陽陰師―占筮相地等の専門家。古代は陰陽寮の官。
- 身褻―身に罪穢ある時、河原に出でて水にて淨め祓ふ事。
- 厭符―神佛祈禱の符。
- 四十二日が間―佛家に人の死後の七七、四十九日を中陰又中有といふ。此の間死者の靈魂が中有にさまよひゐるとなす。
- 篆籀―篆は篆書、籀は籀文とて篆書以前の古文。
- 朱符―朱字の祈禱札。

し荒野の三昧堂にて、黒き佛のみぞ立たせまします。里遠き犬の聲を力に、家に走りかへりて、彦六にしかくくのよしを語りければ、「なでふ狐に欺かれしなるべし。心の臆れたるときは、かならず迷はし神の魔ふものぞ。足下のごとく、虚弱人のかく患に沈みしは、神佛に祈りて、心を收めつべし。刀田の里にたふとき陰陽師のいます。身褻して厭符をも戴き給へ」と、いざなひて、陰陽師の許にゆき、はじめより詳にかたりて、此の占をもとむ。陰陽師占へ考へていふ。「災すでに窮りて易からず。さきに女の命をうばひ、怨み猶盡さず、足下の命も旦夕にせまる。此の鬼世を去りぬるは七日前なれば、今日より四十二日が間、戸を閉てて、おもき物齋すべし。我が禁を守らば、九死を出でて全からんか。一時を過るともまぬかるべからず」と、かたくをしへて、筆をとり、正太郎が背より手足におよぶまで、篆籀のごとき文字を書き、猶朱符あまた紙にしるして與へ、「此の咒を戸毎に貼して、神佛を念ずべし。あやまちして身を亡ぶることなか

○咒一唱へ言。咒詛の文句。

れ」と教ふるに、恐れみ且よろこびて、家にかへり、朱符を門に貼し、窓に貼して、おもき物齋にこもりける。

其の夜三更の頃おそろしき聲して、「あなにくや、こゝにたふとき符文を設けつるよ」とつぶやきて、復び聲なし。恐ろしさのあまりに、長き夜をかこつ。程なく夜明けぬるに生き出でて、急ぎ彦六が方の壁を敲きて、夜の事をかたる。彦六もはじめて陰陽師が詞を奇なりとして、おのれも其の夜は寝ねずして三更の頃を待ちくれける。松ふく風物を偲すがごとく、雨さへふりて常ならぬ夜のさまに、壁を隔てて聲をかけあひ、既に四更にいたる。下屋の窓の紙に、さと赤き光さして、「あな悪やこゝにも貼しつるよ」といふ聲深き夜にいと凄じく、髪も生毛もことごとく聳立て、しばらくは死に入りたり。明くれば夜のさまを語り、暮るれば明くるを慕ひて、此の月日頃千歳を過ぐるよりも久し。かの鬼も夜毎に家を繞り、或は屋の棟に叫びて、忿れる聲夜ましに凄じ。かくして四十二日とい

○尻居に座す―尻餅を
ついて坐る。

ふ其の夜にいたりぬ。今は一夜にみたしぬれば、殊に慎みて、やゝ五更の天もしらくと明けわたりぬ。長き夢のさめたるごとく、やがて彦六をよぶに、壁によりて「いかに」と答ふ。「おもき物いみも既に満てぬ。絶えて兄長の面を見ず、なつかしさに、かつ此の月頃の憂怕しさを心のかぎりいひ和さまん。眠さまし給へ、我も外の方に出でん」といふ。彦六用意なき男なれば、「今は何かあらん。いざこなたへわたり給へ」と戸を明くる事半ならず。となりの軒に「あなや」と叫ぶ聲耳をつらぬきて、思はず尻居に座す。「こは正太郎が身の上こそ」と、斧引提げて大路に出づれば、明けたるといひし夜はまだ暗く、月は中天ながら影朧々として風冷やかに、さて正太郎が戸は明けはなして、其の人は見えず。内にや逃げ入りつらんと走り入りて見れども、いづくに竄るべき住居にもあらねば、大路にや倒れけんともむれども、其のわたりには物もなし。いかになりつるやと、あるひは異しき、或は恐るゝともし火を挑げてこゝかしこを見廻

るに、明けたる戸腋の壁に、腥々しき血灌ぎ流れて、地につたふ。されど屍も骨も見えず。月あかりに見れば、軒の端にもものあり。ともし火を捧げて照し見るに、男の髪もこぎりの髻ばかりかゝりて、外には露ばかりのものもなし。淺ましくもおそろしさは筆につくすべうもあらずなん。夜も明けてちかき野山を探しもとむれども、つひに其の跡さへなくてやみぬ。此の事井澤が家へもいひおくりぬれば、涙ながらに香央にも告げしらせぬ。されば、陰陽師が占のいちじるき、御釜あしきさかの凶祥もはたたがはさりけるぞ、いとまたふとかりけるとかたり傳へけり。

雨月物語 卷之四

蛇性の姪

いつの時代なりけん、紀の國三輪が崎に、大宅の竹助といふ人ありけり。此の人海の幸ありて、海郎どもあまた養ひ、鱈はたの廣物、狭き物を盡してすなどり、家豊に暮しける。男子二人、女子一人をもてり。太郎は質朴すなはにしてよく生産たりにひを治む。二郎の女子は大和の人の娶つまこひに迎へられて、彼處にゆく。三郎の豊雄なるものあり。生長優ひさしななりやしく、常に都風みやびたる事をのみ好みて、過活わたらひ心なかりけり。父是を憂ひつゝ思ふは、家財たからを分ちたりとも、即て人の物となさん。さりとして他の家を嗣がしめんも、はたうたてき事聞くらんが病やましき。只なすまゝに生おほし立てて、博士はかせにもなれかし。法師にもなれ

蛇性の姪

○三輪が崎—今、新宮市の南端。
 ○鱈の廣物—大きな魚、鱈(ハタ)は今いふヒレ。祝詞の用語。
 ○狭き物—「セバキモノ」の意、即ち小さき魚。古言には「ハタノサモノ」と云ふ。
 ○すなどり—漁獲すること。
 ○娶—匹偶を求むる意。

○羈物―俗に手足まとい、厄介物の意。
○神奴―神官。

○東南―十二支の子を正北に配當して、右に順に數へて東南の間は辰巳に當る。巽。
○飛鳥―飛鳥社、新宮の西北。
○神秀倉―神寶を納れたる庫。
○賤しき―「アヤシ」は「イヤシ」の古言。

○遠山―山藍色も遠山の形を指りたる衣。
○鬢―支那にて婢女の俗稱。字又「鴉鬢」に作る。Yの音「ア」。「了」と別なり。

○三つ山―熊野の本宮、新宮、那智の三山。

○近まさり―近づけば更に其の容色の勝りてよく見ゆる意。

○狩りくらし―魚貝を取り歩きまはりて。

○くるしくも云々―萬葉集三、長忌寸奥麿の歌。

○目かくる男―恵み使ふ者。

かし、命の極は太郎が羈物にてあらせんとて、強ひて掟をもせざりけり。此の豊雄、新宮の神奴安部の弓鷹を師として行き通ひける。

九月下旬、けふはことになごりなく和たる海の暴に東南の雲を生して、小雨そぼふり来る。師が許にて傘かりて歸るに、飛鳥の神秀倉見やらるる邊より、雨もや、頻なれば、其所なる海郎が屋に立ちよる。あるじの老はひ出でて、「こは大人の弟子の君にてます。かく賤しき所に入らせ給ふぞいと恐まりたる事、是敷きて奉らん」とて、圓座の汚なげなるを清めてまわらす。零時息るほどは、何か厭ふべき。なあわたゞしくせそ」とて休らひぬ。外の方に麗しき聲して、「此の軒しばし恵ませ給へ」といひつゝ、入り来るを、奇しと見るに、年は二十にたらぬ女の、顔容髪のかゝり、いと艶ひやかに、遠山ずりの色よき衣著て、鬢の十四五ばかりの清げなるに、包し物もたせ、しとゞに濡れてわびしげなるが、豊雄を見て、面さと打赤めて、恥かしげなる形の貴やかなるに、不慮に心動きて且思ふは、此の

邊にかうよろしき人の住むらんを、今まで聞かぬことはあらじを、こは都人の三つ山詣せし次に、海愛らしくこゝに遊ぶらん。さりとして男だつ者もつれざるぞいとはしたなる事かなと思ひつゝ、すこし身退きて、「こゝに入らせ給へ。雨もやがてぞ休みなん」といふ。女「しばし宥させ給へ」とて、ほどなき住居なれば、つい竝ぶやうに居るを見るに、近まさりして、此の世の人とも思はれぬばかり美しきに、心も空にかへる思ひして、女にむかひ、「貴なるわたりの御方とは見奉るが、三山詣やし給ふらん。峯の温泉にや出で立ち給ふらん。かうすさまじき荒磯を何の見所ありて、狩りくらし給ふ。こゝなんいにしへの人の、

くるしくもふりくる雨か三輪が崎

佐野のわたりに家もあらなくに

とよめるは、まことけふのあはれなりける。此の家賤しけれど、おのれが親の目かくる男なり。心ゆりて雨休め給へ。そもいづち旅の御宿りとはし

○聞え給ふ―申すの意の聞えを「承る」の意に用ゐたり。以下同例。

○まどろむ―ウトくと僅に眠る。
○部―檐より吹き下し來る風を止むる爲に用ゐる格子。晝は上げ、夜は下す。今も神社佛寺、高貴の御殿造などに用ゐたり。

給ふ。御見送せんも却りて無禮なれば、此の傘もて出で給へ」といふ。女「いと嬉しき御心を聞え給ふ。其の御思ひに乾てまゐりなん。都のものにてもあらず、此の近き所に年來住みこし侍るが、けふなんよき日とて那智に詣で侍るを暴なる雨の恐しさに、やどらせ給ふともしらずで、わりなくも立ちより侍る。こゝより遠からねば此の小休に出で侍らん」といふを、強に「此の傘もていき給へ。何の便にも求めなん。雨は更に休みたりともなきを、さて御住居はいづ方ぞ。是より使奉らん」といへば、「新宮の邊にて『縣の眞女兒が家は』と尋ね給はれ。日も暮れなん。御惠のほどを指し戴きて歸りなん」とて傘とりて出づるを見送りつゝも、あるじが簑笠かりて家に歸りしかど、猶梯の露忘れ難く、しばしまどろむ曉の夢に、かの眞女兒が家に尋ねゆきて見れば、門も家もいと大きに造りなし、葎おろし、簾垂れこめて、ゆかしげに住みなしたり。眞女兒出で迎へて「御情忘れがたく待ち戀ひ奉る。此方に入らせ給へ」とて奥の方にいざなひ、酒菓子種

種と欺待しつゝ、嬉しき酔ごここに、つひに枕をともししてかたるとおもへば、夜明けて夢さめぬ。現ならましかばと思ふ心の忙しきに、朝食も打忘れてうかれ出でぬ。

新宮の郷に來て、「縣の眞女兒が家は」と尋ぬるに更に知りたる人なし。午時かたぶくまで尋ね勞ひたるに、かの丫鬢東の方よりあゆみ來る。豊雄見るより大に喜び、「娘子の家はいづくぞ、傘求むとて尋ね來る」と云ふ。丫鬢打ゑみて、「よくも來ませり。こなたに歩み給へ」とて、前に立ちてゆくゆく、幾ほどもなく、「こゝぞ」と聞ゆる所を見るに、門高く造りなし、家も大きなり。葎おろし簾たれこめしまで、夢の裏に見しと露たがはぬを、奇しと思ふ思ふ門に入る。丫鬢走り入りて「傘の主詣で給ふを誘ひ奉る」といへば「いづ方にますぞ。こち迎へませ」といひつゝ立出づるは眞女兒なり。豊雄「こゝに安倍の大人とまうすは、年來物學ぶ師にてます。彼所に詣る便に、傘とりて歸るとて、推して參りぬ。御住居見おきて侍れば、

○まろや—まろやは了蟹の名。下文に出づ。

○几帳—座側に立て内外を遮るに用ゐる具。
○御厨子—書棚のこく三重にて舞戸を附け、黒漆蒔繪等を施して造れる棚、舎内に置きて書畫調度など載する具。
○壁代—殿舎の羽目板等に張る帷。
○古代—昔めきたること。
○高坏平坏—俗に云ふ腰高、平坏は臺なきも其の用同じ。
○花精妙—櫻の枕詞。

○いづれの神に云々—伊勢物語、八九段、人知れずわれ戀ひ死なばあぢきなくいづれの神になきなおはせむし。

○受領—國守の異稱。

○任はてぬ—一任満四年。

○御宮仕—奥向に奉公するといふ名義にて、實は夫人となる事。

○おのが世ならぬ—戸主としてあらぬ事。

○嗚呼なること—馬鹿げたること。

又こそ詣で來ん」といふを、眞女兒強にとどめて、「まろや、努出だし奉るな」といへば、鬢立ふたがりて、「傘強ひて惠ませ給ふならずや。其が報いに強ひてとどめまゐらす」とて、腰を押して南面の所に迎へける。板敷の間に床疊を設けて、几帳御厨子の飾、壁代の繪なども、皆古代のよき物にて、倫の人の住居ならず。眞女兒立出でて、「故ありて人なき家とはなりぬれば、實やかなる御饗もえし奉らず、只薄酒一杯すゝめ奉らん」とて、高坏平坏の清らなるに、海の物、山の物もりならべて、瓶子土器撃けて、まろや酌まゐる。豊雄また夢心してさむるやと思へど、正に現なるを却りて奇しみるたる。客も主もともに酔ごちなるとき、眞女兒杯をあげて、豊雄にむかひ、花精妙櫻が枝の水にうつろひなす面に、春吹く風をあやなし、梢たちぐく鶯の艶ひある聲していひ出づるは、「面なきことのいはで病みなんも、いづれの神になき名負すらんかし。努徒なる言にな聞き給ひそ。故は都の生なるが、父にも母にも早う離れまゐらせて、乳母の許に

成長しを、此の國の受領の下司縣の何某に迎へられて伴ひ下りしは、はやく三とせになりぬ。夫は任はてぬ。この春かりそめの病に死し給ひしかば、便なき身とはなり侍る。都の乳母も尼になりて、行方なき修行に出でしと聞けば、彼方も亦知らぬ國とはなりぬるをあはれみ給へ。きのふの雨のやどりの御惠みに、信ある御方にこそとおもふ物から、今より後の齡をもて、御宮仕し奉らばやと願ふを、汚なき物に捨て給はずば、此の一杯に千とせの契をはじめなん」といふ。豊雄もとよりかゝるをこそと亂心なる思ひ妻なれば、埒の鳥の飛び立つばかりには思へど、おのが世ならぬ身を願れば、親兄弟のゆるしなき事をと、かつ嬉しみ且恐れみて、頓に答ふべき詞なきを、眞女兒わびしがりて、「女の淺き心より嗚呼なる事をいひ出でて、歸るべき道なきこそ面なけれ。かう淺ましき身を海にも没らで、人の御心を煩はし奉るは、罪深きこと、今の詞は徒ならねども、只酔ごちの狂言におぼしとりて、この海にすて給へかし」といふ。

○鯨よる濱—上文のすさまじき荒磯を承けたる文、「漁村」の意。
○聞ゆべき—これも承るべき意に用ゐたる作者の例なり。

○身の徳なき—自身の貧乏。

○孔子さへ云々—源氏物語、胡蝶「戀の山には孔子のたふれまねびつべきけしきに云々」

○帯—腰に帯びたる太刀。

○寝がてに—寝難くしての意。思ひわびて安眠する能はぬをいふ。

○網子整ふる—網曳す

る人呼び集むる事、萬葉集、三「大宮の中まできこゆ網曳すと網子と」のふる海人の呼聲。

○唐言云々—漢籍を購入して貯ふるを誹りたる詞。

○祭を遼る—祭の行列に加はりて容子振りて徐行すること。「遼」は「遅」の古文。廣韻に「徐行貌」とあるに依れるならん。
○徒者—無用の者、二三男を俗に厄介者といふよりいふ。

豊雄「はじめより都人の貴なる御方とは見奉るこそ賢かりき。鯨よる濱に生ひ立ちし身の、かく嬉しき事いつかは聞ゆべき。即ての御答もせぬは、親兄に仕ふる身の、おのが物としては爪髪の外なし。何を祿に迎へまゐらせん便もなければ、身の徳なきをくゆるばかりなり。何事をもおぼし耐へ給はば、いかにも〜後見し奉らん、孔子さへ倒るゝ戀の山には、孝をも身をも忘れて」といへば、「いと嬉しき御心を聞きまゐらする上は、貧しくとも時々こゝに住ませ給へ。こゝに前の夫の二つなき實にめで給ふ帯あり。これ常に帯せ給へ」とてあたふるを見れば、金銀を飾りたる太刀の、あやしきまで鍛うたる古代の物なりける。物のはじめに辭なんは祥あしければとて、とりて納む。今夜はこゝに明させ給へ」とて、あながちに止むれど、「まだ赦なき旅寝は親の罪し給はん。明の夜よく偽りて詣でなん」とて出でぬ。其の夜も寝ねがてに明けゆく。

太郎は網子整ふるとて晨起き出でて、豊雄が閨房の戸の間を、ふと見入

れたるに、消え残りたる燈火の影に輝々しき太刀を枕に置いて臥したり。「あやし、何地より求めぬらん」とおぼつかなくて、戸を荒らかに明くる音に、目さめぬ。太郎があるを見て、「召し給ふか」といへば、「輝々しき物を枕に置きしは何ぞ。價貴き物は海人の家にふさはしからず。父の見給はばいかに罪し給はん」といふ。豊雄「財を費して買ひたるにもあらず。昨日人の得させしをこゝに置きしなり。」太郎「いかでさる寶をくるゝ人此の邊にあるべき。あなむづかしの唐言書きたる物を買ひたむるさへ世の費なりと思へど、父の黙りておはすれば、今までもいはざるなり。其の太刀帯びて大宮の祭を遼るやらん。いかに物に狂ふぞ」といふ聲の高きに、父聞きつけて、「徒者か何事をか仕出でつる。爰につれ來よ、太郎」と呼ぶに、「何地にて求めぬらん。軍將等の佩き給ふべき輝々しき物を買ひたるはよからぬ事、御目のあたり召して問ひあきらめ給へ。己は網子どももの怠るならん」と云ひ捨てて出でぬ。

○吾主—其方、御前(オマヘ)といふ程の意。

○わいためぬ—分別せぬ、辨別せぬの意。

○面俯—不面目。又恥入る。オモアセに同じ。

○責なまる—仔細に糺問する。俗に云ふ小言いはる。

母、豊雄を召して、「さる物何の料に買ひつるぞ。米も錢も太郎が物なり。吾主が物とて何をか持ちたる。日來は爲すまゝに置きつるを、かくて太郎に悪まれなば、天地の中に何國に住むらん。賢き事をも學びたる者が、などはほどの事わいためぬぞ」といふ。豊雄、「實に買ひたる物にあらず。さる由縁ありて人の得させしを、兄の見咎めてかく宣ふなり。」父「何の譽ありてさる寶をば人のくれたるぞ。更におぼつかなき事、只今所縁かたり出でよ」と罵る。豊雄、「此の事只今は面俯なり。人傳に申し出で侍らん」といへば、「親兄にはぬ事を誰にかいふぞ」と聲あらゝかなるを、太郎の嫁の刀自傍にありて、「此の事愚なりとも聞き侍らん。入らせ給へ」と宥むるに、つい立ちて入りぬ。

豊雄刀自にむかひて、「兄の見咎め給はずとも、密に姉君をかたらひてんと思ひ設けつるに、速く責なまるゝ事よ。かうくゝの人の女のはかなくてあるが、後見してよとて賜へるなり。己が世しらぬ身の、御赦さへな

○勘當—尊長の意旨に反し、絶縁して放逐せらるゝ事。昔時の私刑。

○いひとり—言葉にて述ぶる意。説明して了解を得ること。

○保正—町村或は郷の長。庄屋などの意。

○權現—熊野權現。權現は佛菩薩等の衆生濟度の爲に權(カリ)に此の世に出現せるもの、權化、化身に同じ。
○大宮司—大社の神主の長。
○助の君—國司の次官。助は介の借字ならん。

き事は重き勘當なるべければ、今更悔ゆるばかりなるを、姉君よく憐み給へ」といふ。刀自打笑みて、「男子のひとり寝し給ふが、兼ねていとほしかりつるに、いとよき事ぞ。愚なりともよくいひとり侍らん」とて、其の夜太郎に、「かうくゝの事なるは幸におぼさずや、父君の前をもよきにいひなし給へ」といふ。太郎眉を擧めて、「あやし、此の國の守の下司に縣の何某と云ふ人を聞かず。我が家保正なれば、さる人の亡なり給ひしを聞えぬ事あらじを、まづ太刀こゝにとりて來よ」といふに、刀自やがて携へ來るを、よくく見終りて長嘘をつぎつゝもいふは、「こゝに恐しき事あり。近來都の大臣殿の御願の事満しめ給ひて、權現に外くの寶を奉り給ふ。さるに此の神寶ども、御寶藏の中にて頓に失せしとて、大宮司より國の守に訴へ出で給ふ。守此の賊を探り捕へん爲に、助の君文室の廣之、大宮司の館に來て、今専らに此の事をはかり給ふよしを聞きぬ。此の太刀いかさまにも下司などの帶くべき物にあらず。猶父に見せ奉らん」とて、御前に

○一毛をも云々―少しも不正なることをせぬの語。孟子、盡心上「孟子曰、楊子取_レ爲_レ我、拔_二一毛_一而利_二天下_一不_レ爲_レ也。」

○公廳―國司の廳。廳は政治を執る所。
○國津罪―日本の國土に起りし罪。(高天原の天津罪の對稱)。

持ちいきて、「かうくの恐しき事のあるは如何計らひ申さん」といふ。父面を青くして、「こは浅ましき事の出できつるかな。日來は一毛をもぬかざるが、何の報にてかう良からぬ心や出できぬらん。他よりあらはれなば此の家を絶されん。祖の爲子孫の爲には不孝の子一人惜からじ。明は訴へ出でよ」といふ。

太郎、夜の明くるを待ちて大宮司の館に來り、しかくの由を申し出でて、此の太刀を見せ奉るに、大宮司驚きて「是なん大臣殿の獻り物なり」といふに、助聞き給ひて、「猶失せし物問ひあきらめん。召し捕れ」とて武士ら十人ばかり太郎を前にたててゆく。豊雄かゝる事をも知らず書見わたるを、武士ら押かゝりて捕ふ。「こは何の罪ぞ」といふをも聞き入れず、縛めぬ。父母太郎夫婦も今は「浅まし」と歎き惑ふばかりなり。公廳より召し給ふ、疾く歩め」とて、中に取りこめて館に追ひもてゆく。助、豊雄をにらまへて、彌神寶を盗みとりしは例なき國津罪なり。猶種々の財はいづ

○渠―支那の俗語。他人を指す稱。

○しのぶ―忍草の略。軒垣等に生ずる小草。

○老―をぢは尊稱。翁といふに同じ。叔父の義にあらず。
○米かつ男ら―「かつ」は搦「ツク」に同じ。
○跪る―「ウスダマル」は群り集ること。

ちに隠したる、明らかにまうせ」といふ。豊雄漸此の事を覺り、涙を流して、「おのれ更に盜をなさず。かうくの事にて縣の何某の女が、前の夫の帯びたるなりとて得させしなり。今にもかの女召して、己が罪なき事を覺らせ給へ。助いたく怒りて、「我が下司に縣の姓を名のるものある事なし。かく偽るは刑益々大なり。豊雄、「かく捕はれていつまで偽るべき。あはれ、かの女召して問はせ給へ。助、武士らに向ひて、「縣の眞女兒が家はいづくなるぞ。渠を押しして捕へ來れ」といふ。

武士ら畏りて又豊雄を押ししたてて、彼所に行きて見るに、嚴めしく造りなせし門の柱も朽ちくさり、軒の瓦も大方は碎けおちて、草しのぶ生さがり、人住むとは見えぬ。豊雄是を見て、只あきれにあきれられてゐたる。武士らかけ廻りて、ちかきとなりを召しあつむ。木伐老、米かつ男ら、恐れ惑ひて跪る。武士他らにむかひて、「此の家何者が住みしぞ。縣の何某が女のこゝにあるはまことか」といふに、鍛冶の翁はひ出でて、「さる人の名は

○かけても一前々より又兼てよりの意。案外なる状にいふ語。
 ○村主「スクリ」は姓（カバネ）の名。身狭村主など。

○水あせて一水が涸れて。

○古き帳一古き几帳ならん。されば「チャウ」と訓むべし。

かけても受け給はらず。此の家三年ばかり前までは、村主の何某といふ人の賑はしくて住み侍るが、筑紫に商物積みてくだりし、其の船行方なくなりて後は、家に残る人も散々になりぬるより、絶えて人の住む事なきを、此の男のきのふこゝに入りて、漸して歸りしを「奇し」とて、此の漆師の老が申されし」といふに、「さもあれ、よく見極めて殿に申さん」とて、門押ひらきて入る。家は外よりも荒れまさりけり。なほ奥の方に進みゆく。前裁廣く造りなしたり。池は水あせて水草も皆枯れ、野ら藪生かたぶきたる中に、大きな松の吹き倒れたるぞ物すさまじ。客殿の格子戸をひらけば、腥き風のさと吹き送りきたるに、恐れまどひて、人々後に退く。豊雄只聲を呑みて歎きゐる。武士の中に巨勢の熊禱なる者膽ふとき男にて、「人々我が後に従きて來れ」とて、板敷をあらゝかに踏み進みゆく。塵は一寸ばかり積りたり。鼠の糞ひりちらしたる中に、古き帳を立て、花のごとくなる女一人を座る。熊禱女にむかひて「國の守の召しつるぞ。

急ぎまわれ」といへど、答へもせであるを、近く進みて捕ふとせしに、忽ち地も裂くるばかりの霹靂鳴り響くに、許多の人逃ぐる間もなくそこに例る。然て見るに女はいづち行きけん見えずなりにけり。

此の床の上に輝々しき物あり。人々恐るゝゆきて見るに、狛錦、吳の綾、倭文、緋、楯、槍、鞆、鍬の類、此の失せつる神寶なりき。武士らこれをとりのたせて、怪しかりつる事どもを詳に訴ふ。助も、大宮司も妖怪のなせる事をさととりて、豊雄を責むことをゆるくす。されど當罪免れず。守の館にわたされて牢裏に繋がる。大宅の父子多くの物を賄して、罪を贖によりて百日がほどに赦さるゝ事を得たり。かくて世にたち接らんも面俯なり。姉の大和におはすを訪らひて、しばし彼所に住まん」といふ。げにかう憂め見つる後は、重き病をも得るものなり。ゆきて月ごろを過せ」とて、人を添へて出でたす。

二郎の姉が家は、石榴市といふ所に、田邊の金忠といふ商人なりける。

○狛錦一高麗國製の錦。狛は借字。
 ○吳の綾一支那製の綾織物。
 ○倭文一倭文布。布類の緯糸を青赤等の諸色に集めて、横柳條「ヨコジマ」を織りなしたる物、上代人の帯とす。
 ○緋一片糸にて織りたる絹。羽二重のごときもの。
 ○楯一持楯。戦闘の際左手に持ちて敵の矛を禦ぐもの。
 ○槍一矛。人を衝き倒す用の具、柄の真中を右手に持ちて闘ふ。
 ○鞆一矢を盛りて背後より右脇に下して負ふもの。「ヤナゲヒ」「エビラ」の類。
 ○當罪一主たる犯罪。
 ○石榴市一和國磯城郡三輪町。

○泊瀬の寺—大和國磯城郡初瀬町なる長谷寺。觀世音菩薩の靈像を安置す。三十三所第八番。
○あらた—靈驗の著明なる事。

○御明燈心—佛前に供する燈火。燈心は油火をとす時油に浸して心とするもの。

○薰物—沈香、白檀、麝香、龍腦などの薰香類。

○御有家—「アリカ」は有處の義なり。「家」は借字。

○わたり—あたりに同じ。場處。

○衣に縫目云々—妖怪を見分ける俗説。

○備—支那の俗字。汝の意。

豊雄が訪らひ來るを喜び、かつ月ごろの事どもをいとほしがりて、「いついつまでもこゝに住め」とて、念頃いいたばに勞りけり。年かはりて二月ふたつきになりぬ。此の石榴市といふは、泊瀬はつせの寺近き所なりき。佛の御中には泊瀬はつせなんあらたなる事を、唐土からうどまでも聞えたるとて、都より邊鄙みなかより詣づる人の、春はことに多かりけり。詣づる人は必ずこゝに宿れば、軒を並べて旅人をとゞめける。

田邊が家は御明燈心の類を商ひぬれば、所せく人の入り立ちける中に、都の人の忍びの詣まうでと見えて、いとよろしき女一人、鬘たきらみ一人、薰物求むとてこゝに立ちよる。此の鬘まうで豊雄を見て、「吾が君のこゝにいますは」といふに、驚きて見れば、かの眞女兒まんながまるやなり。「あな恐し」とて内に隠る。金忠夫婦「は何ぞ」といへば、「かの鬼こゝに逐ひ來る。あれに近寄り給ふな」と隠れ惑ふを、人々「そはいづくに」と立騒ぐ。眞女兒入り來りて、「人々な怪しみ給ひそ。吾夫の君な恐れ給ひそ。おのが心より罪に墮し奉

る事の悲しさに、御有家ありがもとめて、事の由縁ゆゑをもかたり、御心みこころ放せさせ奉らんとて御住家すまひ尋ねまゐらせしに、かひありて、あひ見奉ることの嬉しさよ。あるじの君よく聞きわけて給へ。我もし怪しき物ならば、此の人繁きわたりさへあるに、かうのどかなる晝をいかにせん。衣きぬに縫目あり、目にむかへば影あり。此の正ただしきことわりを思おもしわけて、御疑を解かせ給へ」。豊雄漸あや人ごちして、「備正なんぢしく人ならぬは我捕はれて、武士らとともにいきて見れば、きのふにも似ず淺ましく荒れ果てて、まことに鬼の住むべき宿に一人居るを、人々捕へんとすれば、忽ち青天霹靂はたがみを震うて、跡なくかき消えぬるをまのあたり見つるに、又逐ひ來て何をかなす。すみやかに去れ」といふ。眞女兒涙を流して、「まことさこそ思さんはことわりなれど、妾が言をもしばし聞かせ給へ。君公應おんやけに召され給ふと聞きしより、かねて憐をかけた隣となりの翁をかたらひ、頓とんに野らなる宿のさまをこしらへし。我を捕らんとす時に鳴神響かせしは、まるやが計較たはかりつるなり。其の後

○二本の杉のしるし
古今集、二十、旋頭歌
「はつせ川古川のべの
二本ある杉年をへて
またも相見む二本ある
杉」
○大悲の御徳―觀世音
菩薩の本願力。

○心をとりにて―機嫌を
取りて。
○葛城や―新古今集十
一、戀一「よそにのみ
見てややみなむ葛城や
高間の山の峯の白雲」

○初瀬云々―新古今集
十二、戀二「年を経ぬ祈
る契は初瀬山尾上の鐘
のよその夕暮」
○名細―吉野の枕詞。
○三船の山―大和國吉
野郡。萬葉集、三、弓削
皇子「瀧の上の三船の
山にゐる雲の常にあら
むとわが思はなくに」
○菜摘川―夏實川。大
和國吉野郡。萬葉集、
三、湯原王「吉野なるな
つみの河の川よどに鴨
ぞなくなる山かげにし
て」
○見るとも飽かぬ―萬
葉集、一、柿本人麿「見
れどあかぬ吉野の川の
常滑の絶ゆることなく
又かへり見ん」
○よき人の云々―萬葉
集、一、天武天皇御製、
「淑人のよしとよく見
てよしといひし芳野よ
く見よ良人よく見つ」
○氣のぼりて―逆上す
る。俗にいふ「ノボセ
テ」。

船求めて難波の方に遁れしかど、御消息知らまほしく、この御佛にたの
みを懸けつるに、二本の杉のしるしありて、嬉しき瀬に流れあふことは、
ひとへに大悲の御徳かふむりたてまつりしぞかし。種々の神寶は何とて
女の盗み出すべき。前の夫の良からぬ心にてこそあれ。よく思しわ
けて、思ふ心の露ばかりをもうけさせ給へ」とて、さめくと泣く。

豊雄或は疑ひ、或は憐みて、かさねていふべき詞もなし。金忠夫婦、眞
女兒がことわりの明らかなるに、此の女しきふるまひを見て、努疑ふ心も
なく、「豊雄の物語にては、世に恐しきことよと思ひしに、さる例あるべき
世にもあらずかし。はるくと尋ね惑ひ給ふ御心ねのいとほしきに、豊
雄肯はずとも、我々とどめまわらせん」とて、一間なる所に迎へける。こ
こに一日二日を過すまゝに、金忠夫婦が心をとりにて、ひたすら歎きたのみ
ける。其の志の篤きに愛でて、豊雄をすゝめてつひに婚儀をとりむすぶ。
豊雄も日々に心とけて、もとより容姿のよろしきを愛で悦び、千とせをか

けて契るには、葛城や高間の山に夜々ごとにたつ雲も、初瀬の寺の鐘の曉
に雨收りて、只あひあふ事の遅きをなん恨みける。

三月にもなりぬ。金忠、豊雄夫婦にむかひて、「都わたりには似るべく
もあらねど、さすがに紀路にはまさりぬらんかし。名細の吉野は春はい
とよき所なり。三船の山、菜摘川、常に見るとも飽かぬを、此の頃はいかに
おもしろからん。いざ給へ。出で立ちなん」といふ。眞女兒うち笑みて、「よ
き人のよしと見給ひし所は、都の人も見ぬを恨みに聞え侍るを、我が身稚
きより、人多き所、或は道の長手をあゆみては、必ず氣のぼりてくるしき
病あれば、從駕にえ出立ち侍らぬぞいと憂たけれ。山土産必ず待ちこひ奉
る」といふを、「そはあゆみなんこそ病も苦しからめ。車こそもたらね、
いかにも―土は踏ませ參らせじ。留り給はんは、豊雄のいかばかり心
もとなかりつらん」とて、夫婦勸めたるに、豊雄も「かうたのもしくの給ふ
を、道に倒るゝともいかでかは」と聞ゆるに、不慮ながら出でたちぬ。人々

花やぎて出でぬれど、眞女兒が麗なるには似るべうもあらずぞ見えける。何某の院は、かねて心よく聞えかはしければ、こゝに訪らふ。主の僧迎へて、「此の春は遅く詣で給ふことよ。花も半ば散り過ぎて、鶯の聲もやゝ流るめれど、猶よき方にしるべし侍らん」とて、夕食いと清くして食せける。明けゆく空いたら霞みたるを、晴れゆくまゝに見渡せば、此の院は高き所にて、こゝかしこ僧坊どもあらはに見おろさる。山の鳥どもも、そこはかとなく囀りあひて、木草の花、色々に咲きまじりたる。同じ山里ながら目さむるこゝちせらる。「初詣には瀧ある方こそ見所はおほかめれ」とて、彼方にしるべの人乞ひて出でたつ。谷を繞りて下りゆく。いにしへ行幸の宮ありし所は、石はしる瀧つせのむせび流るゝに、ちひさき鱗どもの水に逆ふなど、目もあやにおもしろし。檜破子打散して喰ひつゝあそぶ。岩がねづたひに来る人あり。髪は續麻を縮ねたるごとくなれど、手足いと健やかなる翁なり。此の瀧の下にあゆみ来る。人々を見て奇しげに

○流るめれど一啼きさかるを詩語にて流鶯といふに取る。
○見渡せば一源氏物語、若紫「少したちいでて見渡し給へば、高き所にてこゝかしこ僧坊どもあらはにみおろさる。」
○行幸の宮一齊明天皇行幸の宮。
○小さき鱗一鱗(イウ)は字書に鱗に同じとありて、我が邦の(ハエ)に當てたり、(アユ)に用ゐるは白鱗の意ならん。
○檜破子一檜物造りの破子、古代の入子重箱、今の辨當箱。
○續麻一長く引き出したる麻。

○まもりたる一見詰めたる。

○まつろへて一押靜めて。

○隠神一妖神。又邪神。

○牛と云々一龍經「與牛交則生鱗、與馬交則生鱗、與豕交則生象。」

まもりたるに、眞女兒もまろやも、此の人を背に見ぬふりなるを、翁渠二人をよくまもりて、「あやし、此の邪神、など人を惑はす。翁がまのあたりを、かくてもあるや」とつぶやくを聞きて、此の二人忽ち躍りたちて、瀧に飛び入ると見しが、水は大虚に湧き上りて見えぬほどに、雲、摺墨をうちこぼしたるごとく、雨篠を亂してふり来る。翁人々の慌忙惑ふを、まつろへて、人里にくだる。賤しき軒にかゝまりて、生けるこゝちもせぬを、翁豊雄に向ひ、「熟そこの面を見るに、此の隠神のために惱まされ給ふが、吾救はずば、つひに命をも失ひつべし、後よく慎み給へ」といふ。豊雄地に額づきて、此の事の始より語り出でて、「猶命得させ給へ」とて、恐れみ敬ひて願ふ。翁「さればこそ、此の邪神は年経たる蛇なり。かれが性は姪なる物にて、「牛と交みては鱗を生み、馬とあひては龍馬を生む」といへり。此の魅はせつるも、はたその秀麗に奸たると見えたり。かくまで執ねきをよく慎み給はずば、おそらくは命を失ひ給ふべし」といふに、人々い

○崇まへて—あがめての延音言。
○遠津神—遠く凡人の境を超脱したる神。

○美濃絹—美濃産の絹、上等の絹。高貴の人の袍の用。
○三疋—一疋は長さ五丈一尺。廣さ二尺二寸。(曲尺にて)
○筑紫綿—九州地方産の眞綿。萬葉集三、沙彌滿誓詠綿歌「不知火の筑紫の綿は身につけていまだ著れどもあたたかに見ゆ。」
○畜—「カレ」と詠むは畜生の意よりいふなるべし。
○禮言—感謝のことば。

よ／＼恐れ惑ひつゝ、翁を崇まへて「遠津神にこそ」と拜みあへり。翁打笑みて、「おのれは神にもあらず。大倭の神社に仕へまつる當麻の酒人といふ翁なり道の程見たててまゐらせん。いざ給へ」と出でたてば、人々後につきて歸り來る。明の日大倭の郷にゆきて、翁が恵みを謝し、且美濃絹三疋、筑紫綿二屯を遣り來り、「猶此の妖災の身褻し給へ」とつゝしみて願ふ。翁これを納めて、祝部らにわかちあたへ、自らは一疋一屯をもとめずして、豊雄にむかひ、「畜、爾が秀麗に奸けて、爾を纏ふ。爾又畜が假の化に魅はされて、大夫心なし。今より雄氣してよく心を静まりまさは、此らの邪神を逐はんには翁が力をもかり給はじ。ゆめ心を静まりませ」とて實やかに覺しぬ。豊雄夢のさめたる心地に、禮言盡きずして歸り來る。金忠にむかひて、「此の年月畜に魅はされしは、己が心正しからぬなりし。親兄の孝をもなさで、君が家の羈ならんは由縁なし。御恵いとかたじけなけれど、又も參りなん」とて、紀の國に歸りける。

○鰥—妻なき男。俗に男を(ヤムチ)女に(ヤモメ)といへど(ヤモメ)は男女に稱する古語。
○芝の里—大和國磯城郡三輪町の北。
○庄司—本は庄園の事を掌る者。莊司に同じ。
○もてりし—持ちてありしの約略言。
○大内—禁中。
○采女—天皇の御陪膳役の女官。諸國の郡司の女より任用す。
○因をなしける—結婚の約束をする。

○かの御わたり—彼の御所などにてはの意。

父母太郎夫婦、此の恐しかりつる事を聞いて、いよ／＼豊雄が過ならぬを憐み、かつは妖怪の執ねきを恐れける。「かくて鰥にてあらするにこそ、妻むかへさせん」とてはかりける。芝の里に芝の庄司なるものあり。女子一人もてりしを、大内の采女にまゐらせてありしが、此の度いとま申給はり、此の豊雄を聲がねにとて、媒氏をもて大宅が許へいひ納る。よき事なりと、即て因をなしける。かくて都へも迎の人を登せしかば、此采女富子なるものよろこびて歸り來る。年來の大宮仕へに馴れこしかば、萬の行儀よりして姿なども花やぎ勝りけり。豊雄こゝに迎へられて見るに、此の富子がかたचितよく、萬心に足ひぬるに、かの蛇が懸想せしことも、おろ／＼おもひ出づるなるべし。はじめの夜は事なければ書かず。二日の夜、よきほどの酔ごちにて、「年來の大内住に、邊鄙の人ははたうるさくまさん。かの御わたりにては、何の中將宰相の君などいふに添ひぶし給ふらん。今更にくゝこそおぼゆれ」など戯るゝに、富子即て面を

○かく云々―源氏物語
夕顔「おのがいとめで
たしと見奉るをば尋ね
もおもほさで、かくこ
となることなき人を
おはして、時めかし
給ふこそいとめざまし
くつらけれ。」

○わなきに云々―わ
なきはをのいきに同
じ、身の戦へて深く怖
るさま。
○むつかり給ふ―心に
叶はず腹立ちて泣く。

あけて「古き契を忘れ給ひて、かくことなる事なき人を時めかし給ふこ
そ、こなたよりまして悪くあれ」といふは、姿こそかはれ、正しく眞女兒が
聲なり。聞くにあさましう身の毛もたちて恐しく、唯あきれまどふを、女
打ゑみて「吾が君な怪しみ給ひそ。海に誓ひ、山に盟ひし事を速くわすれ
給ふとも、さるべき縁しのあれば、又もあひ見奉るものを、他し人のいふ
ことをまことしくおぼして、強に遠ざけ給はんには、恨み報いなん。紀路
の山々さばかり高くとも、君が血をもて峯より谷に灌ぎくださん。あた
ら御身をいたづらになしはて給ひそ」といふに、唯わなきにわなきか
れて、今やとらるべきこゝちに死に入りける。屏風のうしろより、「吾が
君いかにむつかり給ふ。かうめでたき御契なるは」とて、出づるはまるや
なり。見るに又膽を飛し、眼を閉ぢて、伏向に臥す。和めつ驚しつ、かは
る／＼物うちいへど、唯死に入りたるやうにて、夜明けぬ。
かくて閨房を免れ出でて、庄司にむかひ、「かう／＼の恐しき事あなり。

○鞍馬寺―天台宗、山
城國愛宕(オタギ)郡鞍
馬山の半腹にあり。
○向岳―眞向の山の
意。但し古語。
○蘭若―梵語、阿蘭若
の略、無諍聲又空靜處、
閑靜處、遠離處と譯す。
寺院のこと。

○雄黄―礦物、亦名石
黄。又云、鷄冠石。本草
に「治鼠瘻惡瘡及痔、
殺精物惡鬼邪毒百蟲
毒、能殺百毒、避百
邪云々」と。多く支那
より舶載せり。

これいかにして放けなん。よく計り給へ」といふも、背にや聞くらんと、
聲を小やかにしてかたる。庄司も妻も面を青くして、歎きまどひ、「こは
いかにすべき。こゝに都の鞍馬寺の僧の、年々熊野に詣づるが、昨日より
此の向岳の蘭若に宿りたり。いとも驗なる法師にて、凡疫病、妖災、蝗な
どをよく祈るよしにて、此の郷の人は貴みあへり。此の法師請へてん」と
て、あわたゞしく呼びつけるに、漸して來りぬ。しか／＼のよしを語れば、
此の法師鼻を高くして、「これらの蠱物らを捉らんは何の難き事にもあら
じ。必ず静まりおはせ」とやすげにいふに、人々心落ちぬ。法師まづ雄
黄を求めて、薬の水を調じ、小瓶に湛へて、かの閨房にむかふ。人々驚隠
るゝを、法師嘲わらひて、「老いたるも、童も必ずそこにおはせ。此の蛇唯
今捉りて見せ奉らん」とて、すゝみゆく。閨房の戸あくるを遅しと、かの
蛇頭をさし出して法師にむかふ。此の頭何ばかりの物ぞ。此の戸口に充
ち満ちて雪を積みたるよりも白く、輝々しく、眼は鏡のごとく、角は枯木

○絶え入りぬ—氣息絶え果つ。俗に氣絶する。○起すれど—起せどもとあるべき格。

○魂も云々—甚しく恐れたる状。

のごと、三尺餘りの口を開き、紅の舌を吐きて、唯一呑に飲むらん勢をなす。「あなや」と叫びて、手にすゑし小瓶をもそこに打すて、たつ足もなく、展轉こいまろびはひ倒れて、からうじてのがれ來り、人々にむかひて、「あな恐し。祟ります御神にてましますものを、など法師らが祈り奉らん。此の手足なくば、はた命失ひてん」といふく絶え入りぬ。人々扶け起すれど、すべて面も肌も黒く赤く染めなしたるがごとく、熱き事たきび焚火に手さすらんにひとし。毒氣あじきにあたりたると見えて、後は唯眼のみはたらきて、物いひたげなれど、聲さへなさでぞある。水灌ぎなどすれどつひに死にける。

これを見る人、いよ、魂も身に添はぬ思ひして泣き惑ふ。豊雄すこし心を收めて、「かく驗げんなる法師だも祈り得ず、執ねく我を纏あつふものから、天地のあひだにあらんかぎりは、探し得られなん。おのが命ひとつに人々を苦しむるは實ならず。今は人もかたらはじ、やすくおぼせ」とて、閨房ぬいにゆくを、庄司の人々こは物に狂ひ給ふかといへど、更に聞かず顔にかしこ

にゆく。戸を靜に明くれば、物の騒がしき音もなくて、此の二人ぞむかひゐたる。富子豊雄にむかひて、「君何の譬に我を捉へんとて人をかたらひ給ふ。此の後も仇をもて報い給はば、君が御身のみにあらじ。此の郷の人々をもすべて苦しきめ見せなん。ひたすら吾が貞操みさををうれしとおぼして、徒々あだくしき御心をなほほし」と、けさうしていふぞうたてかりき。

豊雄いふは、「世の諺にも聞ゆることあり。『人かならず虎を害する心なけれど、虎反りて人を傷る意ありとや。』爾人ならぬ心より我を纏うて、幾度かからきめを見するさへあるに、かりそめ言をだにも此の恐しき報いをなんいふは、いとむくつけなり。されど吾を慕ふ心ははた世人にもかはらざれば、こゝにありて人々の歎き給はんがいたはし。此の富子が命ひとつたすけよかし。然我をいづくにも連れゆけ」といへば、いと嬉しげに點頭うなづきをる。

又立ち出でて庄司に向ひ、「かう淺ましきものの添ひてあれば、こゝに

○人かならず—昔書郭文傳、有猛獸張口向レ文、文視其口中有横骨、乃以手探去之、温嶠問曰、猛獸害人人之所レ畏、而先生獨不レ畏耶、文曰、人無害レ獸之心、則獸亦不レ傷レ人、○かりそめ言—戯れ言。○いとむくつけなり—甚だ氣味わるし。

○道成寺—天台宗、紀伊國日高郡矢田村にある寺。安珍清姫の物語にて世に名高し。無量山千手院といふ。文武天皇の朝紀道成建立。因りて名とす。
 ○法海和尚—和泉國泉北郡横尾山施福寺の僧、行基の弟子。
 ○眠藏—僧家の寢所。
 ○今は古い朽ち云々—源氏物語、若紫、「老いかままりて室の外にもまかですと申したれば。」
 ○芥子の香—降魔の護摩の芥子焼の香氣。芥子の實を護摩木に合せて焚く故にいふ。
 ○袈裟—梵語、袈裟野の略語、褐色衣の義、木蘭色を本義とす。僧の服、後世は肩に懸くるやうに作る。

ありて人々を苦しめ奉らんは、いと心なきことなり。唯今暇給はらば、娘子の命も恙なくおはすべし」といふを、庄司更に肯けず。「我弓の本末をも知りながら、かくいひがひなからんは、大宅の人々のおほす心もはづかし。猶計較なん。小松原の道成寺は、法海和尚とて、貴き祈の師おはす。今は老いて室の外にも出でずと聞けど、我が爲には、いかにもく捨て給はじ」とて、馬にて急ぎ出でたちぬ。道遙なれば夜なかばかりに蘭若に到る。老和尚眠藏をわざわざ出でて、此の物がたりを聞いて、「そは淺ましくおぼすべし。今は古い朽ちて驗あるべくもおぼえ侍らねど、君が家の災を黙してやあらん。まづおはせ、法師も即て詣でなん」とて、芥子の香にしみたる袈裟とり出でて、庄司にあたへ、「畜を易くすかしよせて、これをもて頭に打敷け、力を出して押しふせ給へ。手弱くあらばおそらくは逃げ去らん。よく念じてよくなし給へ」と、實やかに教ふ。庄司よろこびつづ、馬を飛ばしてかへりぬ。

○つぶ／＼と云々—口の中にて小聲に咒文を唱へて祈ること。

○鐵鉢—鐵製の鉢、僧の食物を納るゝ器。鉢は梵語、受器の義。鉢は音譯。

豊雄を密に招きて、「此の事よくしてよ」とて袈裟をあたふ。豊雄これを懐に隠して、閨房にゆき、「庄司今はいとまたびぬ。いざたまへ立出でなん」と、いと嬉しげにてあるを、此の袈裟とり出でて、はやく打敷け、力を極めて押しふせぬれば、「あな苦し。爾何とてかく情なきぞ。しばしこゝ放せよかし」といへど、猶力にまかせて押しふせぬ。法海和尚の輿やがて入り来る。庄司の人々に扶けられて、こゝに至り給ひ、口のうちつぶつぶと念じ給ひつゝ、豊雄を退けて、かの袈裟とりて見給へば、富子は現なく臥したる上に、白き蛇の三尺あまりなる蟠りて、動きだもせずぞある。老和尚これを捉へて、徒弟が捧げたる鐵鉢に納れ給ふ。猶念じ給へば、屏風の背より尺ばかりの小蛇這ひ出づるを、是をも捉へて鉢に納れ給ひ、かの袈裟をもてよく封じ給ひ、そがまゝに輿に乗らせ給へば、人々掌をあはせ、涙を流して敬ひ奉る。蘭若に歸り給ひて、堂の前を深く掘らせて、鉢のまゝに埋めさせ、永劫があひだ世に出づることを戒しめ給ふ。今な

ほ蛇の塚ありとかや。庄司が女子はつひに病にそみてむなしくなりぬ。豊雄は命恙なしとなんかたりつたへける。

雨月物語 卷之五

青頭巾

むかし快庵禪師といふ大徳の聖ひじりおはしけり。總角わかきより教外の旨をあきらめ給ひて、常に身を雲水にまかせ給ふ。美濃の國の龍泰寺りやうたいじに一夏いちげを満たしめ、此の秋は奥羽の方に住むとて旅立ち給ふ。ゆき／＼て下野の國に入り給ふ。

富田と云ふ里にて、日入りはてぬれば、大きな家の賑はしげなるに立ちよりて、一宿ひやくをもとめ給ふに、田畑たはたよりかへる男等、黄昏たそがれにこの僧の立てるを見て、大きに怕れたるさまして、「山の鬼こそ來りたれ、人皆出でよ」と呼ひのゝしる。家の内にも騒ぎたち、女童かのわらはは泣きさけび展轉こいまろびて隈

○快庵禪師下野國下都賀郡富山村なる大寺の開山、名は妙慶、快庵は其の字。明應二年寂。禪師は法師といふに同じ。
○教外釋尊の教旨を離れその心を以て他の心に悟を開かしむること。禪學の本意。
○雲水托鉢僧。
○龍泰寺武儀郡、曹洞宗、應永年間、僧東徹開基。
○一夏げは夏安居げアゴの略語、四月十六日より七月十五日まで外出せずして佛道を修行すること。
○富田トング下都賀郡富山村の字。

○柺—音カイ、支那にては老人の杖、やまあふこは兩端に物を貫きて荷ふ棒、草刈柴刈などに用ゐる。
 ○檀越—梵語「ダンチ」
 ○底、施主の義、寺院の信徒。こゝは御主人といふ程の意。
 ○遍參—諸國の佛寺を遍く參詣する意。

○下等—下級人の意、私達といふ程の通語。
 ○菩提院—歸依する寺。菩提所といふに同じ。
 ○阿闍梨—梵語、阿闍梨耶の略語。僧の師たるもの、後に律師の稱號。「アザリ」は古語。
 ○猶子—兄弟親族又は他人の子を養子としたる者。家督相續の養子と別つ。
 ○歸依—佛語、佛德に歸順依憑（シタガヒタヨル）すること。

隈に竄る。あるじ山柺をとり走り出で、外の方を見るに、年紀五旬にちかき老僧の頭に紺染の巾を帔き、身に墨衣の破れたるを穿て、裹みたる物を背におひたるが、杖をもてさしまねき、檀越なに事にてかばかり備へ給ふや。遍參の僧今夜ばかりの宿をかり奉らんとて、こゝに人を待ちしに、おもひきや、かく異しめられんとは。瘦法師の強盜となすべきにもあらぬを、なあやしみ給ひそ」といふ。莊主柺を捨て、手を拍つて笑ひ、「渠等が愚なる眼より、客僧を驚しまゐらせぬ。一宿を供養して罪を贖ひたてまつらん」と、禮まひて奥の方に迎へ、こゝろよく食をすゝめて饗しける。莊主かたりていふ、「さきに下等が御僧を見て、『鬼來りし』とおそれしも、さるいはれの侍るなり。こゝに希有の物がたりの侍る。妖言ながら人にもつたへ給へかし。此の里の上の山に、一字の蘭若の侍る。故は小山氏の菩提院にて、代々大徳の住み給ふなり。今の阿闍梨は何某殿の猶子にて、ことに篤學修行の聞えめでたく、此の國の人は香燭をはこびて歸依し

○うらなく—遠慮なく。打明けて親しく。
 ○水丁—灌頂。佛道にて初めて受戒の時、若しくは修道上昇の時、香水を頂上に灌ぐ式。
 ○年來の事—多年佛道修行の事。

○國府—一國の廳のある所。
 ○典藥—公廳附屬の醫師。
 ○おもたゞしき—名譽あるもの（面俯の反）。
 ○險—目の下頬の上の意を本とす。轉じて俗に顔面の意。
 ○院主—住持の僧。

たてまつる。我が莊にもしばし詣で給うていともうらなく仕へしが、去年の春にてありける、越の國へ水丁の戒師にむかへられ給ひて、百日あまり逗まり給ふが、他國より十二三歳なる童兒を具して歸り給ひ、起臥の助とせらる。かの童兒が容の秀麗なるを深く愛させ給うて、年來の事どもも、いつとなく怠りがちに見え給ふ。さるに茲年四月の頃、かの童兒かりそめの病に臥しけるが、日を経ておもくなやみけるを、痛み悲ませ給うて、國府の典藥のおもたゞしきをまで迎へ給へども、其の驗もなく、終に空しくなりぬ。懷の壁を奪はれ、挿頭の花を嵐に誘はれしおもひ、泣くに涙なく、叫ぶに聲なく、あまりに歎かせ給ふまゝに、火に焼き土に葬ることをもせで、臉に臉をもたせ、手に手をとりくみて、日を経給ふが、終に心神みだれ、生きてありし日に違はず、戯れつゝも其の肉の腐り爛るゝを吝みて、肉を吸ひ骨を嘗めて、はた嗅ひつくしぬ。寺中の人々『院主こそ鬼になり給ひつれ』と、連忙しく逃げさりぬる後は、夜々里に下りて人を驚



殺し、或は墓を發きて、腥々しき屍を喫ふありさま、實に鬼といふものは、昔物語には聞きもしつれど、現にかくなり給ふを見て侍れ。されど如何してこれを征し得ん。只戸ごとに暮をかぎりて堅く關してあれば、近會は國中へも聞えて、人の往來さへなくなり侍るなり。さるゆゑのありてこそ、客僧をも過りつるなり」とかたる。

快庵この物語を聞かせ給うて、「世には不思議の事もあるものかな。凡そ人とうまれて佛菩薩の教の廣大なるをも知らず。愚なるまゝ、慳しきまゝに世を終るものは、其の愛慾邪念の業障に攪かれて、或は故の形を現はして恚を報い、或は鬼となり蟒となりて祟りをなすためし、往古より今にいたるまで、算ふるに盡しがたし。又人活ながらにして鬼に化するもあり。楚王の宮人は蛇となり、王舎が母は夜叉となり、吳生が妻は蛾となす。又いにしへ、ある僧卑しき家に旅寝せしに、其の夜雨風はげしく燈さへなきわびしさに、いも寝られぬを、夜ふけて羊の鳴く聲の聞えけるが、

○佛菩薩—佛は梵語佛陀の略語、覺者と譯す。菩薩は梵語、菩提薩埵の略語。正覺を得べき有情。

○業障—業は梵語、羯摩の譯稱。凡人の所作。障は三障(煩惱、業、報)愚者が惡業をなして正道を障蔽する事。

○楚王云々—述異記、「楚莊王時、宮人一旦化為野蛾」とあるの誤り。

○禪杖—坐禪の時睡眠を警むる具。一名警策。昔は竹葦の類を用ひ、今は木にて作る。

○隋の煬帝—隋の開皇文帝の子、第二世の主。○麻叔謀—事物紀原卷十「會稽錄云、會稽有鬼、號麻胡、好食小兒腦、遂以恐小兒。」○夷心—野蠻人の心。

頃刻して僧のねぶりをうかゞひて、しきりに嗅ぐものあり。僧異しと見て、枕におきたる禪杖をもつてつよく撃ちければ、大きに叫んでそこに倒る。この音に主の姫なるもの、燈を照し來るに見れば、若き女の打倒れてぞありける。姫泣々命を乞ふ。いかゞせん。捨てて其の家を出でしが、其の後又便につきて、其の里を過ぎしに、田中に、人多く集ひてものを見る。僧も立よりて何なるとぞ尋ねしに、里人いふ、「鬼に化したる女を捉へて、今土に瘞むなり」とかたりしとなり。されど、これらは皆女子にて男たも化するなり。又男子にも隋の煬帝の臣家に、麻叔謀といふもの、小兒の肉を嗜好みて、潜に民の小兒を偷みこれを蒸して喫ひしもあなれど、是は淺ましき夷心にて主の語り給ふとは異なり。さるにても、かの僧の鬼になりつるこそ、過去の因縁にてぞあらめ。そも平生の行徳のかしこかりしは、佛につかふる事に志誠を盡せしなれば、其の童兒をやしなはざらま

○無明の業火―無明は一切の煩惱、業火は悪業の爲に自身を苦しむる喩。

○老衲―衲は今の刺子のごときもの。袈裟に作る。この袈裟を著たる老僧といふ意より僧の通語とす。

○護摩―梵語、梵燒又火祭の義。佛法にて火を燒きて佛に祈り一切悪事の根本を燒滅すること。

○方丈―寺の長老の居る室。

○廊房―廊は長廊下、房は僧の居る所。

○錫―錫杖の略語。僧侶修験者等の携ふる錫ある杖。

しかば、あはれよき法師なるべきものを。一たび愛慾の迷路に入りて、無明の業火の熾なるより、鬼と化したるも、ひとへに直くたくまじき性のなす所なるぞかし。「心放せば妖魔となり、收むる則は佛果を得る」とは、此の法師がためしなりける。老衲もしこの鬼を教化して本源の心にかへらしめなば、こよひの饗の報ともなりなんかし」と、たふときこゝろざしを發し給ふ。莊主頭を疊に摺りて、「御僧この事をなし給はば、此の國の人の淨土に生まれ出でたるがごとし」と、涙を流してよろこびけり。山里のやどり、貝鐘も聞えず。二十日あまりの月も出で、古戸の間に洩りたるに、夜の深さを知りて、「いざ休ませ給へ」とて、おのれも臥戸に入りぬ。

山院人とゞまらねば、樓門は荆棘おひかゝり、經閣もむなしく苔蒸しぬ。蜘蛛網を結びて諸佛を繋ぎ、燕子の糞護摩の床をうづみ、方丈廊房すべて物すさまじく荒れはてぬ。日の影中に傾くころ、快庵禪師寺に入りて錫を鳴し給ひ、「遍參の僧今夜ばかりの宿をかし給へ」と、あまたたびよべ

○一粒の齋糧―些少の食物の意。齋は僧家の正食。
○はかりごと―用意。

○宵闇―陰曆二十日頃の夕暮。

ども、さらに應なし。眠藏より瘦せ槁れたる僧の、漸々とあゆみ出で、咳たる聲して、「御僧は何地へ通るとてこゝに来るや。此寺はさる由縁ありて、かく荒れはて、人も住まぬ野らとなりしかば、一粒の齋糧もなく、一宿をかすべきはかりごともなし。はやく里に出でよ」といふ。禪師いふ、「これは美濃の國を出でて、みちの奥へいぬる旅なるが、この麓の里を過ぐるに、山の靈、水の流のおもしろさに、思はずもこゝに詣づ。日もなゝめなれば、さとにくだらんもはるけし。ひたすら一宿をかけたまへ。」あるじの僧いふ、「かく野らなるところは、よからぬこともあなり、強ひて逗めがたし。強ひてゆけともあらず。僧のこゝろにまかせよ」とて、復び物をもいはず。こなたよりも一言を問はで、あるじのかたはらに座をしむる。看る／＼日は入り果てて、宵闇の夜のいと暗きに、燈を點げざれば、まのあたりさへわかぬに、唯澗水の音ぞちかくきこゆ。あるじの僧も又眠藏に入りて音なし。

○子ひとつ一夜の零時。

○禿頭―快庵を罵る語。禿頭の坊主の意。

夜更けて月の夜にあらたまりぬ。影玲瓏としていたらぬ隈もなし。子ひとつとも思ふ頃、あるじの僧眠藏を出でて、あわたゞしく物を討つぬ。たづね得ずして大に叫び、「禿頭いづくに隠れけん。こゝもとにこそありつれ」と、禪師が前を幾たび走り過ぐれども、更に禪師を見る事なし。堂の方に駈りゆくかと思れば、庭をめぐりて躍りくるひ、遂に疲れふして起き来らず。夜明けて朝日のさし出でぬれば、酒の醒めたるごとくにして、禪師がもとの所に在すを見て、唯あきれたる形に、ものさへいはで柱にもたれ、長嘘をつきて黙しむたりける。禪師ちかく進みよりて、「院主何をか歎き給ふ。もし飢ゑ給ふとならば、野僧が肉に腹をみたしめ給へ。」あるじの僧いふ、「師は夜もすがら、そこに居させたまふや。」禪師いふ、「こゝにありてねぶる事なし。」あるじの僧いふ、「我あさましくも人の肉を好めども、いまだ佛身の肉味をしらず。師はまことに佛なり。鬼畜のくらき眼をもて、活佛の來迎を見んとするとも見るべからぬ理なるかな。あなた

○佛身の肉味―解脱したる聖僧の肉。
○鬼畜―餓鬼畜生の略語。

ふと」とて頭を低れて黙しける。

禪師いふ、「里人のかたるを聞けば、汝一旦の愛慾に心神みだれしより、忽ち鬼畜に墮罪したるは、あさましとも、哀しとも、ためしさへ希なる惡因なり。夜々里に出でて人を害するゆゑに、ちかき里人は安き心もなし。我これを聞きて捨つるに忍びず、わざ／＼來りて教化し、本源の心に返らしめんとするを、汝我がをしへを聞くや否や。」あるじの僧いふ、「師はまことに佛なり。かく淺ましき惡業を頓に忘るべきことわりを教へ給へ。」禪師いふ、「汝聞くとならばこゝに來れ」とて、簀子の前のたひらなる石の上に座せしめて、みづから帙給ふ紺染の巾を脱ぎて、僧が頭に帙かしめ、證道の歌の二句を授け給ふ。

「江月照松風吹。 永夜清宵何所爲。」

汝こゝを去らずして、徐に此の句の意をもとむべし。意解けぬる則はおのづから本來の佛心に會ふなるは」と、念頃に教へて山を下り給ふ。この

○證道の歌―證道歌、一卷。唐の永嘉の眞覺或又玄覺の著と傳ふ。禪の第一義を歌體にて説き表はせるもの、禪宗にては頌る之を敬重し、日夕之を誦誦し、又初門に對して之を提唱す。
○江月云々―大自然の風物について自利利他の妙用を述べたるもの。

後は里人おもき災をのがれしといへども、猶僧が生死を知らざれば、疑ひ恐れて、人々山にのぼる事をいましめけり。

一とせ速くたちて、むかふ年の冬十月の初旬、快庵大徳奥路のかへるさに、又こゝを過ぎ給ふが、かの一宿のあるしが莊に立よりて、僧が消息を尋ね給ふ。莊主よろこびて迎へて、「御僧の大徳によりて、鬼ふたゝび山をくだらねば、人皆浄土に生まれ出でたるがごとし。されど山にゆく事はおそろしがりて、一人としてのぼるものなし。さるから消息を知り侍らねど、など今まで生きては侍らじ。今夜の御泊りにかの菩提をとぶらひたまへ。誰も隨縁したてまつらん」といふ。禪師いふ、「他善果に基きて遷化せしとならば、道に先達の師ともいふべし。又生きてあるときは、わがために一個の徒弟なり、いづれ消息を見ずばあらじ」とて、復び山のぼりたまふに、いかさまにも、人のゆきさ絶えたと見えて、去年ふみわけし道ぞとも思はれず。寺に入りて見れば、荻尾花のたけ、人よりも高

○遷化―教化を他土に遷すの義より、菩薩法師等の死をいふ敬語。○先達の師―悟道に進する大士にいふ語。○後に山伏などの敬語として用ゐたり。

○三の徑―門と井戸と厠とへ通ずる路を云ふ、源氏物語、蓬生、いづれかこのさびしき宿にもかならずわけたる跡ある三つの徑とたどる。菅陶淵明の歸去來辭、三徑就荒、松菊猶存。三輔決錄、蔣詡舍中竹下開三徑、唯故人求仲羊仲從之遊。○庫裏―寺院の雜事を扱ふ所。

○作麼生―禪家の用語。何事をなすといふに同じ。甚麼に同じ。宋代の俗語。

○初祖の肉云々―高僧の現存すといふ意。初祖は達磨大師。

く生ひ茂り、露は時雨めきて降りこぼれたるに、三の徑さへわからざる中に、堂閣の戸右左に頽れ、方丈庫裏に縁りたる廊も、朽目に雨をふくみて苦むしぬ。さてかの僧を座らしめたる簀子のほとりを求むるに、影のやうなる人の僧俗ともわかぬまでに、髭髪もみだれしに、葎むすぼふれ、尾花おしなみたるなかに、蚊の鳴くばかりのほそき音して、物とも聞えぬやうに、まれく唱ふるを聞けば、

「江月照松風吹。永夜清宵何所爲。」

禪師見給ひて、やがて禪杖を拿りなほし、「作麼生何の所爲ぞ」と一喝して他が頭を撃ち給へば、忽ち氷の朝日にあふがごとく消えうせて、かの青頭巾と骨のみぞ草葉にとままりける。現にも久しき念のこゝに消じつきたるにやあらん。たふときことわりあるにこそ。されば、禪師の大徳、雲の裏、海の外にも聞えて、「初祖の肉いまが乾かず」とぞ稱歎しけるとなり。かくて里人あつまりて、寺内を清め、修理をもよほし、禪師を推したふと

○密宗—眞言宗の一稱。
○曹洞—曹洞宗、禪宗五家の一。
○御寺—下野國下都賀郡富山村字西山田太平山の南に現存、和漢三才圖會「野州山田村大寺、關東總祿三箇寺之内、禪宗、寺領百石。」

みて、こゝに住ましめけるより、故の密宗をあらためて、曹洞の靈場をひらき給ふ。今なほ御寺は、たふとく榮えてありけるとなり。

貧福論

○岡左内—續近世時人傳二に岡野左内の逸事を載す。參看。
○關の東—東國の汎稱。
○武扁—武家。扁は邊の借字。
○茶味翫香—茶の湯の方式、開香の道。
○廳上—室の上段。
○家に久しき男—續時人傳には馬屋の中間とあり。
○崑山云々—支那の崑崙山から出る名玉。晋書御洗列傳「對曰、臣第一賢良、對策、爲天下第一、猶桂林之一枝、崑山之片玉。」
○棠谿墨陽—棠谿は支那古代利劍を出す地名。墨陽は利劍の名。
○天が下云々—魯褒錢神論「諺曰、有錢可使人鬼、而況于人乎。」

陸奥の國蒲生氏郷の家に、岡左内といふ武士あり。祿おもく、譽たかく、丈夫の名を關の東に震ふ。此の士いと偏固なる事あり。富貴をねがふ心常の武扁にひとしからず。儉約を宗として家の掟をせしほどに、年を疊みて富み昌えけり。かつ軍を訓練す間には、茶味翫香を娛しませず。廳上なる所に許多の金を布き班べて心を和さむる事、世の人の月花に遊ぶに勝れり。人みな左内が行跡をあやしみて、吝嗇野情の人なりとて、爪はじきをして惡みけり。家に久しき男に、黄金一枚かくし持ちたるものあるを聞きつけて、近く召していふ、「崑山の壁もみだれたる世には瓦礫にひとし、かゝる世にうまれて、弓矢とらん軀には、棠谿墨陽の劍、さてはありたきもの財寶なり。されど良劍なりとて、千人の敵には逆ふべからず。金の徳は天が下の人をも従へつべし。武士たるもの漫にあつかふべから

○長喙—貪慾人の相と云ふ。吳越春秋、越王爲人、長頸鳥喙、鷹視狼步、可_レ以_レ共患難、而不可_レ共處_レ樂。

○容色—裝束の色目などより出でて、人の容子振の意とす。
○魑魅—魑は山神、魅は妖怪。
○精靈—佛家に云ふ死者の靈。

ず。かならず貯へ藏むべきなり。儂賤しき身の分限に過ぎたる財を得たるは嗚呼の事なり。賞なくばあらじ」とて、十兩の金を給ひ、刀をも赦して召しつかひけり。人これを傳へ聞きて、「左内が金をあつむるは、長喙にして飽かざる類にはあらず。只當世の一奇士なり」とぞいひはやしける。其の夜左内が枕上に、人の來たる音しけるに、目さめて見れば、燈臺の下に、ちひさげなる翁の笑をふくみて座れり。左内枕をあげて、「こゝに來るは誰ぞ。我に糧からんとならば、力量の男どもこそ參りつらめ。儂がやうの老たる形して、ねぶりを魔ひつるは、狐狸などのたはぶるゝにや。何のおぼえたる術かある。秋の夜の目さましに、そと見せよ」とて、すこしも騒ぎたる容色なし。翁いふ、「かく參りたるは魑魅にあらず。人にあらず。君がかしづき給ふ黄金の精靈なり。年來篤くもてなし給ふうれしさに、夜話せんとて、推してまわりたるなり。君が今日家の子を賞し給ふに感でて、翁が思ふこゝろばへをもかたり和さまんとて、假に化を見はし侍

○富みて驕らぬ云々—論語學而篇、子貢曰、貧而無_レ詔、富而無_レ驕、何如_レ子曰可也、未_レ若_レ貧而樂、富而好_レ禮者也。
○石崇—晉書、南皮人、字季倫、累官荊州刺史、使_レ客航_レ海致_レ富、置_レ金谷別墅、在_レ河陽、後遷_レ衛尉、與_レ王愷羊琇之徒、以_レ奢靡_レ相尙。
○王元寶—通俗編「唐富有_レ王元寶」。
○呂望—史記、貨殖傳、「太公望封_レ於營丘、地潟鹵、人民寡、於是大公勸_レ其女功、極_レ技巧、通_レ魚鹽、則人物歸_レ之、糴_レ至而輻湊」。
○管仲云々—管仲、范蠡、子貢、白圭、皆貨殖傳に詳なり。
○貨殖傳—史記、貨殖傳。
○恒の産云々—孟子梁惠上、無_レ恒産_レ而有_レ恒心_レ者、惟_レ士爲_レ能_レ若_レ民、則無_レ恒産_レ因無_レ恒心_レ。穀類「タナツモノ」は五穀類の美稱。

るが、十にひとつも益なき閑談ながら、いはざるは腹みつれば、わざとにまうでて眠をさまたげ侍る。

さても富みて驕らぬは大聖の道なり。さるを世の惡ことばに、「富めるものはかならず慳し、富めるものはおほく愚なり」といふは、晉の石崇、唐の王元寶がごとき豺狼蛇蝎の徒のみをいへるなりけり。往古に富める人は、天の時をはかり、地の利を察らめて、おのづからなる富貴を得るなり。呂望、齊に封ぜられて、民に産業を教ふれば、海方の人利に走りてこゝに來朝ふ。管仲、九たび諸侯をあはせて、身は陪臣ながら、富貴は列國の君に勝れり。范蠡、子貢、白圭が徒、財を鬻ぎ利を逐うて、巨萬の金を疊みなす。これらの人をつらねて、貨殖傳を書し侍るを、其のいふ所陋とて、後の博士筆を競うて誇るは、ふかく穎らざる人の語なり。恒の産なきは恒の心なし。百姓は勤めて穀を出し、工匠等修めてこれを助け、商賈務めて此を通はし、おのれ／＼が産を治め家を富まして祖を祭り、子孫を謀

○千金の子云々—史記越世家、「千金之子不_レ死_二於_一市。」
 ○王者云々—史記貨殖傳、「千金之家、比_二一都之君_一、巨萬者與_二王者_一同_レ樂。」
 ○淵深云々—史記貨殖傳、「淵深而魚生_レ之、山深而歌往_レ之、人富而仁義附焉。」
 ○貧うして云々—論語學而篇の語。前に出づ。

○七のたから—七寶、無量壽經に、金、銀、瑠璃、頗梨、珊瑚、瑪瑙、磲磔を擧げたり。諸經各其の説を異にす。

る外、人たるもの何をか爲さん。諺にもいへり、『千金の子は市に死せず。』富貴の人は、王者と樂みを同じうす』となん。まことに淵深ければ、魚よくあそび、山長ければ、獸よくそだつは、天の隨なることわりなり。只『貧うして樂む』てふことはありて、字を學び韻を探る人の惑をとる端となりて、弓矢とるますら雄も、富貴は國の基なるをわすれ、あやしき計策をのみ調練て、ものを戕り人を傷ひ、おのが徳をうしなひて、子孫を絶つは、財を薄んじて名をおもしとする惑なり。願に名とたからと、もとむるに、心ふたつある事なし。文字てふものに繋がれて、金の徳を薄んじては、みづから清潔と唱へ、鋤を揮うて棄てたる人を賢しといふ。さる人はかしくとも、さる事は賢からじ。金は七のたからの最なり。土に瘞れば靈泉を湛へ不淨を除き妙なる聲を藏せり。かく清よきものの、いかなれば、愚味貪酷の人にのみ集ふべきやうなし。今夜此の憤りを吐きて、年來の心やりをなし侍ることの嬉しさよ』といふ。

○紙魚—蠹魚(シミ)の別名。蠹の名、衣服書籍の屬を蝕するより學者を罵る語とす。

○孝廉—孝は親に善く事ふる事。廉は正直の行爲。

左内興じて席をすゝみ、「さてしもかたらせ給ふに富貴の道のかたき事、己がつねにおもふ所露たがはず侍る。こゝに愚なる問事の侍るが、ねがふは詳に示させ給へ。今ことわらせ給ふは専ら金の徳を薄しめ、富貴の大業なる事をしらざるを罪とし給ふなるが、この紙魚がいふ所もゆゑなきにあらず。今の世に富めるものは、十が八ツまではおほかた貪酷残忍の人多し。おのれは俸祿に飽き足りながら、兄弟一屬をはじめ祖より久しくつかふるものの貧しきをすくふ事をもせず。隣に栖みつる人のいきほひをうしなひ、他の援けさへなく、世にくだりしもの田畑をも、價を賤くして、あながちに己がものとし、今おのれは、村長とうやまはれども、むかしかりたる人の物をかへさず。禮ある人の席を譲れば、其の人を奴のごとく見おとし、たま／＼舊き友の寒暑を訪らひ來れば、物からんためかと疑ひて、宿にあらぬよしを應へさせつる類、あまた見來りぬ。又君に忠なるかぎりをつくし、父母に孝廉の聞えあり、貴きをたふとみ、賤



○三冬—陰曆の十月、十一月、十二月の三ヶ月間。
 ○三伏—極暑の間。俗の土用の中。金氣の伏藏する日、初伏、中伏、末伏。

○蹠々—蹠は蹠に同じ。蹠々は足を高く擧げて走る貌より「アリサマ」と當てたるならん。
 ○顔子云々—顔子は孔子の高弟顔回。論語雍也篇「子曰、賢哉回也、一簞食一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂、賢哉回也。」

しきを扶くる意ありながら、三冬のさむきにも一裘に起臥し、三伏のあつきにも一葛を濯ぐいとまなく、年ゆたかなれども朝に晡に、一椀の粥にはらを見たしめ、さる人は、もとより朋友の訪らふ事もなく、かへりて兄弟一屬にも通を塞れ、交を絶たれて、其の怨を訴ふる方さへなく、汲々として一生を終るもあり。さらば、その人は作業にうときゆゑかと思れば、夙に起き、おそくふして、性力を凝し、西に東に走りまどふ蹠々、さらに閑なく、その人愚にもあらで、才を用ふるに的は稀なり。これらは顔子が一瓢の味ひをもしらず。かく果つるを佛家には前業をもて説き示し、儒門には天命と教ふ。もし未來あるときは、現世の陰徳善功も來世のたのみありとして、人しばらくこゝにいさどほりを休めん。されば富貴の道は佛家にのみの理をつくして、儒門の教は荒唐なりとやせん。靈も佛の教にこそ憑らせ給ふらめ。否ならば詳にのべさせ給へ。」

翁いふ、「君が問ひ給ふは往古より論じ盡さざる理なり。かの佛の御法

○脩否—脩は修の俗字。脩に長の意あれば行爲の長短といふ意より「ヨキアシキ」と訓めるなるべし。
 ○あたまし云々—因果應報の理。

○尼媽—尼は梵語母の義。俗に女を罵る語。媽は支那にて僕婦を稱する語。我が邦の俗に賤人の妻を呼ぶ稱。
 ○宗廟—帝王諸侯祖先の靈屋、轉じて祖先の靈。中庸「舜、其大孝也與、德爲聖人、尊爲天子、富有四海之內、宗廟饗之、子孫保之。」

を聞けば、富と貧しきは、前生の脩否によるとや。此はあたましなる教ぞかし。前生にありしとき、おのれをよく脩め、慈悲の心専らに、他人にもなさけふかく接りし人の、その善報によりて、今此の生に富貴の家に生れ來たり、おのがたからをたのみて、他人にいさほひをふるひ、あらぬ狂言をいひのしり、あさましき夷ごころをも見するは、前生の善心かくまでなりくだる事は、いかなる報いのなせるにや。佛菩薩は名聞利要を嫌み給ふところ聞きつる物を、など貧福の事にかゝづらひ給ふべき。さるを富貴は前生のおこなひの善かりし所、貧賤は悪しかりし報いとのみ説きなすは、尼媽を蕩かすなま佛法ぞかし。貧福をいはず、ひたすら善を積まん人は、その身に來らずとも、子孫は必ず幸福を得べし。『宗廟これを饗けて子孫これを保つ』とは、此の理の細妙なり、おのれ善をなして、おのれその報いの來るを待つは直きこゝろにもあらずかし。又惡業慳貪の人の、富み昌ゆるのみかは。壽めでたく、その終をよくするは、我に異なること

○非情の物―意識なきもの。金錢の化身なればいふ。

○三つのもの―天、神、佛。

○善根―諸善を増長せしむる根本。佛教の語。

わりあり。霎時間かせ給へ。我今假に化をあらはして語るといへども、神にあらず、佛にあらず。もと非情の物なれば人と異なる慮あり。いにしへに富める人は、天の時に合ひ地の利をあきらめて、産を治めて富貴となる。こは天の隨なる計策なれば、たからのこゝにあつまるも、天のまに／＼なることわりなり。又卑吝貪酷の人は、金銀を見ては父母のごとく親しみ、食ふべきをも喫はず、穿べき物をも著す。得がたきいのちをさへ惜しと思はで、起きて思ひ臥して忘れねば、こゝにあつまること、まのあたりなることわりなり。我もと神にあらず、佛にあらず、只これ非情なり。非情のものとして人の善惡を糺し、それにしたがふべきいはれなし。善を撫で、惡を罪するは、天なり。罪なり。佛なり。三つのものは道なり。我がともがらの及ぶべきにあらず。只かれらがつかへ傳く事の、うやうやしきにあつまるべし。これ金に靈あれども、人とこゝろの異なる所なり。又富みて善根を種うるにも、故なきに惠みをほどこし、その人

○天蒼氏―造化の神の意ならん。
○いのちのうち―一生涯。

○心のうち―前大納言公任卿集「さくなみや滋賀の浦波いかばかり心の内のすゞしかりけん。」

○たのみとする主―史記、貨殖傳「富無三經業一則貨無三常主。」

○泰山―支那五嶽の一、東嶽。山東省泰安縣の北にある大山。

の不義をも察らめず、借し與へたらん人は、善根なりとも財はつひに散ずべし。これらは金の用を知りて、金の徳を知らず。かろくあつかふが故なり。又身の行もよろしく、人にも志誠ありながら、世に窮られてくるしむ人は、天蒼氏の賜すくなく生れ出でたるなれば、精神を勞しても、いのちのうちに富貴を得る事なし。さればこそ、いにしへの賢き人は、もとめて益あればもとめ、益なくばもとめず。己がこのむまに／＼、世を山林にのがれて、しづかに一生を終る。心のうちいかばかり清しからんとはうらやみぬるぞ。かくいへど、富貴の道は術にして、巧なるものはよく湊め、不肖のものは瓦の解くるより易し。且我がともがらは人の生産につきめぐりて、たのみとする主もさだまらず。こゝにあつまるかとすれば、其の主のおこなひによりて、たちまちにかしこに走る。水のひくき方にかたぶくがごとし。夜に晝にゆき／＼て休むときなし。たゞ閑人の生産もなくてあらば、泰山もやがて喫ひ盡すべし。江海もつひに飲みほすべし。い

くたびもいふ、不徳の人のたからを積むは、これとあらそふことわり、君子は論ずる事なかれ。時を得たらん人の儉約を守り、つひえを省きてよく務めんには、おのづから家富み人服すべし。我は佛家の前業も知らず、儒門の天命にも拘はらず。異なる境にあそぶなり」といふ。

左内いよく興に乗じて、「靈の議論きはめて妙なり。舊しき疑念も今夜に消し盡しぬ。試にふたゝび問はん。今豊臣の威風四海を靡し、五畿七道漸しづかなるに似たれども、亡國の義士彼此に潛み竄れ、或は大國の主を身を托せて、世の變をうかひ、かねて志を遂げんと策る。民も又戰國の民なれば、未を釋てて矛に易へ農事を事とせず。士たる者枕を高くして眠るべからず。今の體にては長く不朽の政にもあらじ。誰か一統して民をやすきに居らしめんや。又誰にか合し給はんや。」翁云ふ、「是又人道なれば、我が知るべき所にあらず。只富貴をもて論ぜば、信玄がごとく智謀は百が百的らずといふ事なくて、一生の威を三國に震ふのみ、しかも

○五畿七道—日本古昔全國の區域を別ちたる稱。五畿内は山城、大和、河内、和泉、攝津。七道は京都より邊境に達する國道の名、東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の七道。

○百が百云々—百發百中などよりの造語なるべし。養由の故事。○三國—甲斐、信濃、越後。

○任ずるもの—明智光秀を指して云ふ。

○柴田—柴田勝家。○丹羽—丹羽長秀。○蛟蜃—蛟は龍の屬。蜃も亦龍の屬。海中の動物。共に未だ龍にならぬもの。五代史に「人以爲三眞蛟蜃也」と見えたり。

名將の聞えは世舉りて賞する所なり。その末期の言に、「當時信長は果報いみじき大將なり。我平生に彼を侮りて、征伐を怠り此の疾に罹る。我が子孫も即て彼に亡されん」といひしとなり。謙信は勇將なり、信玄死しては天が下に對なし。不幸にして遽く死しぬ。信長の器量人にすぐれたれども、信玄の智に及ばず。謙信の勇に劣れり。しかれども富貴を得て、天が下の事一回は此の人に依す。任ずるものを辱しめて命を殞すにて見れば文武を兼ねしといふにもあらず。秀吉の志大なるも、はじめより天地に満つるにもあらず。柴田と丹羽が富貴をうらやみて、羽柴と云ふ氏を設けしにてしるべし。今龍と化して太虚に昇り、地中をわすれたるならずや。秀吉龍と化したれども、蛟蜃の類なり。『蛟蜃の龍と化したるは、壽わづかに三歳を過ぎず』と。これもはた後なからんか。それ驕をもて治めたる世は、往古より久しきに見ず。人の守るべきは儉約なれども、過ぐるものは卑吝に陥る。されば、儉約と卑吝の境よくわきまへて、務むべき

○千秋樂—唐樂の名に千秋樂あり。唐玄宗生日の祝の樂、天下咸宴樂する日。又一に千秋萬歳と熟して長久を極言する語。

○堯葵云々—帝玉世紀、堯時有草、夾階而生、每月朔生一莢、月半則生二十五莢、自二十六日一莢落、至月晦而盡、月小則餘一莢、厥而不落、名爲二莢葵。

○粗其の意云々—人心徳川家康に歸する寓意の意。

物にこそ。今豊臣の政久しからずとも、萬民にぎはしく、戸々に千秋樂を唱はん事ちかきにあり。君が望にまかすべし」とて、八字の句を諷ふ、其の詞にいはいはく、

「堯葵日杲、百姓歸家。」

數言興盡さて遠寺の鐘五更を告ぐる。「夜既に曙けぬ。別れを給ふべし。こよひの長談まことに君が眠をさまたぐ」と、起ちてゆくやうなりしが、かき消して見えなくなりけり。左内つらく夜もすがらの事をおもひて、かの句を案ずるに、百姓家に歸すの句、粗其の意を得て、ふかくこゝに信を發す。まことに瑞草の瑞あるかな。

雨月物語 五之卷 大尾

雨月物語に關する參考資料

雨月物語は作者獨得の手腕を揮つて内外の小説を翻譯し、或は翻案したる怪異小説で上田秋成の代表作日本文學上の一大雄篇である。故に一々其の原文を求めて彼此對照する事は固より容易でない。されど本書通讀の際、其の因據を知つて讀む時は、其の興味も一層深いと信ずる。因りて聊か其の因據と認めらるゝものの中に就いて、殊に世に知られた書名作者等を左に摘記す。

一、題 號

雨月物語といふ名は自序に「雨霽月朦朧之夜、窓下編成、以昇梓氏、題曰雨月物語」と見えてゐるは文人常套の慣手段で、實は謡曲「松山天狗」「雨月」の二篇に據つて「白峯」を筆し、其の幽玄味を基調として全體に及ぼしたるものであらう。

二、白 峯

「白峯」は主として山家集撰集抄を因據として之に妖怪を添加したものであらう。山家集は

二卷、西行法師の歌集、撰集抄は九卷、同じく西行法師の作といふ。

三、菊花の約

「菊花の約」は「警世通言」の「兪伯牙捧琴謝知音」に原づき、直接は「英草紙」の「豊原兼秋音を聽いて國の盛衰を知る話」に據りて更に作者の意匠を加へたるものであらう。英草紙は奇談英草紙といふ五冊、近路行者きんじやくやうじやくの作、本名都賀氏、名は庭鐘、大阪の人。

四、浅茅が宿

「浅茅が宿」は剪燈新話の「愛卿傳」に原づいて、直接には瓢水子松雲の作である「伽婢子」第六卷「藤井清六遊女宮城野を娶る事」に據つたものであらう。伽婢子は全篇十三卷。

五、夢應の鯉魚

「夢應の鯉魚」は「古今説海」收むる所の「魚服記」を翻譯して更に日本の文藝味を多量に現はしたものである。

六、佛法僧

「佛法僧」は「怪談とのる袋」の「伏見桃山亡靈の行列の事」と「伽婢子」卷五「幽靈評諸將」とを合せて、更に「遍照發揮性靈集」の「後夜聞佛法僧鳥」の詩を添加して成したも

のであらう。「怪談とのる袋」は、臥仙子文坡の著、但し浅井了意の「狗張子」卷六「鹽田平九郎怪異を見る事」を因據したる事もあらうか。

七、吉備津の釜

「吉備津の釜」は「剪燈新話」の「牡丹燈記」に原づいて、「伽婢子」の牡丹燈籠に據つて翻案し、最も日本趣味を成したものである。

八、蛇性の姪

「蛇性の姪」は「西湖佳話」中の「雷塔怪蹟」を翻譯し、更に作者の意匠を加へたものであらう。殊に物怪の人に憑ることは我が平安朝の物語に多く見えたのから斟酌した所を作者創意のある所とするやうである。

九、青頭巾

「青頭巾」は「怪談とのる袋」の「禪座を以て怪を伏す奥州の禪僧」又「魔佛を以て一如とす悟道の聖人、附り、すたれし寺を取たてし僧の事」の二章に據り、更に唐の永嘉眞覺の著と傳ふる「證道歌」を取り雜へて此の章を成したものであらう。

一〇、貧福論

「貧福論」は續近世畸人傳岡野左内の逸事を假りて中心人物となし、議論は史記貨殖傳に原
 づき「伽婢子」の「幽靈評三諸將」に據りて趣向を定め、さて自作なる「世間妾形氣」の「武
 士の矢たけ心もつまる所は金」の意匠を加へ、更に「春雨物語」の「海賊」「目一つの神」に
 於いて揚けたる氣箴を一層擴大して、作者自身を語り、遂に天下徳川氏に歸すべき諷諭を以
 て一章を了へたものであらう。

大正十三年四月五日印
 大正十三年四月十日發
 昭和十三年一月五日改訂二十版印刷
 昭和十三年一月十日改訂二十版發行

校註雨月物語

定價金七拾五錢

著者 東京市中野區鷺ノ宮四丁目四二三番地
 佐藤 仁之助

發行者 東京市神田區錦町一丁目十六番地
 三 樹 退 三

印刷者 東京市本郷區眞砂町三十六番地
 龜 谷 良 一

印刷所 東京市本郷區眞砂町三十六番地
 日東印刷株式會社



發行所

東京市神田區錦町一丁目
 振替口座東京四九九一番

株式會社 明治書院

電話神田 (25) 二二一 四四四 九八七番番

次田 潤	校註	古事記	定價壹圓四拾錢	內海弘藏	校註	徒然草	定價七拾五錢
堀江秀雄	校註	祝詞宣命	定價壹圓	鳥野幸次	校註	土佐日記	定價七拾錢
武田祐吉	校註	日本書紀	定價壹圓	鳥野幸次	校註	十六夜日記	定價六拾錢
武田祐吉	校註	竹取物語	定價六拾錢	關根正直	校註	紫式部日記	定價七拾錢
武田祐吉	校註	大和物語	定價六拾五錢	佐藤仁之助	校註	假名吾妻鏡	定價七拾錢
金子元臣	校註	宇津保物語	定價六拾錢	關根正直	校註	更級日記	定價六拾錢
金子元臣	校註	源氏物語	定價壹圓參拾錢	鳥野幸次	校註	東關紀行	定價六拾錢
吉川秀雄	校註	落窪物語	定價壹圓四拾錢	鳥野幸次	校註	奧の細道	定價六拾錢
久松潜一	校註	堤中納言物語	定價九拾錢	顯原退藏	校註	日本永代藏	定價七拾五錢
金子元臣	校註	枕草子	定價壹圓四拾錢	佐成謙太郎	校註	謠曲	定價壹圓
佐藤 球	校註	大鏡	定價壹圓四拾錢	和田萬吉	校註	狂言選集	定價壹圓貳拾錢
和田英松	校註	增鏡	定價壹圓四拾錢	顯原退藏	校註	世間胸算用	定價六拾五錢
石橋尙寶	校註	十訓抄	定價壹圓四拾錢	佐藤仁之助	校註	雨月物語	定價七拾五錢
鳥野幸次	校註	保元平治物語	定價壹圓四拾錢	金子元臣	校註	古今和歌集	定價壹圓貳拾錢
內海弘藏	校註	平家物語	定價貳圓拾錢	尾上八郎	校註	新古今和歌集	定價壹圓七拾錢
堀江秀雄	校註	神皇正統記	定價七拾錢	佐佐木信綱	校註	金槐和歌集	定價壹圓

終

